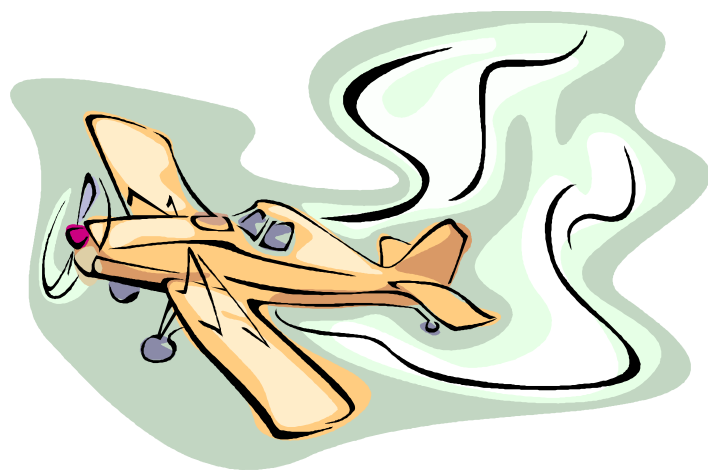


第四神風特別攻撃隊・零戦隊

海軍少尉
志賀敏美の生涯



目 次

第1章 生き立ち	1
1-1 武人の血脈	1
1-2 誕生から海兵団入団まで	13
第2章 零戦搭乗員への道	30
2-1 訓練に明け暮れた1年7カ月	30
2-2 横須賀第二海兵団	32
2-3 あこがれの三重航空隊	45
2-4 鬼の谷田部航空隊	63
2-5 地獄の徳島航空隊	71
第3章 前線基地へ	79
第4章 いざ、出撃	94
4-1 一航戦、リングア迫地に集結	94
4-2 いざ、マリアナ沖へ出撃	98
第5章 初陣、マリアナ沖海戦	116
5-1 サイパン島をめぐる攻防	116
5-2 日米母艦隊の対決	117
5-3 マリアナの死闘	119
5-4 機動艦隊、壊滅	134
5-5 「あ」号作戦の敗因	142
第6章 ゼロからの再建	150
第7章 台湾からフィリピンへ	163
第8章 特攻への道 ～レイテ沖海戦	179
8-1 一航艦、神風特別攻撃隊を編成	179
8-2 母艦航空隊、特攻出撃	188
8-3 二航艦、特攻に同意	199
8-4 敏美、特攻への道	204

第 1 章 生い立ち

1-1 武人の血脈

志賀孫左衛門

志賀敏美は、大正 13 年 7 月 14 日、福島県相馬郡石神村において、父豹象、母エンの 4 男 3 女の三男として出生した。生家は相馬藩の在郷給人（農村に知行と屋敷を与えられた藩士）、武人の旧家であり、母の生家もまた、相馬郡鹿島村の在郷給人・伏見家の出であった。それぞれ、安永 6 丁酉（1777）年の武家名簿に志賀孫左衛門、伏見太郎右衛門の名があり、同じく文久 2 壬戌（1862）年の名簿に、志賀孫左右衛門、伏見善蔵の名が残されている（奥相志）。

藩政時代、志賀家の当主は代々「志賀孫左衛門」を名乗った。天保 3（1832）年の大凶作のときの志賀孫左衛門は、馬場、片倉両村の“肝入り”として奔走し、両村から 1 人の餓死者も出さなかった、との記録が旧石神村雷神社の棟札に残されているという。“肝入り”は、陣屋代官の統括下で民政にあたり、在郷給人のなかから任命された。

江戸時代末期の孫左衛門（直宗）は、慶応 3～4（1868～1869）年の戊申戦争に参加した。第 4 軍隊長相馬将監の部隊に所属して、「平ら」方面では六間門の戦い、および手岡戦で奮戦した。相馬藩が官軍に帰順した後は北方に出陣し、駒嶺に布陣した伊達軍と 1 カ月にわたって激しい戦いを交え、官軍の先鋒としての役目を立派に果たした。その論功行賞として相馬藩主から、「短刀 1 腰、白銀 1 枚、緑頭九曜御紋」を授与されている。

明治 2 年 6 月、相馬藩は版籍を奉還した。明治 3 年 11 月、徴兵令規則が定められ、同年 7 月には廃刀断髪令が布告されて藩制最後の名残も完全に一掃さ

れた。明治8年、相馬藩の給人郷士たちは、家禄奉還書を奉呈し、明治政府から「書面願之通 聞届 御規之通 資金貸候条自今無禄士族と可相心得事」との文書と一時金を下賜され、以後、無禄の士族となった。しかし、相馬藩の藩士の大部分は給人郷士と称して村々に居住、半士半農として質実剛健な生活をしてきたから、無禄になったとはいえ家中の藩士と異なり、生活に困窮をきたすことはなかった。

曾祖父・志賀 治

曾祖父・治（おさめ）は弘化4（1847）年12月26日に生れた。明治5（1872）年、学制が公布されると、馬場山正寿院の寺小屋を馬場小学校として開校することに努力し、明治22年地方町村制が施行されると、石神村議員に選ばれるなど地域の振興に努力した。

大正10（1921）年9月15日没、享年75歳。（妻キヨ、嘉永4（1851）年6月7日～明治31（1898）年6月11日 享年47歳。後妻ヤソ 弘化3（1846）年9月6日～大正4（1915）年2月22日 享年70歳）

曾祖父・治の弟 敏武

敏美の曾祖父の弟・敏武は海軍軍人となった。明治38年5月27・28日の日本海海戦では、駆逐艦・漣（さざなみ）の掌砲長兼水雷長として参戦した。

ロシアのバルチック艦隊ロジェストウェンスキー提督の乗艦に乗り込み、ロ提督を捕虜にするという大殊勲をたて、その武勲により2階級特進して海軍大尉に、そして正七位勲五等双光旭日章・功四級金鷄勲章を授与された。しかし、帰還後間もなく発病して佐世保海軍病院に入院、明治41年7月20日、そのまま還らぬ人となった。享年45歳。

平成6年2月6日付読売新聞の特集「秘蔵写真館」に、「日露戦争 凱旋記念」として、敏武以下”漣”



の乗組員の凱旋記念写真が掲載された。(写真下) 敏武の孫にあたる志賀誠氏(静岡県在住) が公募に応じたものである。記事内容は次のとおり。

「日露戦争で日本の勝利を決定づけた日本海海戦(1905年5月)で、駆逐艦漣(さざなみ)は、敵バルチック艦隊のロジェストウェンスキー提督を捕虜にする



るという大殊勲をたてた。

写真は、”漣”の乗組員が凱旋記念に撮影したもの。第2列のあごひげの士官が、志賀さんの祖父の敏武さん。ロジェストウェンスキー提督乗船の乗艦に乗り込んだ一人だったという。海戦から帰還後すぐに長崎

県佐世保で入院。病は重く、そのまま帰らぬ人になった。

志賀家には、敵艦が白旗がわりに使ったと言い伝えられるテーブルクロスが残されていたが、第二次大戦中の物資不足のため、子供服の生地に使われてしまったといい、この写真のみが武勲を伝える。」

ロ中將が”漣”によって捕虜となった経緯を、より詳細に書いた書籍があった。「20世紀 どんない時代だったのか戦争編『日本の戦争』(読売新聞社 平成11年 P.381~P.384)で、掲載されていた記事は以下のとおり。

「明治37(1905)年5月27日から2日間、対馬沖で繰り広げられた東郷大將率いる連合艦隊と、ロジェストウェンスキー中將を司令長官とするロシア・バルチック艦隊(戦闘艦艇38隻)とが激突した日本海海戦は連合艦隊の大勝利だった。

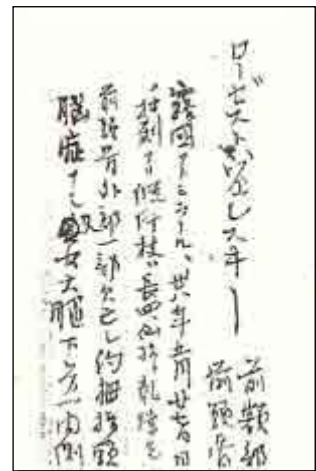
連合艦隊は戦艦 6 隻を含む 19 隻を撃沈、5 隻を捕獲または抑留し、ロジェストウエンスキー司令長官以下約 6 千人を捕虜とし、ロ軍の死者は約 4,500 人を数えた。対する連合艦隊の被害は水雷艇 3 隻、死傷者約 700 人（戦死者 117 人）だった（志岐叡彦著「西海の浮城」などによる）のに対して、わが艦隊の先頭を切った三笠は被弾 32 発、戦死者 8 人、負傷者 105 人を出したに過ぎなかった。

戦闘開始から約 1 時間後には旗艦スウオーロフが大火災を起こし、ロジェストウエンスキー中将の動向が一時不明となった。翌 28 日午後 4 時ごろ、残存ロシア艦艇の掃討作戦中の駆逐艦・漣が、白旗を掲げた駆逐艦・ベドウイを捕獲したところ、頭部などに重傷を負ったロ中将が乗艦していたため捕虜とした。

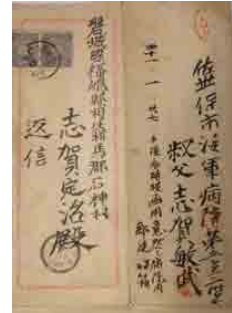
写真右は、記者が海上自衛隊の佐世保史料館で、このほど発見したロ中将ら日本海海戦負傷者の”カルテ”で、『前額部挫創』『前頭骨骨傷』などの症状が記されている。

東郷司令長官は、佐世保海軍病院で療養中のロ中将を見舞い、『勝敗は兵家の常で、恥じるに及ばない』と快癒を祈ったという。」

生家に残されているもう一つの資料は、敏武が、入院中の海軍病院から甥の定治宛に出した書簡である。封書の日付は明治 41 年 1 月 27 日、表に「返信」とあり、裏に「叔父 志賀敏武」とある。甥の定治からの見舞い状に対する礼状である。



手紙には、治療の経過が詳しく書かれている。捕虜にした敏武と捕虜にされた口中将とが、同じ海軍病院で治療を受けたのであった。



生家の 2 軒置き隣家の遠藤七兵衛氏が、敏武について次のような回想を書いている。

(子供の頃) 多男君ら兄弟といっしょに下中内の墓地で遊んだものでした。そのとき、海軍中尉志賀敏武の墓と刻まれた自然石の碑を見つけ、幼心にも下中内の墓地にはとんでもない偉い人が埋まっているんだなと感動したことを覚えています。明治時代の軍人で海軍中尉といえば神様みたいな存在でしたから。

祖父・志賀定治

志賀定治（さだち）は、明治 4（1871）年 7 月 6 日、治の長男として生れた。生家に定治の“軍隊手帳”が残されている。冒頭「所管：第 2 師団」「隊号：騎兵第 2 大隊第 1 中隊」「本貫：福島県」「族氏名：士族農 定長男 志賀定治」に始まり人相の特徴から隊後の履歴まで記録されている。

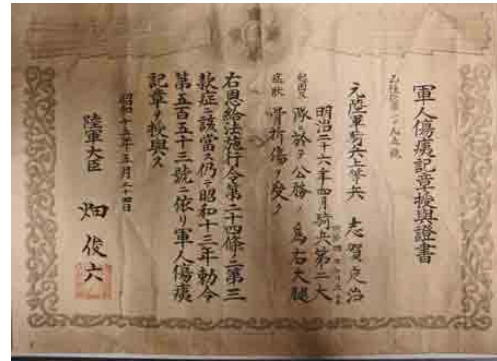
それによれば「明治 24 年 12 月 1 日現役兵として入隊、翌 25 年 10 月 6 日から 22 日まで機動演習並びに大演習のために宇都宮地方に出張、25 年 12 月 1 日上等兵に昇進、26 年 11 月 25 日傷痕により免役」とある。最後に“傷痕”とあるのは、同年 4 月 23 日、公務中に右大腿骨を骨折したことを指す。

退役後、傷痍軍人としての処遇を受けながら、父・治の意志を継いで区長および石神村議員として地方の発展に尺力した。

なお、表紙に「明治 38 年 1 月 26 日入営『征露餞別受払帳』元騎兵上等兵志賀定治」と書かれた綴り

も保存されていた。日露戦争にも何らかの関わりを持って出征したのだろうか。このとき定治は 35 歳であった。

写真下は、相馬野馬追いに出陣する定治。先祖伝来の甲冑・旗指物を身につけての記念写真である。志賀家では五三三の代まで毎年、“軍者”として出陣していた。



昭和 16 年 2 月 23 日没、享年 71 歳。妻トク 明治 5 年 2 月 23 日～昭和 17 年 3 月 3 日没、享年 71 歳)

遠藤七兵衛氏の回想に「同じ頃、志賀家の隠居所の客間でもよく遊びました。長持ちにしまってある“祖父・定治さん”の騎兵士官の軍服を持ち出し、兵隊ごっこをして遊んだものです。その軍服は黒色で、上着の胸には肋骨のようなモールが、また、ズボンの両側には縦に真っ赤な太線が入っておりました。

大きくなって分かったことですが、この軍服は明治時代の日本陸軍の騎兵将校の軍服だったそうです。」とある。

祖父・定治の弟・由巳

曾祖父・治の二男・由巳（よしみ）は、学業に優れ仙台鉄道局副参事、鉄道学院校長などを歴任し勲六等を受けている。妻コウは、二宮仕法に所縁の相馬藩士族荒至重（専八）の孫娘である。昭和21年5月没。

祖父・定治の妹・ナホ

曾祖父・治の長女・ナホは、士族・安倍明義に嫁いだ。明義は視学として台湾（台東庁）へ赴任、終戦により日本本土へ引き揚げた。その長男・義人は、東京帝国大大学院化学研究科生として徴兵を免除され、終戦後中央大学教授となる。

ナホの次男 安倍義郎

ナホの次男・安倍義郎は、昭和18年7月、新設の特別操縦見習士官（略して特操）に応募し合格した。台湾の専門学校に在学中のことだった。

台湾から御用船にて内地に向かい、同年11月、宇都宮飛行学校に入校した。4カ月半の在学期間中、敏美の父・豹象は東大在学中の義郎の兄を伴って面会に訪れ、義郎もまた、19年3月19日卒業、新任地へ赴くまでの間を利用して、母の故郷である馬場を訪れた。同じ頃、敏美はシンガポール・バトバハ基地に着任していた。

浜松に赴任したが、間もなく宇都宮に教官要員として戻され再び赤トンボに乗った。昭和19年9月、特攻隊員の募集に、「死ぬのはまだ早いが飛行機に乗ってれば何れは死ぬ。どうせ死ぬなら華々しく死のう」と応じた。



20年5月上旬、部隊長のはからい（特攻への因果を含めるため）で花巻温泉へ移動する途中、列車の中で仲間の買ってきた新聞を見て、敏美の戦死を知った。新聞を読むことのない軍隊にあって、たまたま目にした新聞だった。義郎はそこに因縁めいたものを感じたと回想する。特攻戦死者のなかには、

敏美のほか、小学校、中学校、専門学校それぞれで同期だった友達が 4 人もいて、大きな衝撃を受けている。

5 月 13 日、特攻要員として発令され、神鷲隊員となって訓練に従事していたが、幸運にも佐賀県の日達原（めたばる）飛行場から出撃する直前に、8 月 15 日を迎えた。軍人としての証拠をすべて消すようにとの軍の達しで、軍刀を畑に埋め、その他細かい所持品は焼き捨てた。復員にあたり軍から支給されたものは地下足袋 1 足、乾パン 2 袋、米 1 升到青酸カリ（米軍につかまった時の自殺用である）。

終戦前に発送した、将校行李に詰められ義郎の荷物が、8 月 17 日になって、母の実家である馬場に届けられた。発送元は部隊長名であった。特攻出撃者にとって不要となる私物（家族にとっては遺品）を、部隊長はそれぞれの生家宛に発送したと思われる。

8 月 18 日復員となったが、台湾は日本の支配から離れることが決まっていたから、そこへは戻れない。搜索を受けて迷惑をかけるから、なるべく故郷へは帰るなどいわれて、たどり着いたのが郡上八幡だった。

翌 21 年の元旦、義郎は馬場に姿を現し、50 日ほど逗留して農作業に従事した。次いで長野県の伊那町で飛行場開墾に従事したが、間もなく開墾に行き詰まる。

37 年春、家庭を持ちテレビを買った。戦争映画を見るたびに、乗客が楽しそうにしている列車の中で、1 人だけ軍刀を持ち飛行場へ向かう自分がいる。なぜ、この平和な世の中になって自分だけが出撃するのか、といった夢を見た。のちに大学助教授となる。

参照 → 安倍義郎の手記『一特攻隊員の記録』

父・志賀豹象

明治 28 (1895) 年 10 月 29 日、定治の三男として生まれた。長男、次男とも早世したので、丈夫に育てて欲しいとの祈りを込め「豹象」と名付けられた。郡立農学校（現相馬農業高等学校）を卒業したのち家業に従事、大正 4 (1915) 年 11 月 1 日、満 20 歳、現役兵として若松第 29 連隊に入隊した。

兵役期間は 2 年、通常一等兵（赤色章に黄色い☆マークが 2 つ）に昇進して除隊となるのだが、豹象は模範兵として上等兵に昇進（黄色の☆マークが 3 つ）して除隊した。その 2 日前、大正 6 年 11 月 24 日には、連隊長から「現役中品行方正勤務勩励學術技芸ニ熟達ス」とする善行証書を授与された。



昭和 2 年 9 月 29 日、勤務演習のために招集を受けて再び第 29 連隊に入隊、翌 10 月 20 日に招集解除になったが、このとき「歩兵科下士適任証書」を付与されている。除隊後は、家業に専念する傍ら定治のあとを継ぎ、区長および石神村会議員としても活躍した。



昭和 26 (1951) 年 7 月 4 日没、享年 57 歳。写真は亡くなる前年の 3 月 18 日、同窓会での記念写真から。

妻エン（敏美の母） 明治 29 (1896) 年 3 月 25 日～昭和 49 (1974) 年 11 月 5 日 享年 79 歳。

父・豹象と馬

豹象もまた、野馬追いに熱中、毎年欠かさず「軍者」として出場した。

右は、志賀家の旗指物”日天月天”を背に、悍馬にまたがった武者姿の豹象である。

豹象と馬に関するエピソードを挙げる。その一つは、昭和2年、雲雀ヶ原に競馬場が新設されたとき、ここで行われた2日目5月7日のレースに参加して入賞したことである。この日のレースについて、福島民報は次のように報じた。



「原町新設 大競馬 第2日目」の見出しに続けて、「相馬郡原町の新設競馬は4、5の両日挙行第1日目の観衆実に1万

余優勝馬投票2千余、普通入場者1千余と註せられ、実に地方新競馬として稀に見る成績を挙げたが第2日目も亦前日にいや増す盛況を呈し第1競馬は午前11時開始、左の成績を以て終了した。

▼ 第一丙組駈歩（千六百米）

一着 タキヤマ 滝本 忠

二着 ライオン 志賀豹象

三着 ハツヒデ 浜名 詮

（以下、第十甲組優勝一着バリョウまで列記あり）」

野良着姿をジョッキー服に着替えての入賞である。このとき敏美は4歳、母

に手を引かれ応援に駆けつけたはずだ。

二つ目は、昭和 16 年 4 月 7 (愛馬の日)・8 日に開催された、陸軍・農林両省主催の「興亜馬事大会」に参加したことだ。総勢 100 余騎、東京の代々木練兵場で相馬野馬追いの古式馬術を披露し、その後、甲冑姿で東京市中を騎馬行進した。



写真左上から 総大将

神旗争奪戦

東京市中行進

三つ目は軍馬である。日中戦争では莫大な頭数の軍馬が、補給輸送力として中国大陸へ送られた。戦場で倒れた軍馬は 100 万頭を超えたとされている。

これらの軍馬を生産し飼育したのは全国の農家であった。豹象は「軍馬の資格のある馬を飼養管理し、大東亜戦争にあたり軍馬の徴発に寄与した」として、昭和 17 年 12 月大阪師団長から表彰された。



父・豹象の子どもたち

豹象・エンは 7 人の子宝に恵まれた。上から 2 人が女子、中 4 人が男子、そして末子女子である。長女・操 (東京高等看護婦学校卒) は、陸軍軍属の妻として中国大陸に渡り、次女クニ子 (宮城女子専門学校卒) は医師に嫁ぎ、夫の医師は軍医として招集された。

そして 4 人の息子のうち長男・多男 (かずお)、次男・英男、三男・敏美の 3 人を戦場に送った。長男多男 (敏美の 3 歳上) は、小学校から石神村青年学校にすすみ、青年団各分団対抗剣道大会で選手とし出場し優勝するなどした。

徴兵検査後直ちに入営となり昭和16年1月現役兵として満州へと出征していった。航空特種通信隊（暗号士）として重砲連隊に所属し、昭和19年7月南方戦線のフィリピンに転進、マニラ港へ上陸した。第4航空特種通信隊としてルソン島を転戦中の昭和20年5月1日、敏美のあとを追うかのようにバレー峠の激戦において戦死した。享年24歳。

二男・英男（敏美の2歳上）も昭和19年4月18日、東部第24部隊に招集され朝鮮を経由して中国に渡った。

末弟の五三三（敏美の6歳下）もまた、終戦を間近に控えた昭和20年、相馬農蚕学校在学中、試験地・平（現いわき市）に出向いて陸軍少年飛行兵を受験した。最年少の14歳だった。最後に残った息子から、飛行兵受験の話を聞いたときの両親の心中はいかばかりだったのだろうか。

幸い8月15日の終戦で入隊することなく農蚕学校に復学した。同じクラスに一足早く海軍に入隊した同級生がいたが、彼らも終戦により無事帰還することができた。父・豹象が書いていた家計簿に、五三三が受験した日の交通費の支出、そして軍から交付された宿泊料などが記録されていた。

戦後、五三三は県立相馬農蚕学校を卒業後、志賀家の当主となって先祖代々がそうしてきたように志賀家の祭祀を引き継ぎ、また、原町市議会議員となって7期25年、地元の発展のために貢献した。平成12年4月、自治功労の故を以て勲4等瑞宝章を受賞。

妻・輝子との間に2男1女に恵まれ、長女・栄子は、日興証券から東邦銀行に移って金融スペシャリストとなり、長男・敏秀は志賀獣医科病院を開業、次男・功安は、武人の血脈を継いで海上自衛官となって航空隊に所属した。

末子・富美世（三女）は、鹿島村江垂の紺野家に嫁ぐ。

1-2 誕生から海兵団入団まで

敏美の少年時代と戦争

敏美の誕生から海兵団入団までの年表。赤字は戦争。

期間	事項
大正 13 年 7 月 14 日	福島県相馬郡石神村馬場にて誕生
昭和 6 年 4 月 1 日	石神第二尋常高等小学校に入学
昭和 6 年 9 月 18 日	満州事変勃発、日中 15 年戦争の魁となる
昭和 12 年 3 月 25 日	同校 尋常科を卒業
昭和 12 年 4 月 1 日	同校 高等科へ進学
昭和 12 年 7 月 7 日	北京郊外で盧溝橋事件勃発、日中戦争へ
昭和 13 年 8 月 27 日	敏美が最初に乗艦した空母「翔鶴」竣工
昭和 14 年 3 月 25 日	同校 高等科 2 年卒業
昭和 14 年 4 月 5 日	福島県立相馬農蚕学校に入学
昭和 14 年 9 月 1 日	第 2 次世界大戦始まる
昭和 16 年 11 月 23 日	海軍志願兵徴募試験に合格
昭和 16 年 12 月 8 日	日本海軍、ハワイ真珠湾攻撃。
昭和 16 年 12 月 27 日	同校 繰り上げ卒業
昭和 17 年 3 月 1 日	石神第二国民学校助教
昭和 17 年 6 月 5 日	日本海軍、ミッドウェー海戦で敗北。
昭和 17 年 8 月 31 日	同上 依願退職
昭和 17 年 9 月 1 日	横須賀第二海兵団に入団

敏美が小学校に入学した年に満州事変が始まり、高等科へ進んだ年に日中戦争が始まった。そして、相馬農蚕学校へ進学した年に、ヨーロッパで第 2 次世界大戦が始まり、卒業の直前、日本は大東亜戦争へと突入した。

敏美の少年時代の節目、節目が戦争のそれと重なっていた。まるで戦争の申

し子のようにして生まれ、運命の糸に導かれるようにして戦場へと向かっていった。この節では、海兵団に入隊するまでの敏美の人生にスポットをあてる。

幼年時代

敏美は男兄弟 4 人の 3 番目、上 3 人が 2 歳ちがいで続き、一番下は敏美の 6 歳下だったから、もっぱら遊び相手は上の男 3 人が中心だっただろう。敏美の負けず嫌いや負けん気は、兄 2 人とその仲間たちによって育まれていった。その、遊び仲間に遠藤七兵衛氏がいた。2 軒おき隣家の息子で、長兄・多男と同じ大正 9 年生まれである。その遠藤氏が子供の頃の敏美について次のように語っている。

物心がついたときから多男君らと遊び仲間でした。敏美君は 4 歳下、兄貴同様餓鬼（がき）仲間です。育ったから、なかなかの頑固者で、頑張り屋と我慢と負けん気の強い土性骨を持った子供でした。

遠藤七兵衛氏は、小学生時代に馬場修養団を結団した。そのときも、敏美は兄たちといっしょに入団し、年上の団員と肩を並べ一歩も後れをとることなく、修養団活動に参加した。

日頃の遊びでも勇猛果敢で、常に先輩のやることにアタックしていた。冬の寒い日など、よく足から血を流しながらついてきた姿が目には浮かびます。そのとき私は、この子が大きくなったらどんな大人になるのだろうか、舌を巻いたものでした。（遠藤七兵衛氏）

小学校時代

昭和 6 年 4 月 1 日 敏美は石神第二尋常高等小学校に入学した。生家からまっすぐ北へ 2.5 キロの道のり。西には阿武隈の山並みが連なり、東は広大な雲雀ヶ原が広がる。通学路の夏は暑く、冬は国見山下ろしの寒風が厳しかった。木綿の着物に布製の鞆を右肩から左に下げ、往復 5 キロの道を歩いて通

った。



写真 石神第二尋常高等小学校入学式
前から2列の左端

同級生のひとり坂本恒三は、小学校時代の思い出を次のように語っている。

わたしたち同級生は57人、そのうちの約半数25人が馬場の生徒でした。25人のうちすでに物故された方は16名ですが、そのうちの戦死者は敏美君を含めて7名、つまり馬場出身の同級生の4人に1人が戦死しています。

敏美君についての一番の思い出は、負けず嫌いの少年だったことです。勉強は勿論ですが、スポーツも万能で跳び箱・鉄棒は大の得意、駆け足も早く運動会での部落対抗では欠かせない選手でした。卒業までの6年間、無欠席で精勤賞を受けた一人です。敏美は、運動会といえはいつもトップで走って母親を喜ばせていたという。海兵団に入ってから、大運動会の武装競争で、1番となって19分隊の勝利に貢献したと両親宛に書いている。

下の兄弟3人で、よく、薄暗くなってから屋敷裏の沢に魚を獲りに行った。次兄の英男がカンテラで水面を照らし、その明かりをたよりに敏美が水中に潜む魚を篠竹の先に仕掛けた針で引っかける。そして、獲った魚を後ろからついてくる末弟の魚籠に入れるのだ。相手は魚である。いくら暗がりの中で眠っているとはいえ、気付かれないように獲るのは容易ではなかる

う。抜群の集中力と反射神経があったからできたことだ。後年、敏美をして戦闘機乗りにさせた才能は子供の頃から存分に発揮されていたのだった。

高等科へ進学

昭和 12 年 4 月 1 日、敏美は石神第二尋常高等小学校の尋常科 6 年を終了して高等科へ進学した。高等科の 1 年先輩に坂本春雄がいた。同じ大正 13 年生まれだが、敏美は 7 月、坂本は 2 月生まれだったから、遅生まれの敏美は 1 年遅れて入学した。坂本春男はこの頃の敏美について次のように回想する。

1 番の思い出では、僕が高等科 2 年の 4 月、馬場少年学友団の団長を命ぜられたとき、高等科 1 年の敏美君を副団長として、二人で力を合わせて活動する事になったことです。時あたかも支那事変が勃発した年でした。

馬場少年修養団として新しい行事をやろうと相談し、寒稽古として日曜日は早朝 5 時に起きて、青地に白字の馬場少年修養団旗を先頭にして、ワッシュョイ・ワッシュョイの掛け声で松並木の県道を夜の森公園まで走ったり、ある時には、横川分教場や学校の鎮守・高倉神社に早朝参拝して神社掃除をした事などが走馬燈のように思い出されました。

一緒になって悪ふざけをした事もありました。押釜部落にお釜様と呼ばれ、地元の信仰篤い押釜神社がありますが、その境内に小さな池があり、この池を掻き回すと必ず雨が降ると云う伝説がありました。現在は基盤整備され明るい境内になっていますが、当時は薄暗い境内で薄気味悪い場所でした。

群集心理と好奇心から本当に雨が降るのかどうか掻き回してみよう、という事になり、敏美君と僕の外 2 名の 4 人で境内に行き、池の水を竹や棒杭で掻き回して逃げるように駆けて帰って来たのです。明るく朝起きてビックリしました。雨が降っていたのです。

早速 4 人で集まり話し合っって本当に神様っているんだナァと驚き、それをきっかけに信仰心が生まれたような気がしました。

昭和 13 年に学友団長となった敏美君が、毎月 1 回は地区内の神社やお不動

尊の掃除を修養団の行事にした事を思う時、お釜様での悪さも決して無駄ではなかったと反省したものでした」

生家類焼（昭和 11 年 6 月）

この年 6 月、養蚕で最も忙しい時期の午前 3 時、隣家の蚕室から出火して隠居、本宅等 4 棟が全焼し、蔵だけが残った。父・豹象は茅葺きの屋根に上がり消火に努めたが滑り落ちて指を骨折した。敏美が高等科 1 年のときだった。坂本恒三ら地元の同級生が学用品などを見舞い品として贈った。

父は、骨折にくじけることなく直ちに復興に着手した。建築用材をバッカメキ国有林から特売を受け、伐採から山出し、そして加工等々、農作業を続けながらの再建作業である。子供たちの手を借りながら懸命な作業が続けられた。



昭和 12 年 7 月、支那事変が勃発した。村からも何人もの若者が招集され出征していったが、なんとか部落の人達の手伝いを受けながら、9 月 10 日無事上棟式を行い、暮れまでに母屋を完成させた（写真）。父親を助けて母屋再建に尽くした多男や敏美は、新しい家に住むことわずかで帰らぬ人となってしまった。

高等科 2 年終了

敏美は、昭和 14 年 3 月 25 日高等科 2 年の課程を修了した。小学校に入学してから 8 年間無欠勤で通し精勤賞を受けた。当時の思い出を小学校の同級生・岡田栄は次のように回想する。

昭和 14 年高等科を卒業した。この頃、軍事強化による経済不況で、どの家

庭でも苦しい生活を強いられ、特に女子生徒は卒業を待たずに中退し、卒業証書を手にしたものは半減していたのです。いかにどん底の暮らしであったかは、あの戦時体制から 50 余年経った今、今日の生活環境から到底思い起こそうにも想像もつかないのも無理のないことです。

(岡田栄『若鷲、敏美君を偲ぶ』(国見の里から) 平成 6 年)

相馬農蚕学校時代

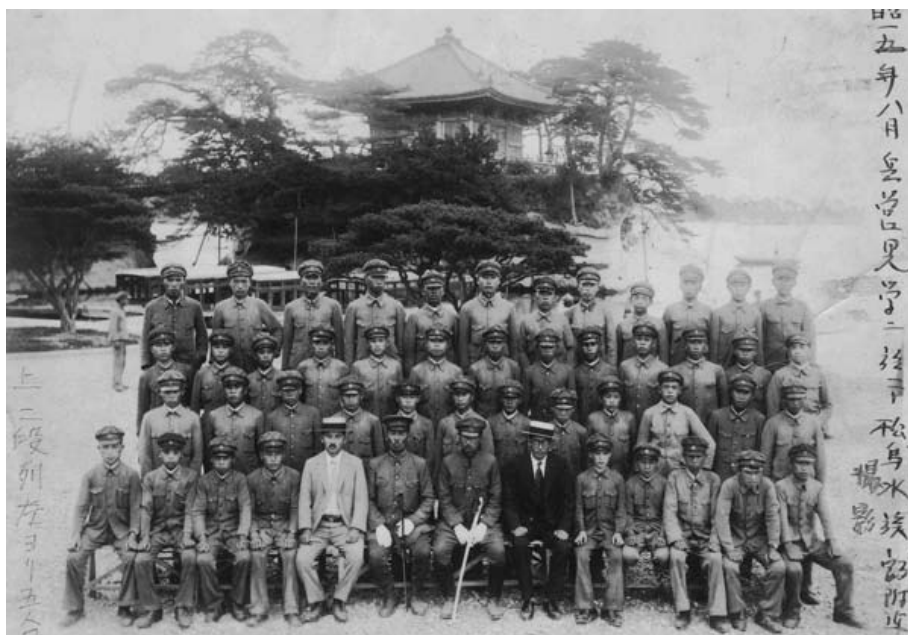
昭和 14 年 4 月 5 日、県立相馬農蚕学校（現相馬農業高等学校）の本科に進学した。

同校は、福島県浜通り唯一の農業専門校として明治 36 年 6 月 1 日に創設された。当初は郡立だったが、大正 10（1921）年 4 月に県立に移管、修業年限 3 年、小学校高等科 2 年卒業者を入学資格とする甲種農業学校となった。

同年 6 月 10 日には、学校教練振作のため、陸軍の配属将校が配属され、週 2 時間の軍事教練と、年 6 日の野外演習が実施されることになった。

やがて、満州事変から支那事変と戦時色が濃厚になるにつれて、陸軍の兵営生活の規律や様式が学校生活のモデルとして持ち込まれた。それは、週番勤務、朝礼、教室、実習、通学、校外、家庭、学習、敬礼、服装、更には言語という生徒の全生活領域にわたったのである。（「相農史（上巻）」より）





昭和 15 年 8 月、兵営見学に行ったおり松島において撮影)

飛行場造りに勤労奉仕

同期入学の佐々木弘（浪江町在住）は、この頃の思い出を次のように語ってくれた。

昭和 14 年 4 月、相馬農蚕学校 A 組に入学、実習班も 3 年間一緒に、整列するときには何時でも私は敏美さんの前でした。敏美さんは何の実習も真面目で、機転もきき良い友でした。雲雀ヶ原飛行場造りの畚（もっこ）担ぎ、トロッコを押しての土運びや地均し、滑走路や格納庫前のコンクリート打設などの奉仕作業です。敏美君と 2 人で、コンクリートミキサーを使った練り方で、1 日に 200 袋ものセメント袋を開けたこともありました。

当時、コンクリートミキサーは大した機械だと思っていましたが、今考えて見ると至って幼稚な機械でした。作業中一生懸命の余りに同級生・戸浪甚一君のお尻を万能でちょっと傷つけ医者に連れて行った事などが、今も私の脳裏に残っています。そして、完成しないうちに陸軍熊谷飛行学校原

町分教所としての飛行場開きの行事が行われ、相農の郷土芸能を披露しました。

また、現在の相馬東部工業団地、元の新沼干拓での田植え、田の草取り、そのときは足にヒルがたかり血を吸われながら作業、宿泊は機関場でした。当時の中村駅から新沼干拓までは往復徒歩でした。それから増田飛行場、現在の仙台空港の地均し作業、玉浦小学校に一週間の宿泊、蚊に刺され刺されながらの勤労奉仕、作農の郷土芸能の披露などすべて一緒でありました。この様に勤労奉仕の毎日で満足な授業も受けませんでした。

相農の生徒が全力投球した雲雀ヶ原の飛行場は15年6月、熊谷飛行学校原町分教場として開場し、7月から9月まで第84期招集下士官学生48名、11月からは第86期招集下士官学生48名が教育訓練を受けた。九五式練習機という複葉、複座の赤トンボ（実際は黄色だが）、九七式戦闘機（低翼、単葉、単座）、九五式戦闘機（複葉、複座）などが毎日のように空中を舞った。相農への通学路は約5キロ、その半分が飛行場に沿っていたから、敏美は毎日のように大空を舞う飛行機を眺めながら歩いた。

蔬菜栽培にも情熱を

敏美は蔬菜栽培にも情熱を注いだ。毎年開催される校友会主催の農蚕物品評会に毎回出展して入賞した。特に、紀元2600年を記念して開催された校友会・相馬郡農会等10団体の共催による拡充産業共進会では、蕪菁（かぶ）を出展し、審査長・県農業技師の審査を経て福島県知事から3等賞を授与されている。



佐々木弘の記憶に「台湾のおばさん」がある。

佐藤繁雄先生の蔬菜園芸の時間だったと思いますが、『里芋の花を見たこと

のある人?』との質問に対して敏美君はすぐに挙手した。先生が『里芋の花は内地では咲かないのに何処で見たの』と聞くと、『台湾のおばさんが送ってよこしたのでそれで見ました』と答えた。先生の「志賀にはいいおばさんが居るね」の一言に一同大笑いをしたことがあって、それから、志賀君は「台湾のおばさん」という縛名で通った。



「台湾のおばさん」とは、祖父・定治の妹・ナホの

ことである。夫・安倍明義（台湾庁視学）に従って台湾に渡っていた。

学生生活、最後の年

4月1日、敏美は3年に進級した。この年の新入生に、同じ馬場出身の岡田良雄（第23回卒・双葉郡浪江町在住）がいた。彼の回顧録によると

「敏美さんは2年先輩で、小学校の頃からよく存じ上げておりました。敏美さんに声を掛けられて、お付き合いをいただいたのは敏美さんが相農3年生のとき。兄弟のように歓迎してくれたのです。

校門を入ると、霜降り生地の制服に学帽、白色のゲートルをきりっと巻いた凛々しい上級生を見て、何故か皆んな素晴らしい上官のように感じたものでした。礼儀作法の厳しい校風の中に、3年生は新入生を特に可愛がる伝統があったわけで、第4学友区の先輩諸兄には、あれこれとよく面倒をみて下さったことを思い出します。相農校で名高い夜の森公園での春の大運動会や夏休みのレクリエーション、校内実習、軍事教練など、一つ一つが楽しい青春の一頁となって残りました。

また、敏美さんの卓越した学業と健康美は一際目立った存在でもありまし

た。桜花舞い散る夜の森丘の原頭で相馬地方唯一の相農大運動会を目前に、予行練習は先生に代わっての3年生が指導に当たり、学友区ごと先輩に面倒を見て貰いました。「(相農が)情緒豊かな青年時代の精神修養の場であったことは、今でも楽しく懐かしく思います。運動会の本番には敏美さんは高学年の短距離、障害物競走の何れも一着の健闘ぶりでその活躍には大きな声援と歓声が湧き上がったものでした。本当に素晴らしい印象が残っています。



夏休みのキャンプには原釜海水浴場に行き制服を脱いだお付き

合いで、釜めしや取り立ての魚料理はとっても、うまかったこと。敏美さんは水泳も達者で、岸を離れ遠くの沖合まで泳いだことに驚かされました。学期末試験には先輩宅へ招かれ、校訓と校長の写真を飾った勉強室で夜更けを忘れテストの解答や助言を親切に教わったことを一生忘れません。

平和で楽しい蛍雪時代もその年昭和16年12月8日未明、ついに大東亜戦争が勃発となり緒戦に大歓声が上ったのであります。その頃、既に大陸戦線では多くの兵士達が犠牲となっていたのであります。新たな太平洋方面での開戦により敏美さんたち3年生の卒業は12月末に繰り上げられ、めでたくも卒業となったのであります。

懐かしい先輩達との別れに「先輩よ、頑張れ」「後輩よ、後から続け」といった、燃えるような相農魂の決意の中にただひたすら諸兄のご多幸と成功を祈りつつ、唄う校歌には止めどなく涙が滲む雰囲気でした。



敏美さんが軍人としての出征を間近に控えたころ、たまたま野馬追祭の本陣山で出会ったことが思い出されます。志賀家では代々軍者として出陣してきた家柄で、父豹象さんが指揮する勇壮な姿は一際魅力を感じたものでした。敏美さんも学生騎馬武者として出馬した経験の持ち主だったので、彼の語る伝統相馬野馬追の壮観さに耳を傾けながら、楽しいひと時を過ごしたことが今でも脳裏に浮かびます。この日が永久の別れになるとは夢にも思いませんでした。

このように志賀さんの家は先祖伝来の武門の誉れ高い家で、そこに育った敏美君に対する精神的な影響は極めて大きなものだったと推測できるのです。このようにして敏美君に流れる武門の血と、相馬農蚕学校を頂点とする軍国主義教育が、敏美君を尽忠報国の烈士として、悠久の大儀に殉じせしめたのではないかと思うのです。」

● 零戦の誕生

3年後に敏美が搭乗することになる「一二式艦上戦闘機”零戦”」は、敏美の相農入学と同じ日に誕生した。同年7月6日、岐阜県の各務ヶ原飛行場で海軍による初の試験飛行が実施され、即、量産体制に入った。翌年6月には中国戦線に配備されて、9月13日、13機の零戦が重慶上空でソ連製の戦闘機27機と交戦し、たちまちのうちに全機を撃墜、零戦の被害は数機が機体に被弾しただけであった。大東亜戦争終結まで海軍の第一線戦闘機として活躍。総生産機数は1万430機に達した。同一機種でこれほど多数

生産された飛行機は、他に類を見なかった。

●空母「翔鶴」「瑞鶴」竣工

”零戦”の登場に2年遅れの昭和16年、敏美が零戦とともに乗艦した航空母艦「翔鶴」と「瑞鶴」の2隻が建造された。「翔鶴」は16年8月8日横須賀海軍工廠で、「瑞鶴」は1カ月遅れの9月25日に川崎重工神戸造船所において竣工した。軍縮条約が期限切れとなって最初に建造された本格的な空母で、いずれも、基準排水量2万6千トン、最大速力32ノット、搭載機数72機。

この年11月、敏美は海軍を志願した。

●日本海軍、ハワイ真珠湾攻撃

「帝国陸海軍は、本8日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」。昭和16年12月8日の朝は、この衝撃的なニュースで明けた。この日だけでも香港攻撃、マレー半島奇襲上陸成功、シンガポール爆撃、フィリピン大空襲、真珠湾攻撃の大戦果の発表が相次ぎ、国民の多くを狂喜させた。

長兄・多男出征

昭和16(1941)年1月20日、長兄の多男が現役兵として招集された。鮮満国境を越えて28日、極寒の地・満州の牡丹江に到着した。第9師団通信分遣隊で通信士として活躍。昭和19年6月、満州を発ってフィリピンへ向かった。

敏美、海軍志願兵検査に合格

同年11月23日、敏美は海軍志願兵検査を受験した。試験会場の原町小学校に集まった志願者は約200人、原町周辺の町村から役場の兵事主任に付き添われて試験場に入った。試験場には徴募官と称する海軍大佐を筆頭に、軍服姿や私服の試験官が数名並んでいた。試験科目は数学と国語の2科目、合格ラインに達した者が次の身体検査場に移された。生まれて初めて他人の前でパンツを脱がされ、男のシンボルを軍医にグッと握られた。

身体検査の途中でも学科テストの良くなかった者は名前を呼ばれ、検査を中止して退場していった。最後の口頭試問にも合格した敏美は、徴募官から「合格証書」を交付された。「合格証書」の兵種欄には「第一志望水兵、第二志望 機関兵、第三志望整備兵」と記載されていた。志望兵種に「飛行兵」がなかったのは、年齢超過で受験資格がなかったからだ。しかし、海兵団での訓練中に、飛行兵への転科試験を受ける道があった。そして、これが飛行兵になるための最短コースでもあった。



「合格証書」の裏には、「この証書は検査に合格したという証書であって、この中から更に選抜されて採用者が定まる。しかし、合格をした者はすべて採用されるくらいに考えて、現在の職業にいよいよ精出すとともに心身を鍛練し、勉学にいそしんで立派な海軍軍人なるよう心掛けねばならぬ」と記載されていた。海軍は、採用者を決定するに当たって思想上の調査も行っていた。

繰上げ卒業

太平洋戦争の勃発で、中等学校は翌年 3 月の卒業機を待たず繰り上げ卒業となった。敏美、海兵団入団の 9 カ月前であった。

横川分教場時代

分教場の先生

海兵団への入団まで、母校・石神第二国民学校（注）の助教諭の職についた。

昭和17年3月1日付採用で赴任先は、横川溪谷を3キロほど遡った山間の横川分教場（昭和11年8月28日石神村横川字鉄山に開校、昭和40年4月1日廃校。今もその跡が残されている。）であった。生徒数は約40名。

- 注：昭和16年の学制改革で、これまでの小学校を国民学校に改め、初等科6年、高等科2年の8カ年を義務教育年限と定めた。

真珠湾の9軍神発表

3月6日大本営が、前年12月8日の真珠湾攻撃で戦死した特別攻撃隊員9人の氏名を発表した。海軍省は2階級特進、感状授与と発表。大阪朝日新聞社は「特別攻撃隊を讃える会」を大阪朝日会館で開催。7月から軍神の一人をモデルにした獅子文六の小説「海軍」を連載、人気の高まりと同時に新聞の発行部数を飛躍的に伸ばした。「軍神」の生家には「軍神之家」の表札が立てられ全国からの訪問者が相次いだ。

敏美の後輩・湊昭男（相農昭和20年卒業）は、この時期相農の入学試験を受けた。その時の印象を次のように語っている。

「試験は、口答試問が主で、その中にハワイの真珠湾攻撃で戦死された9軍神の氏名を聞かれた記憶がある。入学して1年生の時は、まだ普通科の授業時間も多かったが、2年、3年と進むに従って普通科の授業は次第に少なくなり、代って軍事教練や農場の開墾、人手不足となった一般農家への援農作業等の奉仕が多くなった。学生生活はますます苦しくなったが戦争に勝ち抜くためと不平も感じなかった」

「そのうちに戦争はますます激しくなり、軍隊に入隊する年齢も引下げられ、われわれ生徒も入隊できるようになり、海軍では予科練習生、陸軍では特別幹部候補生、あるいは少年飛行兵として先輩・同級生が次々と入隊した。予科練では先輩の志賀千代蔵さん、同級生では小澤富雄君が入隊し、陸軍では特別幹部候補生として門馬香君が入隊した。小澤富雄君とは同じC組であり、入隊の前夜には小澤家に泊まりがけで送別会を行い、俺も直ぐに行くからと励ましたことを記憶している」

戦局は下り坂へ

● B25、本土を初空襲

昭和 17 年 4 月 18 日、16 機の B25 爆撃機が空母「ホーネット」から飛びたち、13 機が東京を爆撃し、残りの 3 機が名古屋、大阪、神戸を爆撃して中国に飛び去った。空母から日本列島までの約 900 キロ飛び、そして、約 2、000 キロ先の中国大陸東部へ着陸させたのである。この東京初空襲は、米国民を狂喜させた。

● 日本海軍、ミッドウェー海戦で敗北

6 月 5 日から 6 日のミッドウェー海戦で、日本海軍は大敗を喫した。出撃した空母 4 隻のすべてを撃沈されて、ミッドウェー諸島を占領し、それを手がかりにハワイ・オアフ島に侵攻するという日本海軍の夢は完全に消えた。

しかし、大本営はこの敗戦を隠し「米空母 2 隻（エンタープライズ、ホーネット）撃沈、撃墜した飛行機約 120 機。わが方、空母 1 隻喪失、同 1 隻大破、巡洋艦 1 隻大破、未帰還 35 機」と発表した。実際は、撃沈したのは空母ヨークタウン 1 隻のみであったのに対して、わが方は空母 4 隻（赤城・加賀・飛龍・蒼龍）沈没、搭載機 257 すべてを喪失、重巡三隈沈没、戦死 3,057 人という大損害であった。新聞もまた大本営の発表に輪をかけ、日本軍の勝利の記事で紙面を埋め尽くした。

● 米軍、ガダルカナル島に上陸

8 月 7 日、米豪軍による反攻が開始された。主力空母 4 隻を失った日本海軍が、ガダルカナル島に航空基地の建設を開始し、第 1 期工事を終えた直後の 8 月 7 日早朝、1 万 2 千人のアメリカ軍が、艦砲射撃と航空機の支援の下にガダルカナル島に上陸を開始したのだ。

守勢に立った日本側は、基地設営隊と海軍陸戦隊と合わせて 600 名足らず。日本軍はアメリカ軍の攻撃に圧倒されて背後のジャングルに逃げ込み、完成間近の飛行場はアメリカ軍の手に落ちた。以後、このそれほど重要でもない島の争奪に日米両軍は意地となり、翌 18 年 2 月 7 日まで壮絶な戦いが続けられ、日本海軍は艦艇 24 隻、飛行機 893 機、搭乗員 2,362 名を失

って撤退した。

横須賀第二海兵団へ

敏美のもとへ「海軍志願兵採用証書」が届いたのは、戦局が下り坂に向いはじめたそんな時だった。

第一海軍志願兵徴募区
福島県相馬郡石神村 志賀敏美
右海軍水兵ニ採用徴募ス
昭和 17 年 9 月 1 日横須賀第二海兵団ニ入隊スベシ
横須賀鎮守府

8 月 31 日付「依願退職ヲ命ズ」の辞令を福島県から受け、敏美は、横須賀第二海兵団に向かった。

第2章 零戦搭乗員への道

2-1 訓練に明け暮れた1年7カ月

昭和17（1942）年9月1日、敏美は零戦搭乗員への道を歩み始めた。この章では、1人前の戦闘機隊員として南方の前線基地へ向かうまでの1年7カ月にスポットを当てる。この期間、敏美が辿ったコースは次表のとおりである。

所属	期間	教 程
横須賀第二海兵団	3 カ月	一般水兵
三重海軍航空隊	4 カ月	第15期丙種飛行予科練習生（座学と体育）
谷田部海軍航空隊	6 カ月	第31期操縦専修飛行練習生（初歩教程） （練習機＜赤トンボ＞操縦訓練）
徳島海軍航空隊	4 カ月	第31期操縦専修飛行練習生（実用機教程） 戦闘機操縦専修科

敏美の飛行練習生時代は、次の同期の3名によって明らかになった。

■永峰 肇

大正14年4月1日生まれ、敏美より9カ月年下だが、海兵団（佐世保第二）入りは、敏美より4カ月早かった。その後、丙飛15期として三重空・谷田部空・徳島空と敏美とまったく同じ航空隊で学んだが、敏美より10日ほど早く、第一神風特別攻撃隊敷島隊として中野磐雄とともに出撃して戦死した。

森史朗著「敷島隊の五人」（文春文庫・単行本1995年光人社）に書かれた、永峰についての記事を通じて、敏美の味わった過酷な体験を知ることができた。

■田邊準一

徳島空で敏美と同期だった。入隊時の自己紹介で同じ福島県人と分かって、友愛を深め、連日の飛行訓練や軍事学の勉強等々、つねに席を同じくして語り合い、励まし合ってきた仲だった。徳島空を卒業後、永峰肇とともに築城空へ転勤となり、敏美とは東と西に別れ別れとなった。

戦後、昔の記憶をたどりつつ敏美の生家を探り当て、敏美の戦歴が明らかになる糸口を作ってくれた。福島県いわき市在住。

■原 重蔵

永峰肇と同じく、三重空から徳島空まで敏美と同期、さらに転勤先の厚木空で19年2月10日まで敏美といっしょだった。前掲「敷島隊の五人」(上)の395ページに、原重蔵の記憶に残る“罰直”の話が登場する。大阪府岸和田市在住。

以下、これら戦友の証言・記録・その他の文献等をてがかりに、海兵団に始まり、一人前の零戦搭乗員として巣立つまでの敏美の足跡を追うことにしよう。

写真は、飛練同期の田邊準一氏(右)と原重蔵氏(左)



(平成14年9月13日、靖国神社にて開催された「零戦搭乗員会解散式」に出席した折りに撮影)

2-2 横須賀第二海兵団

入 団

昭和 17 年 8 月 31 日、敏美が横須賀海第二兵団に入団する日がきた。1 年先輩の坂本春雄は、当日を次のように回想する。

国旗や祝い幟で飾られた生家に、部落の区長・隣組・同級生・親戚その他大勢の人びとが集まった。顔触れが揃った頃、地区の鎮守綿津見神社にて



“千度詣り”をして武運長久を祈願した。

まず、遠藤敏区長から激励のことばがあり、次いで国防婦人会長坂本トミ様から、誠心こめて縫い上げた千人針の腹巻きが敏美君に手渡された。最後に、在郷軍人分会長の松本忠実様から奉公袋が手渡され、彼の音頭で万歳三唱して出陣式はお開きとなった。

その足で、親戚や友人は藩政時代から戦の神として信仰されている懸森神社に参拝登山して、重ねて戦勝祈願と武運長久を祈願し、さらに、原ノ町駅まで軍歌を歌いながら行進が続いた。そんな中を、元気一杯で出征していった敏美君の姿が目に焼き付いています。

駅のプラットホームでは、あふれる日の丸の旗に敏美の胸は震えた。旗の波が見えなくなって我にかえると、送ってくれた人たちの期待に応えなければという熱い思いと、大海原に 1 人で船出したような不安とが交差した。

敏美といっしょに入隊する石神村横川地区の池田四郎も同じ思いで窓から身を乗り出して手を振った。池田四郎は、敏美が最近まで助教諭をしていた横

川分教場の出身で、昭和4年生まれの13歳。志願兵の最低資格年齢を満たしたばかりだった。2人とも同じ日、同じ場所で海軍志願兵徴募試験の合格証を手にしていた。

村を挙げて出征兵士や入隊者を歓送する行事は、敏美のときが最後となった。敏美を見送った坂本春雄の場合（昭和19年出征）は、ひっそりとしたものだったという。

あれから間もなく防諜のため駅までの見送りは禁止されました。僕が入隊する時の見送りは馬場と大木戸の境界まで。そこで区長志賀茂様から激励の言葉をいただいただけで、万歳三唱も出来ず、そこからは僕を含めた3人だけで駅まで歩きました。駅からは長野の林一郎君と2人だけで若松の東部24部隊に入隊、陸軍衛生兵として教育隊に入り軍務に服しました。

敏美は、原町駅を出発してからのちの様子を、通信の許可がでた日、さっそく両親宛に書いた。便せん4枚にびっしりと書いてあったが、現存するのは最初と最後の2枚だけである。

（便せん1枚目）

「謹啓 漸くの間御無沙汰致して居りました 自分も平駅（現いわき駅）には（午後）6時20分頃到着、停車場は旗の波で美しかった。悦男さんといっしょに下車、少し町通りを散歩する。時間が余ったので旅館に入って休憩をする。8時～10時となり、そこを出て、ふたたび駅へ来ると、さっきよりも騒ぎが多くなっていて、浜3郡相当集まった。11時30分、県の係官が兵事主任を集め、各町村別に氏名を呼びあげた。

人員点呼。9月1日午前0時48分、列車にて上京、上野駅には朝方到着。次は東京から辻堂へ省線（現JR）にて行く。すると、辻堂駅には海軍士官、下士官が居って、一さいの世話をやってくれた。それから2、3名の者に引率されて宿へ着く。1軒に数十名、桜井さんも居った。次ぎの日2日、辻堂6時発構須賀行き直通電車で出発、9時頃に第二海兵団の

門をくぐる。すると海軍各班長・・・」

入隊者が横須賀の海兵団に到着するまでは、県または市町村の役人が付き添うことになっていた。

(便せん 4 枚目) 「・・・腕、背中にやられ皆話の種々であった。7 日、この日はレントゲン写真の合否決定。分隊内に 2、3 名の不合格者があった。本日午前中は、分隊長・分隊士の挨拶。午後、自分の道具の整理。これまでは、毎日作業服にて種々の事業を行って居た。今日より通信を許され 1 日中、筆を取って居った。余り忙しいから、これで終わります。

それから 礼状ですがこれは学校、役場、区長、婦人支部長、班長、隣保班長、横川先生、志賀初治等へ出しました。そちらから (手紙を) 出す時は 横須賀局留置、横須賀第二海兵団第 19 分隊 1 教班宛御願ひ
父上様 」

海軍四等水兵

海兵団は、海軍の新兵を教育する機関で、横須賀、呉、佐世保、舞鶴の 4 カ所 (終戦時には 16 カ所) に置かれていて、関東以北の者は横須賀と決められていた。陸軍の新兵は、それぞれの部隊で訓練され、新兵教育が終わっても同じ部隊にとどまって軍務に服したが、海軍の新兵は海兵団において、4 カ月から 5 カ月教育し、軍艦なり陸戦隊なりに配属した。艦は狭く、万一の事故の場合は艦そのものが危険にさらされるので、海軍兵として必要かつ最低限の訓練を海兵団でおこない、そのあと実施部隊に配属したのである。

海軍四等水兵志賀敏美は、第 19 分隊第 1 教班に配属された。分隊長は海軍特務中尉千葉重五郎。肩書きの“特務”は、最下級の四等兵から叩き上げたノンキャリアの海軍士官につけられた。いわゆる超ベテランである。

1 個分隊の編成は 180 人、これを 15、6 人ごとの教班に分け、下士官クラスの教班長がいきさきの面倒を見た。敏美らを迎えた千葉第 19 分隊長は、それぞれの親元に、次のような文書を送った。

「(前文略) 小官四等兵分隊長を拝命し、直接子弟敏美の教育を担当することと相成り候に就いては、教育の初頭に当たり分隊長としてご挨拶かたがた当海兵団に於ける四等兵教育の概要並びに生活状態等ご通知申し上げ候。」に始まり、海兵団での教育、生活、食事、被服、疾病、俸給、金銭、面会、帰省、その他 12 項目にわたって詳しく書かれてあった。

特に傍点が付された箇条は、次のとおり。

- 家庭等からの送付品は一切許可しない。(もしあれば) 返送する。
- 病気の治療には手段を尽くしているので、薬品等の送付はまったく不要どころか迷惑である。
- 月 6 円 20 銭の俸給を支給、これで日用品や菓子代等は賄えるので、家庭より金銭を送付することは好ましくない。やむを得ない場合は、分隊長宛「誰に渡してくれ」として送るように。
- 帰省は父母妻(内縁は認めず)子の重病、死亡または本人でなければ整理がつかない家事のある場合に限られ、その場合も市区町村長や警察署長等の証明を受けた願書を海兵団長に提出すること。
- 分隊長や教班長に贈呈の意味で物品を送ることは甚だ迷惑につき堅く謝絶する。
- 往々海軍の服を着た不良者が家庭を訪問し、金銭や物品を詐取する例があるので注意すること。
- 現金を封筒に入れたり荷物に挟んで送ることは郵便法の違反になるのでしないように。

初日、めいめいに、服の入った衣囊(いのう・キャンパス製の四角な細長い袋)と、針・糸・石けん・硯(すずり)・筆・便せん・教科書(すべてポケット版)などが入った手箱が渡された。めいめいの小銃・釣り床(ハンモック)は、銃架やネッチング(釣り床格納庫)に整然と並べなければならない。郷里から着てきた衣服はすべて脱ぎ捨て、ひとからげにして生家に送り返され

た。あとは、3尺褌（ふんどし）の締め方から軍服の着方まで教えてくれた。

軍服といっても「ジョンベラ」と呼ばれた水兵服、いわゆるセーラー服であった。四等水兵に階級章はつかない。海兵団生活を耐え抜いたものだけが三等水兵に進級し、そこで始めて海軍の員数に入れられるのだ。

海兵団での教育期間中は、時計も金も教班長預かりとなり、外出、通信もできなかった。夜は、釣床のカンバスを高く吊して寝るのだが、入団3日目あたりから釣床訓練が行われる。

釣床は戦争になったら砲塔や艦橋の弾よけに使われる。そうした緊急の場合に確実かつ早く釣床をくくれるように訓練するのだが、やがて、「釣床下ろせ」を18秒でやれといったような命令になる。はじめは優しく教えてくれていた教班長も次第に厳しさを増し、別人のようになってきた。

赤と青に塗られた1メートルほどのバッテリーと称する櫂の棒で、ドスンと床を打って敏美たちを脅かす。4、5日もすると、そのバッテリーでみんなの尻を打ちまくる。パシッという音がデッキまで響く。やがて、敏美たちの目つきが変わり動作も敏捷になってきた。

海軍魂と軍人精神

訓練は主として午前は短艇（カッター）訓練、午後は陸戦教練が行われた。短艇が「海軍魂」を注入する訓練であったとすれば、陸戦は「軍人精神」を叩き込む訓練であった。

軍艦は上陸するにも物を運ぶにしても常にカッターに頼らなければならない。艇の長さは約10メートル。左右の舷には6名ずつ合計12名の漕ぎ手がつくのだが、兵員の輸送となると漕ぎ手が倍の24名になる。

櫂（かい）の長さも5メートルと、遊園地に浮かんでいるボートとは桁違いの大きさである。この櫂を1人が1本を両手で握り、身体全体で漕ぐのである。腕が痛み、掌に豆ができ、尻の皮がむけても力漕しなければならなかつ

た。他班のカッターと並ぶとかならず競争になり、負けると、配膳された食事を膳ごと両手で長時間捧げ持たされたり、ときには、食事抜きとなった。

海軍には陸戦隊という地上戦専門の部隊もあったから、陸軍と同様に小銃をかついでの訓練も行った。右向け、左向け、回れ右、といった徒手教訓からはじめて、やがて集合、解散、整頓、部隊の行進などの集団訓練へと練度を高め、ついで執銃訓練へと進み、小隊訓練、中隊訓練、大隊訓練へと、次第に高度な訓練を積み重ねた。

こうした訓練を通じて攻撃精神や厳正な軍紀等軍隊としての実質を、理屈や理論でなくすべて体で体得していった。陸戦教練は軍人精神を培う上で欠くことのできないものであった。

他方、陸戦には体力を錬成する目的もあったから、草ひとつ無い練兵場で息のつける限り走らされ、汗も枯れて顔中が塩になるまで鍛えられた。銃剣術では、“勝ち抜き”ではなく、“負け残り”でやられた。誰かに勝つまでは止めることができないのである。 写真下は、戦艦「三笠」見学



辛い訓練に甲板掃除があった。木の床の甲板を毎朝、ごわごわしたゾウキンで押しまくり、ピカピカに磨きあげる。そのうえ、さらに蠟を塗り込めたキ

キャンバス（帆布）で磨きあげた。教班長の「立て！」の合図があるまで立つことはできず、「回れ、回れ」の号令で何回も甲板を巡り回らなければならない。苦しい訓練ということではカッターに優るとも劣らなかった。

座学、いわゆる椅子にかけての授業は、修身と軍事学が中心で、たまに国語や算数の授業もあった。

生家へ第2報

海兵団生活3カ月目、飛行兵への転科試験を2、3日後に控えたころ、敏美は両親宛に手紙を書いた。

前略

秋景色も深み、身に冷たさを感じる様になりました。

父上様には、その後お変わりなく、稔りの取入に一生懸命にお働きの事とお察し致します。私も無事軍務に服しております。他事ながら御安心ください。

軍隊生活も日に進み、多忙では有りますが、非常に愉快味が笑顔に浮かんで来ます。靖国神社霊（みたま）祭（10月23日）には、海兵団内大運動会・分隊対抗の競技がありました。自分は、武装競争に出場、不思議にも1番、19分隊の勝ちを挙げました。15個分隊中、第2位には落ちたが好成績にて終わりました。また、射撃なども2、3回行いました。

近々は、辻堂へ演習があります。これも目の前に迫っております。西方に姿を見せる富士も、頂に真っ白な雪が積もっております。カッター等も充分馴れ、海景色も快くのんびり致します。

さて、以前よりの第1志望たる飛行兵も、2、3日後に選抜試験が行われます。自分はまっさきに志願、率先勉学に邁進、（同じようなのが）分隊にも相当おります。まず、これを受験するには親の同意書が必要です。でありますからこの手紙が届いたら大々至急すぐ送ってください。お待ちしております。それから氏神様にお祈りを願います。

なお、先般お送りくださった小包も無事受け取りました。誠にありがとうございました。

ではいつにても、お体を御大切にお働き願います。

まず、同意書を至急。

敬具

同意書の見本も自分の手で書き、「用紙は半紙、スミで次のように書く」と書き添えた。入隊時は四等水兵だった階級が、制度の改正で2カ月後に二等水兵になった。といっても、最下級であることに変わりはない

同 意 書

海軍二等水兵 志賀敏美

右丙種飛行予科練習生志望ニ同意ス

昭和 年 月 日

住所

氏名

印

母への手紙も同封した。

母上様には長い間御無沙汰致し申訳ありません。自分も身体強健にて無事入団できました。何卒御休心下さい。もう今では軍隊に馴れ、大した苦勞もしません。山の池田四郎とは、第一海兵団で別れたまま後は会っていません。たぶん十四分隊であらう。第二海兵団に入ってから、絶対外には出られないし、通信等もやることもいっさい禁じられて居った。

幸いに、7日に許された。そこでこの長い間、靴は自分のもの下着も上着の作業服戦闘服だけ渡された。であるから靴も服も破損、しわになったから丁寧に整理してください。

そろそろ蚕も帯立って忙しくなるだろう。

ではご家内様、御身を大切に、さようなら。

母上様

さしあたり 5 銭切手 20 枚も送って下さい。葉書先の宛で出して下さい。

辻堂演習

父宛の手紙に「近々は、辻堂へ演習があります」とあるのは、新兵教育の総仕上げとして行なわれる陸戦隊の野外演習を指している。辻堂の広大な砂丘を戦場に見立て、紅白に分かれて繰り広げられる大演習である。缶詰状態で訓練をしてきた者にとって、民家に分宿しての訓練は最大の楽しみであった。辻堂近くにある民宿は海軍部隊が常時使うので、どの民宿も広い土間と玄関があって、大きな家では 50 人位が宿泊できるようになっていた。

演習場は砂山だから 3 歩前進しても 2 歩後退といった状態で、足腰の鍛錬には恰好の場所であった。こんな場所で攻撃部隊、または、陣地防御部隊となって 3 日間駆けずり回るのである。最初は中隊単位で演習行方。白い事業服の集団が粛々と進む。斥候の訓練、報告の要領の訓練を織り込みながら前進する。互いに相手を発見すると散開して有利な位置に回り込もうとする、虚々実々の駆け引きを展開しつつ、最後は白兵戦となる。

仕上げは大隊対抗の遭遇戦である。各隊との連携訓練を重ねながら敵に接近、攻防戦を展開する。空砲を撃つことが許される。戦機が熟すると、双方に「着剣」の号令がかかる。小銃の先に銃剣を差し込み、突撃ラッパとともに敵陣目がけて突進し、最後に双方が着剣を十字に組み合わせ、「ウオーツ」という大歓声で白兵戦を終了する。

激しい訓練だったが、夜は、久し振りの民家である。故郷の生活を思い出しながら、青畳の上に座って飯台で食事をしたり、五右衛門風呂に入ったり、シャツと袴下だけで庭の散歩ができた。

飛行兵へ転科

海兵団も終わりとなる頃、敏美は飛行兵への転科試験を受験した。一般水兵

から飛行兵への採用方法は独特だった。まず、海兵団または赴任先の各艦艇が行う学科試験に合格したものを2、3名ずつ、丙種飛行予科練習生（略して「丙飛」）として海軍航空隊に“仮入隊”させ、そこで、ふたたび学科試験を行い、その合格者に対して厳しい適性検査を行った。ペーパーによる心理テスト、近点距離、反射神経、操縦動作、転倒反応、視野測定などの各種検査、そして厳密な体力測定などを約1カ月間にわたって実施した。

テストのたびに不合格者が発表され、不合格となった者は、即日、衣のうを担いで予科練を後にした。元の海兵団に戻れば、飯炊きの主計兵や機関兵、工作兵など飛行機とは縁もゆかりもない世界に配属されたから、受験生たちは必死であった。なかには艦を出るとき餞別までもらってきた者もあり、「今さら原隊には帰れない」と、土下座して教員に嘆願する者もいた。

11月28日、海兵団での3カ月が終わった。海軍一等水兵に進級し、錨一つの階級章が右肩につき、水兵帽のペンネットが「横須賀第二海兵団」から、入隊先の「三重海軍航空隊」に変わった。入団時に預けた時計や財布を受け取って三重空へ向かって旅立った。

丙種飛行予科練習生

敏美が海軍飛行兵を目指した昭和17年頃、“予科練”には“甲飛”、“乙飛”、“丙飛”の3種があった。甲飛とは、甲種飛行予科練習生の略称であり、乙飛・丙飛も同様である。それぞれ入学の資格要件と修業年限を異にした。徐々に資格要件が引き下げられ、修業年限も短縮されたが、昭和15年当時は次のようであった。括弧内は修業年限。

- ① 甲飛 （旧制）中学4年1学期修了程度で年齢16～20歳（1年6カ月）
- ② 乙飛 尋常高等小学校高等科2年修了程度で年齢15～17歳（2年6カ月）
- ③ 丙飛 現役の海軍軍人から選抜された者で年齢17～22歳
（6カ月、敏美の入隊時は4カ月）

もともと、予科練の本流は②の乙飛であった。海軍兵学校につぐ若年搭乗員

の養成を目的として昭和5年6月に「予科練習生」として創設され、第1期生が横須賀海軍航空隊の門をくぐったのは受験生5,807名のうちの79名、73.5倍というきわめて高い合格率であった。

昭和12年、中国戦線の拡大にともなって海軍航空隊では搭乗員不足が深刻な問題となり、短期間での養成を目的として、受験資格を中学4年1学期終了程度に上げ、修業年限を半減とする制度を設け、これを「甲種飛行予科練習生」（「甲飛」と呼ぶことにした。甲飛の第1期生募集時の受験生は2,874名、そのうち250名が合格、約11倍の狭き門であった。

新設の予科練を「甲種」としたため、従来の予科練習生を「乙種」とした。単に両者を区別する記号として用いたのだが、後から入ってきた甲飛が先に昇進したから、乙飛に与えたショックは大きく、やがてこれが甲飛に対する憤怒に変わり、甲飛もまた、軍人は階級がモノをいうとばかりに、乙飛が敬礼を怠ればこれを侮辱と受け止めるなど、制度上の欠陥による両者の対立、反目は深刻な問題となった。

③の丙飛は、すでに海軍軍人としての勤務実績をもつ者から選抜し、搭乗員として養成しようとするもので、大正10年に始まる「飛行術練習生」、のちの「操縦練習生」（「操練」と「偵察練習生」（「偵練」とを合わせ組み入れて、昭和15年10月に発足したものである。制度的には、もっとも長い歴史と伝統を持つのだが、先に、“甲種”、“乙種”を設けたから、こちらには“丙種”と名付けた。

すでに海軍の基礎的な学習は終了しているということで、修業年限が最も短かった。敏美が丙飛を選択したのも、「一番短い時間で、飛行機乗りなれる」と思ったからではなかろうか。事実、同郷原町出身で神風特別攻撃隊敷島隊として散った中野磐雄は、敏美より5カ月早く甲飛10期でスタートしながら、敏美が谷田部の飛練で操縦桿を握ったとき、彼はまだ、予科練の2年生で飛行機にも乗れなかった。

多様多種の丙飛

敏美は海兵団からストレートに飛行兵へ転科したが、先にあげた敏美の丙飛の先輩や同期は、艦隊勤務の経験者であった。

永峰肇は、敏美より4カ月早い昭和17年7月末、佐世保第二海兵団を卒業した。8月から10月なかばまで三等水兵として、第一艦隊第一水雷戦隊の駆逐艦初春に乗り組み、主にアリュージョン方面での対潜掃蕩に従事していたが、10月17日、キスカ島への弾薬輸送中に米国機の攻撃を受けて被弾。

反転して幌延にむけ航行中に、こんどは荒天に出会って両舷推進軸折損という大被害をこうむった。航行不能となった同艦は内地で本格的な修理が行なわれることとなり、12月6日、舞鶴軍港入りをする。ここで永峰は、待望の丙飛予科練に転科志願をすることになった。

池田速雄と平野恵も永峰と同じ佐世保第二海兵団を同期で卒業した。池田速雄は、航空魚雷担当として漢口、元山、三亜、サイゴン・ボルネオ・クチン、ラバウルなど基地から基地へと転戦中に、また、平野恵は戦艦「金剛」で、同じ魚雷担当として乗艦中に丙飛予科練への転科試験を受けた。

飛行兵への転科を希望した理由について、池田速雄は、「お前は搭乗員の方が向いている」と上官に転科を勧められたことがきっかけとなり、平野恵の場合は、「金剛」での勤務中、飛行機搭乗員と艦長とが対等に会話をしているのを見て羨ましく思った。自分たちのような一般水兵が、艦長と直接会話することなど、想像すらできなかったからだ。「よし、俺も飛行兵になってやろう」と決意、転科を志願した、と語ってくれた。

このように丙飛は、志願兵と徴募兵の中から厳選されて採用されただけに、学歴もまちまちで、なかには旧制中学卒や専門学校卒がいたり、年齢も17歳から22、3歳までと開きがあり、また、階級も二等兵から下士官まで、と多士済々で、それだけに充実していたことは確かであった。

戦死率最高の”丙飛”

その丙飛も、昭和18年3月31日、最後の17期が岩国空に入隊した翌日廃止された。それまでの丙飛に相当する練習生は、乙種の2次試験合格者の中から採用することとして、「乙種（特）飛行豫科練習生」の制度が創設された。いわゆる“特乙”である。

さらに、昭和19年に甲飛の志願規定が改正され、中学3年在学中でも志願できることになり、学歴基準が乙飛と同じになったことから乙飛も廃止され、甲飛1本となった。

予科練制度の創設から廃止までの入隊者数および戦死者数、戦死率等を集計すると次表のとおりになる。

種別	1期入隊	最終入隊	期数	入隊者	戦死者	戦死率
乙種	5/6/1	20/6/15	24	87,531	4,984	5.7%
甲種	12/9/1	20/8/15	15	139,730	7,114	5.1%
丙種	15/10/1	19/12/1	17	7,362	5,454	74.1%
特乙	18/4/1	19/10/1	10	6,840	1,348	19.7%

甲飛、乙飛の戦死率が低いのは、訓練中に終戦を迎えた期を含むからである。丙飛と同時期に卒業した飛行予科練習生、つまり、航空消耗戦の最盛期に第1線搭乗員として出撃していった練習生に限って集計すると次表のとおり。いずれも入隊者4人のうち3人が戦死しており、戦死者の過半数は丙飛出身者で占められていたことがわかる。

種別	入隊期	入隊者数	戦死者数	戦死率	戦死者の割合
乙種	4～10	3,652	2,661	72.9%	24.6%
甲種	1～15	3,505	2,651	75.6%	24.5%
丙種	1～17	7,308	5,509	75.4%	50.9%
計		14,465	10,821	74.8%	100.0%

2-3 あこがれの三重航空隊

丙飛 15 期生として

12月1日、敏美は第15期丙種飛行予科練修生として、3カ月前に新設されたばかりの三重海軍航空隊に入隊した。同期生は631名。そのなかに、第一神風特攻隊敷島隊員として出撃した永峰肇がいた。また、永峯といっしょに特攻戦死した中野磐雄（甲飛10期）も予科練生活の第2学年をここ三重空で送っていた。中野は土浦航空隊で第1学年（6カ月）を終わり、10月1日、第2学年としてこの三重空に移ってきていたのだ。しかし、これら3人は互いに知りあうことはなかった。居住区も分かれており、外出時の倶楽部も異なっていたからである。

三重航空隊は三重県一志郡香良洲にあった。現在の紀勢本線津駅からバスで東南に向かった伊勢湾ぞいの台地にあった。途中国道23号線が南北に走り、戦後はこの街道に沿って街村が大きく発達した。香良洲は、伊勢平野を横切って流れる雲出川河口の三角地帯で、当時はここに急造のバラック兵舎が立ちならんでいた。背後は海で、煮干加工やカタクチイワシ、イカナゴなどの沿岸漁業が栄えている。現在でも海水浴場として



近隣の人びとを集める水のきれいな海で、白い砂と松並木の眺望が美しい。

敏美たちが香良洲にたどりついた時は、この美しい海も冬の暗い空に沈んで、眼前の光景は荒涼としたものだった。朝は伊勢湾を渡る風が身を切るように冷たく、日が沈むと大地はすぐに凍りついた。司令は内田市太郎大佐、副長

は高橋俊策中佐。この高橋中佐は、有名な軍歌「月月火水木金金」の作詞者で知られる人物だが、号令台に立つときは声を張りあげ、きびきびした動作で練習生たちにここが初期教育の現場であることを再確認させた。

三重空には 91 分隊から 94 分隊までの 4 コ分隊があり、91 分隊の偵察組を除く 3 コ分隊が操縦分隊であった。敏美は第 94 分隊に、永峯肇は第 93 分隊に配属された。丙飛 15 期生の場合、すでに入隊前の適性検査で操縦・偵察のクラス別が決められていた。

4 カ月間、午前 6 時の起床から午後 9 時の就寝まで、起床・体操整列・甲板清掃・朝食・朝礼整列・午前課業・昼食・午後課業・別科課業・軍艦旗降下・夕食・甲板清掃・温習・寝具用意・就寝・巡検といった日課の繰り返しであった。

課業としては、週 1 回のカッター訓練や武技のほかは座学が中心であった。その内容は、精神教育、勤務（日常諸作点検等）、体育。学術教科としては航空術、航海術、通信術、砲術（陸戦教練のみ）、水雷術（魚雷発射法のみ）、運用術、機関術など。そして国語漢文（国語講読作文）、数学（概要）、理化学（概要）、歴史地理（国史概要、大東亜における兵要地学概要）、英語（ローマ字のみ）などの一般教養が幅広く講義された。



聖訓 5 力条

予科練 1 日の締めくくりは夜の温習であった。夕食後しばしの休息があつて、午後 6 時 10 分、釣床おろし、そして午後 6 時半から 8 時までがその温習時間であった。それぞれの組（1 コ分隊をふたつの組に分け、普通学はこの組単位で課業をうけた）ごとに、温習講堂の中に固有の教室を持っていて、そこには日常使用する教科書、ノート類をおさめた各自の机が整然と並んでいた。温習は、この講堂で実施するのである。

温習とは、学科の予習、復習を行なうことだが、勝手に手紙を書いたり、小

説を読んだりすることは許されなかった。各室には、班長が1名かわるがわる監督についており、当直教官も、各室を回って見て歩く。練習生は、激しい1日の訓練に綿のように疲れていて、ともすると船を漕ぐ。それを起こして回るのも、班長の役目の一つであった。ときには眠気覚ましに、かつて経験した凄まじい戦場での武勇伝や逸話を拾って語ったり、コミックな話に練習生の笑いを誘ったりすることもあった。

次第に夜がふける。やがて温習時間が終了すると、各自がノートや教科書を静かに机にしまいこむ。教科書は教科書、ノートはノートと整然と並べ、どの机を開けても区別がつかないほどにきちっと整理、整頓される。

ばたりばたりと机の蓋を締める音が、ひとしきりまわりの空気をゆり動かすが、しばらくすると、室内はふたたび静まりかえる。練習生は、背筋をきりっと伸ばし、椅子に深く腰をかけ、両手を丹田の前に組んで、座禅のように軽く目を閉じるのである。

教員が静かな声でいう。

「よし、はじめ」

当番の週番練習生が、底力のある声で、一語、一語、噛みしめるように、聖訓五カ条の第一条をまず奉唱する。

「一つ、軍人は忠節を尽くすを本分とすべし」

その声が室内にしみわたる。まなこを閉じた各練習生は、その一語一語を心の中で反芻し、自分自身に問いかける。唾をのんでも他人に聞こえるかと思うほどの静寂がしばらくつづく。その中で、それぞれが今日一日の自分のすべてを反省するのである。頃合いを見て週番練習生は、つぎの項目を奉唱する。

「一つ、軍人は礼儀を正しくすべし」

またしばしの瞑黙がつづく。

こうして五カ条が一つずつ奉唱されていくのである。

「一つ、軍人は武勇を尚ぶべし」

「一つ、軍人は信義を重んずべし」

「一つ、軍人は質素を旨とすべし」

聖訓5カ条とは明治15年1月4日、明治天皇が軍人に与えた軍人勅諭の中の柱となっている5つの項目を指す。全文約2千700文字、軍隊の在るべき姿や軍人としての心がまえを説いている。陸軍では、軍人勅諭の全文を初年兵全員に暗記させたというが、海軍では、5カ条を奉唱するだけで、決して丸暗記はさせなかった。ただし、内容については分隊長の精神訓話などのさいに徹底した教育が行なわれた。

軍歌演習

土曜日の午後からは、軍歌演習が行なわれた。副長高橋俊策中佐は人一倍歌唱指導に熱心であったから、その意をうけて当直将校が盛んに練習生たちを歌わせた。

朝だ夜明けだ潮の息吹き
ぐんと吸い込むあかがね色の
胸に若さのみなぎる誇り

の「月月火水木金金」であったり、

われは海の子白波の
さわぐ磯辺の松原に
煙たなびくとまよこそ

の「われは海の子」であったり、海の歌や軍歌が多かった。あくる日曜日は待望の外出日であった。七時の朝食を終え、午後四時半までが自由時間となる。外出日は昼食用としてパンと当時は貴重品となっていた砂糖が支給され、練習生たちは隊門を出ると近くの香良洲神社で急いで平らげ、包んでいた白い風呂敷を後ろポケットに突っこみ手ぶらで津の町に出かけるのが常であっ

た。

躰（しつけ）教育

予科練習生は、スマートでなければならない。つねにピチピチと元気一杯でなければならない。すなわち「端正活発で、つねに生氣澄刺」、そして「沈着確実で、いかなる場合にも、周章、度を失すことがあってはならない」を基本に、躰教育に力を入れた。

昭和 18 年に三重海軍航空隊が作成した「海軍飛行予科練習生心得」が、この一番に取り上げていたのは「礼」であった。次のような内容を 16 の項目にわたって細かく規定している。例えば”敬礼”について、

1. 敬礼は敬う気持をもって行なうことを基本にして、形を整えるようにしなさい。
2. 敬礼は相手方に目を注いで、節度をもって行なうようにしなさい。
3. 敬礼は躊躇することなく、積極的に行なうようにしなさい。
4. 急いでいるときでも欠礼したまま、上官を追い越してはいけない。
5. 狭い通路では、まず道を譲ってから敬礼しなさい。

原則として隊内在職の海軍教授、同囑託、助教、教務囑託、予備学生に対しては、隊の内外を問わず、つねに敬礼を行なうが、例外として隊内では、予備学生や兵隊練習生あるいは練習生同士の敬礼は、朝食後はこれを省略できるものとし、また授業中であれば、たとえ司令や教頭が来場した場合であっても、教官（教員）だけが敬礼を行なって、練習生などは姿勢を直すだけでよいとし、定時の温習中に上官が来場した場合でも、監督者だけが敬礼をすればよいとしていた。

そして、行進中の集団の敬礼については通常、「歩調とれー」「頭一ツ右（左）」の号令で、部隊はいっせいに頭を右（左）斜めに向け、指揮者は挙手注目する、いわゆる部隊の敬礼を行なうのだが、予科練では、教授、助教などに対しては、指揮者だけが敬礼すればよいとしていたし、また平服（私服）の准

士官以上に対しても、指導者だけが敬礼すればよいとしていた。

その他の礼儀として、カッターや乗用車に乗る場合、降りる場合の順序、電話を掛けるさいには、先に自分の名前を名乗れ、などもやかましくいわれた。「多人数同時に道路を歩行する場合は、適宜縦列を作り、歩調を合わせ、しかして道路を閉塞すべからず」といった規定も見られる。

横から見ると、二人の足並みがぴったりと合い、あたかも一人が歩いているように見える。練習生は私用で歩くときなどにも、つねに足を合わせて歩いた。歩くテンポを同じにするだけでなく、右足と右足、左足と左足を正しく合わせなければならなかった。

さらに「会議、会食などにおいては、出席は下官を先にし、退席は上官を先にする」とし、「会食などに当たっては、上官が箸をとったあと、下官は箸をとることが礼儀である」などとも規定していた。

駆け足

隊内での移動はすべて駆け足であった。海軍では狭い艦艇の中だからこそ、体力を保持するために駆け足がもっとも手近な運動として、奨励されていた。

ただし、三重空の場合は、敷地が広がった。1辺2.6キロの4辺形、約40万坪（約120万平方メートル）の中に、練兵場の一方に兵舎群、講堂群が整然と並んでおり、最後部の兵舎から練兵場までは、ゆうに500メートルはあり、兵舎群の端から講堂群の端まで、これまた500メートルから800メートルはあったから、兵舎から練兵場へ、あるいは兵舎から講堂へと移動するには、つねに数百メートル、往復では1キロも走らなければならなかった。

そのうえに「5分前」が厳格に守られていたから、時間があるからといって、15分も20分も前に、のんびりと歩いて練兵場に集合するというわけにはいかなかった。

5分前間近に兵舎を離れて、5分前までに駆け足で課業整列の位置に駆けつけ

ていなければならぬのである。例えば、総員起し 5 分前も、この時は、寝床の中で次ぎの動作をするために心構えを整えて、寝静まった状態でいなければならぬのであって、まかりかちがって服でも着ようものなら、途端に 1 発顎（あご）修整を食らった。

罰直

軍隊に限らず、戦時中は一般の学校でも職場でも、上級者が下級者を殴るとい程度のことは、普通に行なわれていた。したがって、体罰そのものは別に珍しいものではなかったが、ただ軍隊の場合は、その程度と理由が普通の社会とは大きく異なっていた。

軍隊では、上下関係はきわめて明確であり、軍律と称して上命下服の秩序は徹底されたから、そうした秩序違反行為に対して罰直が行使された。だが、行なうかどうかの判断と程度は、上級者の方に握られていたから、人により、気分により、左右されるようなことがあった。その程度についても、特に判断基準といったものがあつたわけでもなく、従って、「体を傷つけない範囲で」から「殺さない範囲で」というところまで広がっていった。

罰直はさまざまな形で行なわれたが、最たるものはバツターであつた。教員室内には、このバツターが麗々しく飾られていた。中には紫や白の房つきの飾り紐を巻きつけてあるのもあれば、墨痕鮮やかに「軍人精神注入棒」と書いてあるものもあつた。直径 5 センチくらいのものであれば、10 センチ余のものもある。

見るからにごつそうで、こんな太い棒で叩かれたらどんなにか痛いだらうと、背筋が寒くなる思いがするのだが、実際には太いものよりも細身のものの方が尻に食い込んで痛いのである。

「いいか、今日、班長は、涙をのんで鬼になる。この気持がわかるか、バツターなどはふるいたくはないんだ。しかし、今日のお前たちのごまはなんだ。これで軍人といえるか。練習生でございと肩を張れるか。口でいくらいって

もわからなければ、腐った根性を叩きなおすには、これしかないんだ！

よし一人ずつ前にでて来いッ」

人によっては、こんこんと説教した上で、また哀調を帯びた浪曲調で、また班長によってははたたりと恐怖を引き出すような含み笑いを見せて、あるいは問答無用の厳めしい顔で、バッターで床を力強く突いて、それから、「前にでて来い」となるのである。練習生の顔から、みるみる血の気が引いていく。

先頭の練習生が、教員のふりあげているバッターの前に顔をひきつらせ、ツーツと床を擦るようにして飛び込むと、両手を高く揚げ、やや腰を引くようにして両足を踏ん張った。歯をくいしばって体を硬直させる。やにわに教員の腰がまわったかと思うと、掬い上げるようにしてバッターが唸りを生じて練習生の尻に食い込む。ばしっと鈍い音がする。

「うーうッ」 坤くようにして練習生がよろめいた。

「ふらふらするなッ」

もう一発、バッターが飛んだ。

「つぎッ」

つづいて、つぎの練習生が教員の前に飛びこむ。教員の顔も引きつって、額に汗が吹き出してくる。バッターをもらい終わった練習生は、痔の患者よろしく、尻の痛みをかばうように重い足取りで列にもどるのであった。

罰直は、連帯責任を問う場合がほとんどだった。そんなときは、1、2発、多くて5発くらいで済んだが、中には破廉恥な行為に対する代償として、一罰百戒的な見せしめとして行なわれることもあり、そんなときは、続け様に数十発も打たれることがまれにあった。他の練習生は、これを死の縁に立って、地獄の悲惨を見る思いで眺めたものであった。

バッターを罰直の横綱とすれば、”大関”は”前支え”あたりだろうか。前支えは、教員自身が手を染める必要がない。号令をかけると練習生は、腕立て伏せをする。腕屈伸を数十回、またはゆっくりと腕曲げ、伸ばせを何十回も

繰り返される。途中でへたばると「腰を落とすな」と教員の怒鳴り声のとび、へたり込むと尻にバッターが飛んできた。

前支えをさらにきつくしたものが”急降下”だった。姿勢は前支えと同じだが、足を床でなく食卓の椅子に載せる。こうすると、頭に血がさがってくる、腕に力が余計にかかるので、いっそうきつさが付加されるのである。前支えは、回数の上では、バッターなどおよびもつかぬほど手軽に頻繁に行なわれた。バッターが精神的な鍛練はともかく、肉体的にはただ苦痛をあたえるだけに使われたのに対して、前支えは、腕の筋肉や腹の筋肉、背中の筋肉を強靱にする効果をも生むもので、練習生の精神と肉体を共に鍛える結果ともなった。

海軍の罰直には、ユニークでユーモアに富んだものも数多く存在した。遊び心もあったのだろうか。”蜂の巣””ウグイスの谷渡り”などというものがあった。

蜂の巣というのは、居住区の端に作りつけられている衣囊棚から衣囊を引き出して、人がようやく潜り込めるほどに開いた空間に頭から入り込む。すると、ちょうど蜂の巣の中に蜂の子がうごめいているような格好になる。しかし、ただ、入っただけでは面白くない。

号令一下、この棚に入ったり出たりするのをくり返させるのである。敏捷性の訓練にもなったが、ただ自分の衣囊棚に潜り込むものだったので、下から2段目、3段目にある場合は比較的、出入りしやすいが、1番下とか、1番上の棚に入り込むのは大変などの不公平があった。

ウグイスの谷渡りは、兵舎の端から端にわたって並べられている10個ほどのテーブルの下を潜り、その倍の椅子の上を飛び越えていく。100名以上の者がこれをくり返して往復することは大変なことだった。押し合い、へし合いになり、椅子につまずき、テーブルに頭をぶっつけ、床につんのめる。そして、最後のテーブルの上で「ホーケキョ」と、大声で鳴くのである。これなどは罰直とはいうものの、ちょうど障害物競争と同じような体育効果を生むも

のでもあった。

また、ウグイスの谷渡りの親戚筋に当たるのに”蟬（せみ）”があった。兵舎の柱によじ登って抱きついたまま、「ミーン、ミーン」と鳴くのである。これなどはユーモアもあったが、実施される側の屈辱感をかきたてる点で、効果相乗といったものであった。

罰直にはこのほか銃支え、釣床支え、テーブル支えなどのように、腕の力で苦痛に耐えるもの、アゴ（拳で顎を殴る）や、相互ビンタのように手で殴るもの、外出止め、酒保止め、食事半減など欲望を抑制させることによって反省を求めるものもあった。

罰直は、確かに人間性を無視した強引なやり方ではあった。しかし、もし予科練生活の中から罰直をすべてなくしたとしたら、どうだったろうか。班競技にみるような真剣さはでてこなかったのではないか。通信の試験は、いつになったら満点が取れるようになったろうか。規律はどうなっていたらうか。戦場から逃げかえるような軍人が出ないという保証を、どう担保したのだからうか。

甲飛・乙飛の乱闘

この時期、三重空には丙飛 15 期のほかに甲飛 10 期、乙飛 16 期も訓練を受けており、それらの間で事件が起こった。それは、17 年 4 月に入隊した甲飛 10 期生が 11 月 1 日の制度変更で海軍飛行兵長となったのに対して、乙飛 16 期生は一つ下の階級である上等飛行兵とされたことが原因だった。規則通りにいえば、階級下の者が上級者に向かって敬礼をするのが当たり前だが、乙飛 16 期が予科練に入隊したのは昭和 16 年 5 月のことで、甲飛 10 期生よりも約 1 年早い。いわゆる“メシの数”（軍隊経験）では、彼らの方がより古かったのである。

日本の軍隊では、この“メシの数”という特有の序列があった。いかに新参の中・少尉といえども古参の下士官には頭があがらない。下士官兵の仲間同

士でも、軍隊経験の古い者には新参の上級者も手出しができないでいた。

そんな理由から、下級者の乙飛 16 期生たちは道で甲飛 10 期生とすれちがっても敬礼することはなかった。「海軍では俺たちのほうが先輩だ」という意識が強かったからだろうし、年齢的にもほぼ同世代だったから、反目も人一倍強くなっていった。

事件は、甲飛 10 期と乙飛 16 期生たちが練兵場で交差するその瞬間に起こった。最初は先頭集団の小競り合いであったが、それが波のうねりのようにひろがって行き、やがて 1,800 名の全員が灯火のない暗い練兵場で入り乱れて殴りあった。騒動を聞きつけた衛兵たちが空に向けて射った銃声で、ようやく混乱は終止符を打った。片足をひきずって居住区に戻る者、頬を腫らし、身体の節々を撫でながら顔しかめて歩く者、白い服に点々と滴る鼻血…。そして同じ仲間同士が殴りあったあと、彼らを待っているのは教員たちのバッテリー罰直である。

不幸な反目は、その後も続いた。「なぜ、敬礼せんか」と甲飛 10 期生が呼び止め、「なにを！」と乙飛 16 期生が立ち向かう。日曜日の外出時は、たがいにグループ同士で隊外に出かけるから、大ていの場合多数の練習生が入り乱れての乱闘になった。

負けた方では翌週にこんどは喧嘩に強い同期生たちを動員して立ち向かうから、両者の抗争はとどまるところを知らなかった。予科練制度の欠陥とはいえ、甲飛 10 期生の標的にされた乙飛 16 期生たちにとっては、いい迷惑な話であった。

威勢のいい甲飛 10 期生たちだったが、丙飛練習生にはあまり手出しができなかった。丙飛は、各海兵団その他の海軍諸学校から、また、艦隊勤務経験者の中から厳選されて採用されたから、年齢に差があり、また、階級も二等水兵から下士官までと多種多様であったから、甲飛といえども下手に呼びとめて、それこそ“メシの数”でも階級でも上の練習生であったりしたら、逆に全員が制裁を受けるという羽目にもなりかねなかったからである。

しかし、そのため敏美たちには、甲飛、乙飛とは違った苦勞があった。甲飛や乙飛の練習生は、教員たちからどんな制裁を受けても居住区に戻れば仲間同士の労りや慰めが待ちうけていたのに対し、丙飛の場合は隣りに眠る同期生でも階級が一つ上であれば、いつ自分が彼らの怒りにふれて制裁を受けるか知れなかった。そのために丙飛練習生たちは、ハンモックで一人眠りにつくまで、ほとんど気を抜く余裕もなかった。

適性検査

きびしい寒さの冬がすぎ、翌 18 年の春の気配が間近に感じられるようになった 3 月、伊勢神宮参拝の行軍が実施され、敏美たち丙飛 15 期生の全員がこれに参加している。

丙飛 15 期は、わずか 3 カ月の速成教育で、甲飛 10 期（昭和 17 年 4 月 1 日入隊）、乙飛（昭和 16 年 5 月 1 日入隊）より一足先に、第 31 期飛行練習生として飛練教程に進んだ。

卒業の 1 カ月前頃、操縦員コースと偵察員コースに分けるための適性検査が行われた。検査の内容は次のようなものであった。

1. クレペリンテスト
2. 身体検査
 - (ア) 握力・背筋力・視力・肺活量等の身体検査
 - (イ) 眼球検査・斜視・視野の精密検査・視覚反応
 - (ウ) 平衡検査(機器による静平衡・回転機による動平衡検査)
 - (エ) その他、運動神経に関する検査や観察力・計算力等の検査もあったようである。
 - (オ) 地上操縦練習機(リンクトレナー)による操縦感覚の試験

この、地上操縦練習機による検査は、約 3 分間ずつ 3 回リンクトレナーの席につき、最初はカバーを掛けなくて、そして、悪気流設定もしなくて、指示された角度の旋回操作をするのであり、次ぎからは、蓋をされて、いわゆる夜間飛行の計器飛行状態にして、しかも、気流設定がなされるので難しくなる。



この結果、15期生は操縦専修者426名、偵察専修者205名に分けられ、それぞれ次の航空隊で飛練教程を受けることになった。

陸上機操縦 谷田部空、筑波空

水上機操縦 北浦空、大津空

偵察専修者 鈴鹿空、大井空

敏美は陸上操縦専修として谷田部空行きと決まった。仲間に永峯肇や原重蔵がいた。



手紙書くヒマなし？

三重空にいる敏美に対して、父は何回か手紙を書いたと思われるが、敏美の方から出した形跡はない。三重空では、練習生宛ての、郵便物は、全て、教員室で受け取り、開封のうえ検閲、不具合な文章は墨で黒く消して各人に渡す仕組みになっていた。

発信人が女性名であったら、これは、どんな関係の人かと質される。従妹、

親戚で同姓であってもしつこく聞かれた。時には、恋文でもあったりすると、全員に披露され、本人が、娑婆気を出さないよう冗談めかしで、話の種に、わざとされたりしていた。

発信についても検閲を行い、不都合な部分は、真っ黒く墨で消しこみを行い、「検閲済み」と「軍事郵便」の赤スタンプ印が押された。

敏美には山ほど書きたいことがあったはずだが、時間的な余裕がなかったのだろう、三重空でのことを伝える手紙は残されていない。

卒業訓示

3月26日、卒業式が行われた。心を込めて手入れした軍服に身をつつみ、最後の号令台前集合に臨み、司令の送別の訓示を受けて揺籃の地に別れを告げるのである。

同じ三重空を乙飛19期として卒業した下平忠彦氏は、予科練の卒業、退隊の儀式は、一般の学校での卒業式以上の感激と思い出を残したと「海の若鷺『予科練』の徹底研究」（光人社）に書いている。

三重空・内田市太郎司令の卒業訓示は、搭乗員に必要な心構えとして次の三つを挙げた。

1. 天を相手にせよ

航空戦士の勤務は、広大無辺な天空において活動する点で、地上や海上とは大いに異なる。天象気象の変化は、予断を許さない。天然自然の力を侮ってはいけない。天空と融合し、一体となる心構えが大切である。

また、搭乗員は地上にあるときと違って、機上にあってはつねに孤独を強いられることとなるであろう。もちろん戦闘機、爆撃機などが編隊を組んで行動するときは、上官も同僚も一緒である。しかし、その相互の関係は地上や海上とは大いに異なるが、ましてや、単独で紺碧の大空に放たれた機上にあっては、人間界を離れた天空の世界である。神の世界である。

さらに、自己の行動を律し得るものは自己以外にはいない。個人の行為については直接見ている者もいなければ褒める者もない。ただ無我、無私、無念、無想。あらゆる任務を遂行するためには、毀誉褒貶を度外視して、死生を超越して国事に奔走した維新の志士のような心境になって努力することが要求されるであろう。

単独で飛行中、敵機を認めるや尻に帆掛けて逃げ出し、敵機とは遭遇しなかったといっても、だれ一人反論することもできない。また、誇大にいな虚偽なる手柄話をして、だれもこれを否定し得ないのである。ゆえに搭乗員たるものは真に淡白純真であって、自己の任務を天職と心得、これが必成を期するに神がかりになるほどでなければ、航空戦士たる資格はないのである。

単機戦闘中、仮に戦死した場合であっても、その勇戦奮闘の状況を伝える者もない。その屍は敵中に散華することであろうし、ときに鱈や虎狼の餌食となるかも知れない。その魂魄は靖国の社に帰ることがあるとしても、形骸は故山の墓に安らかに眠ることはできないのである。

飛行兵たる者、その悲哀をも甘んじてうけねばならないのであるが、ここに透徹した人生観を持つことが必要になって来るのである。これが天と一体になれば、天を相手とせよということである。

2. 死生観に徹せよ

天空の持つ特性は、海に倍する厳しさを備えており、航空機の信頼度が増したとはいえ、天空はつねに不安定で、大きな危険を孕んでいる。そしてその危険はただちに生命にかかわるものであるため、ここに吾人には徹底した死生観が要求されるのである。

諸君は、このことをはじめから充分に承知して志願したはずであるから、充分に達観しているとは思いますが、しかし死生観は人間存在の根本問題であって、実際に口で言うように簡単に生を諦めきれものではない。

古来、日本人は、楽観的であって、死を『直る』『霊が故郷に帰る』などと言っていた。いまでは靖国神社に帰るという見方であるが、そうした考え方が根づいていた。また『往生』と言う言葉があるが、その意味は『往き

て永遠の命に生きる』というように理解されているのである。

このように、古くからの日本には『死』という観念はなく、生も死も同じ生存の様式であって、現世というのは短い『現世』の生存型式であり、死というのは『隠し世』の永遠なる生存の様式であるとされているのである。

こうしてみると、いかにも積極的で、そして朗らかな、驚くべき大思想であると思う。

肉体というのは蛹（さなぎ）のようなもので、時期が来ると霊なる蛹ほ繭を食い破って羽化するのである。抜け殻となる蛹に当たる肉体などにこだわらないというのが教えなのである。

吾人はいかなる場合であっても死を覚悟し、死を恐れずに思いきって自由自在に仕事ができるようになりたいものである。それができれば満点である。そして敵を斃すまでは死なない。しかし、敵を斃すためならば、勇躍平然として死ぬことができる。そうした武人にならなければならないと考える。

3. 確固不動の精神を養う

航空兵にとっては、精神力がもっとも大切である。しかも物心一体、学業一如でなければならない。そして死生観に徹し、不動の心を養うようにして欲しい。また自然を敬遠せず、自然を神秘視せず、自然に親しむことによって、その本質を見抜いて、これを制御し利用するように心がけなければならないと思う。

また空に生きる諸子は、つねに大空と触合し、一体となるように心がけなければならない。結言するならば、搭乗員修養の目標は、人間の持つ特別霊妙な心というものと胆力とをよく練り、そしてこれと科学的な知識技能との相乗効果によって、自然という敵と、敵軍という敵との二つの敵を克服圧倒するようにならなければならないということである。

いいかえれば科学の粋を集めた飛行機の性質と、精神力、すなわち物心不二の観念とを結合させて欲しいのである。ここが単なる唯心主義とは異なる

る点である。

こうした物の考え方や対処の仕方を身につけるためには、吾人は肝に命じ、行住坐臥、一挙手一投足にいたるまでつねに精神修養に心がけ、一ときも休むことがあってはならない。

諸君は新搭乗員として、これから巣立っていくのであるが、無敵海鷲として大変な重責をおわされていること、海軍が挙げて期待していることをよく胸に畳んで、搭乗員としての精神修養を怠らず、粉骨砕身、刻苦精励、今後の教程に邁進、もって海軍超一流の搭乗員となるよう切望する。

帽振れ

しかし、下平氏は、卒業式の思い出としては、式そのものよりも、退隊の見送り、帽振れの行事に、多くの思い出をもっているものが大半であろう、と語っている。

全員、最後の別れの敬礼を行なうと、司令は号令台を静かに降りた。居並ぶ分隊長、文官教官、分隊士、教員にも、別れの寂しさがひしひしと伝わってくるようだ。

『12時、丙種第15期練習生卒業退隊、総員見送りの位置につけ』

との高声令達器（スピーカー）の号令によって、各兵舎を離れた練習生は、すでに庁舎前から隊門の前まで、通路を空けて正対して並んでいた。

やがて、卒業生は4列縦隊となって、見送りの人垣の間を隊門に向かう。右も左もわからない新入隊者として、はじめてこの練兵場で仰いだ軍艦旗、日夜、見慣れた号令台や庁舎、春夏秋冬われわれを見つめていてくれた雄飛の松ともお別れである。思い出多い練兵場よ、さようなら、そんな思いを込めて歩を運ぶ。

卒業生は、沿道で見送る教官、教員や下級生たちに挙手の礼を返ししながら、別れを惜しみつつ前進した。

『頑張れよ』

『お世話になりました』

『先輩、頑張ってください』

『飛練で待っているぞ』

見送る側から、見送られる側から、盛んに声をとんだ。隊門に卒業生の全員が到着すると、密集隊形で整列して回れ右をし、見送る者の集団と対峙する。

『帽振れー』

この号令で、互いに脱いだ帽子を頭上に高々と上げて力のかぎり振った。目頭が思わず熱くなった。卒業生にとって、この感激の一瞬は、強烈な印象として脳裏に焼きついた。

2-4 鬼の谷田部航空隊

バッターの洗礼

3月26日、敏美は丙飛15期の課程を修了して、飛練教程（第31期戦闘機専修飛行練習生）に進むため谷田部航空隊に向かった。まず名古屋に出て東海道線に乗り換え、一路常盤線の土浦駅に向かった。谷田部航空隊は茨城県南部、筑波山ぞいの台地にあり、付近には松や杉、ナラ、クヌギなどの平地林が多い。現在飛行場跡は入植者の手によって農場に変えられているが、当時はここに広大な滑走路が走っていた。

駅には、教員たちがトラックを動員して敏美たち丙飛15期生1行70名を待ちうけていた。予科練の基礎教育を終え、これからは1人前の搭乗員になると期待に胸ふくらませてきた練習生たちはトラックを降り、隊列を整えて谷田部航空隊の隊門をくぐった。

衛兵司令に着任届けをした後、70名の練習生は1コ分隊6コ班に分けられた。1班は約12名で、その半数を班長（教員）と教員助手がそれぞれ受け持つことになった。谷田部空司令は露木専治大佐、先任教員は昭和七年志願の古参搭乗員で、21期操縦練習生出身の相沢八郎上飛曹。敏美は第5班に配属された。

谷田部空の居住区での第1夜のことだった。丙飛15期生にさっそく「総員集合」がかけられた。乙飛16期生が割り当てられた居住区の反対側、通路を境にして敏美たち70名の練習生たちがずらりと並ぶ。

「貴様らを出迎えにいった駅前で」

バッターを持ち、仁王立ちになった教員の一人がドンと櫓の棒で床を叩いた。

「駅前で・・・」というのは次のようなことだった。

敏美たち丙飛15期生が乗った列車が、常磐線の土浦駅に近づいた頃、女学生の1団が乗車してきた。丙飛15期生たちはまだ1度も空を飛んだことはなか

ったが、それでも女学生の眼から見れば、彼らは“海の荒鷲”だったから、車中で15期生たちは大いに語り、少女たちは眼を輝かせてその話に聞き入った。列車が駅のホームに着くと、少女たちは、「兵隊さん、頑張ってください！」と口々に声をかけて、降り支度をする練習生たちを励ました。汽笛が鳴り列車が動き始めると、女学生の1群は名残りを惜しむかのように窓から身を乗り出し、懸命に手を振った。

「兵隊さん、頑張ってください！」

敏美たち15期生の全員が手を挙げて、その声にこたえた。予科練の練習生と女学生の心が通いあった青春の1出会いであった。

だが、駅頭に立って15期生を出迎えた教員たちの眼には、この光景が海軍軍人らしくない、許しがたい悪ふざけだとみた。

「こんなダラけたことで1人前の搭乗員になれると思うか！ いまから貴様らの根性を鍛え直してやる。歯を食いしばれ！」

両手を挙げたみんなの尻に容赦ないバッテリーが飛んだ。激しいバッテリーの嵐が始まった。これが、「鬼の谷田部」の第1日であった。

初めて操縦桿を握る

3月27日、はじめて待望の九三式中間練習機(赤トンボ)の操縦桿を握った。予科練に入隊して4カ月目、甲飛練習生よりも教程は8カ月早く、乙飛予科練よりは20カ月も早く大空を駆けるのである。この時期、第一次神風特攻隊の関行男は霞ヶ浦航空隊の飛行学生でまだ赤トンボの初歩教育を受けており、中野磐雄たち甲飛10期生は予科練の第2学年に在学中である。

谷田部空での訓練内容は

(1) 航空術学科

飛行訓練に先立ち、または並行して次のような学科を修得した。

航空力学の概要、整備、飛行機取扱法(実習を含む)、通信、電信技術、航法理論と機械取扱法、落下傘取扱法、その他(写真、機銃、戦術等)。

(2) 飛行訓練

操縦は、練習機（アプロ練習機・三式初歩練習機・九三式中間練習機＜写真＞）を使い、地上滑走、離着陸、空中操作（水平飛行、垂直 旋回、宙返り、宙返り反転、緩横転、急横転、錐もみ等）、編隊飛行、夜間飛行、定所着陸、高々度飛行、夜間定着、機上作業（航法）等、教官との同乗の後に単独飛行を行った。



「筑波山宜候（ようそろ）」という言葉がある。飛行作業のさい、目標を筑波山にとって直進する——の意味である。初めて赤トンボの操縦桿を握り、谷田部町の上空を迂回して北に針路を



取るとき、「目標、筑波山」の教官の声にあわせて、練習生たちが大声で叫ぶ。

「筑波山よーそろー」

前方に標高 876 メートルの筑波山が見え、男体山と女体山に分かれた山頂が春の空に浮かぶ。裾に下るにつれ、吾国山、難台山、加波山などの筑波山地がひろがり、東に目を転じると土浦の町、南に視線を移すと谷田部町が眺められる。こののどかな初飛行の思い出は、「筑波山宜候」の言葉とともにいま

も丙飛 15 期生たちの脳裡にある。練習生たちは、みんな無我夢中で操縦桿を握った。初めてのことだ。何が何だかさっぱりわからないまま降りてきたことだろう。

夜半といえど真剣勝負

1 日の行事がすべて終わり、「巡検終わり」の号令がかかっても、15 期生は気をゆるめることができない。飛練時代に入っても週 1 度の試験があり、その成績がよくないと原隊に帰されることがある。丙飛 15 期生とはいっても、依然として身分は「海軍一等水兵」のままであり、飛練を卒業する段階になって、ようやく彼らは「海軍一等飛行兵」に転科を許される。それまでは、いつ「貴様は成績不良につき、原隊に復帰せよ」という非情な命令を下されるか知れなかった。

そのために、毎夜ハンモックの中で競うようにして座学の復習をした。操縦術、飛行要務、整備術、攻撃術、偵察術、兵術、航空生理衛生…。消灯後にはハンモックを抜け出して、常夜灯の明かりの下でノートに眼を走らせる。厳寒の三重空時代とはことなり、晩春から立夏にかけては気候が温暖でしのぎやすかったが、7 月に入ると風のない夜などは蒸し風呂の息苦しさとなった。

夜半の復習は座学だけではなかった。体技用のマットやら棒高跳びの用具を戸外に持ち出して、昼間の体技訓練でうまくできなかった者が、それぞれ不得意な科目を練習した。空中転回やら棒高跳びなどがあった。空中転回は前方に踏み切ってくるりと 1 回転するのではなく、逆むきに 3 回という軽業師なみのものであった。不得手同士が互いに助け合い挑戦した。

母の面会

茨城県南部にある谷田部町は、いまでこそ自動車高速試験場が生まれ、筑波研究学園都市の一翼を担って近代的な都市として生まれ変わっているが、当時は見渡すかぎり水田と雑木林に囲まれた田舎町にすぎなかった。1,800 メートルの滑走路が走るだけの飛行場はさらに殺風景で、目を惹く景観といえば、

北側にひらける筑波山の雄大な裾野ぐらいのものであった。

課業の合間や日曜日には外出が許されていた。とって、三重空時代の津や松阪のような繁華街が近郊になかったから、たいていは航空隊指定の倶楽部に出かけるしか方法がなかった。倶楽部といっても、それは練習生たちのために自宅を解放してくれた民家であった。彼らはここで昼食をとったり、畳の部屋でただゴロゴロと横になるのが楽しみであった。

昼すぎに家族が鉄砲風呂を沸かしてくれ、練習生たちが交代で湯につかる。航空隊で全員が一緒に入浴する気分とちがい、一人ひとりがゆったりと風呂釜に身を沈めることができる。裏は竹林であった。風にざわざわと竹が鳴り、その風のざわめきに耳を傾ける……。谷田部でのたのしみといえば、このように他愛ないものだった

そんなある日曜日、母が次弟の五三三を連れて面会にやってきた。土浦駅からのバスの車窓から見えた満開の梅が印象的だったと五三三は回顧する。敏美は外出の許可をもらって倶楽部の民家に5、6人で遊びに来ていた。母は、背負ってきた“つきたての餅”をみんなに振る舞った。

敏美は二人を兵舎へ案内した。途中、何人かが七つボタンの敏美に向かって敬礼をした。母は、敏美の晴れがましい姿を見て誇らしく思った。酒保に立ち寄り、とっくに街から姿を消していたチョコレートを母たちに馳走した。

6尺フンドシ1本

教員たちによる最初の同乗飛行のあと、6週間にわたる本格的な離着陸訓練がはじまった。5人のペアそれぞれは、教員を後席に乗せて九三式中棟の操縦桿を握る。同乗飛行は1日20～30分、これが1週間、2週間と続くころになると、最初の親切な口調が怒声に変わり、そのうちに伝声管が後ろから飛んでくることがあった。

「何をボヤボヤしてるんだ！」と怒鳴られた。

「ただ、真っ直ぐ前ばかりを見ておればいいんじゃない。見張り、見張り

だ！」

南方の戦地帰りの教員だけに、訓練も実戦そのもので、きびしい叱声に敏感な私たちは緊張し、その分だけ身体が固くなって、また怒声をあびた。叱責の絶えまがなく、失敗すると滑走路で総員バツター。さらに、飛行服をつけたまま飛行場1周の罰直が課せられる。

冬服のまま、炎天下に飛行場を1周駆けると、暑熱のため目がくらんだ。谷田部航空隊の滑走路は1,800メートル×1,300メートルの広さである。この4周を走ると、約6.2キロの距離になる。真夏の照りつける日差しの下を、飛行服を着込んだまままで走りつづけると、服の下は流れる汗で蒸し風呂に入ったような状態となる。だが、走り終えたところで飛行服を脱ぎすて涼を取るというわけにはいかないから、彼らは汗と埃まみれのままフラフラで格納庫前に整列する。



右写真

搭乗の順番を待つ練習生

暑さで倒れようものなら、「根性がない奴だ」とさらに制裁を受けるのはまちがいがなかった。練習生たちもこの罰直に閉口して、対抗策を考え出した。飛行服の下の襦袢（じゅばん）を脱ぎ捨て、6尺フンドシ1本のまま飛行場に出て行くのである。けれども、この苦肉の策もすぐ見破られた。

「お前たちのなかに、不心得者がいる」と、教員の一人が進み出ていった。

「みな、ここでいま飛行服を全部脱いでみる！」

全員あわてて格納庫の前で飛行服を脱ぎ捨てた。練習生のうち6尺褌1本の者が大部分で、規則通りに襦袢を身につけている者は数少ない。

そこでまたバツターの嵐が吹き荒れたが、しかしながらその罰直の理由は、

聞かされてみれば彼らも納得のいくものだった。

いいか！ お前たちは海軍軍人だ。もし不時着でもして死んだ場合、助けに来てくれた人が飛行服を脱がせてみたら6尺フンドシ1本だったなんてそんなミットモナイことがあっていいのか。海軍軍人として恥ずかしいとは思わないか。

搭乗員としての誇りを持って、死に際をきれいにしろ、と叱咤されて、さすがにその日は15期生全員がシュンとなった。

軍隊生活にも馴れ

単独飛行が始まると、一方で特殊飛行、離着陸同乗訓練も再開された。飛行作業のもっとも難しい離着陸を教員とともにさらに完璧なものとするためである。

谷田部空の卒業を1カ月後にひかえた18年8月25日、敏美は、「すっかりご無沙汰してしまった」と、父宛に次のように書いた。親に心配をかけまいとしてか、あるいは本心からか「軍隊生活に馴れ心地良く・・・」と書いた。

時節柄尚も暑さ厳しく感じられます。

父上様には意外の久しくご無音に過ぎし誠に心配を懸けました。お変わりなく増産にお働きのことと存じます。私もその後別なく日頃の訓練に頑健にて奮励致して居り点す故、他事ながらご安心下さい。

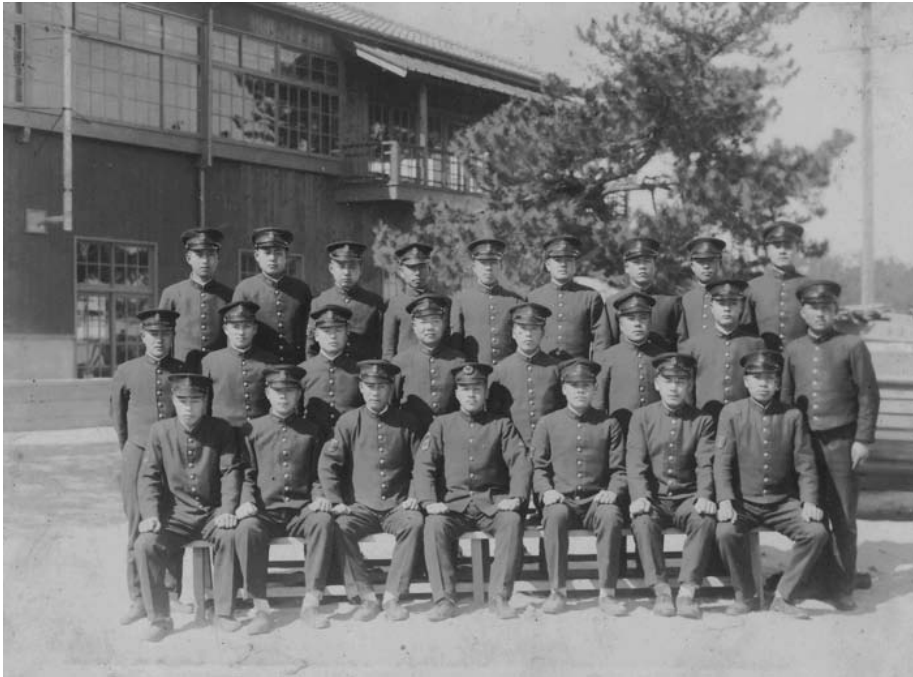
秋とは謂ひながら暑気なかなかよらず、毎日晴天続きで飛行作業には好い天候でございます。頬に汗が流れます。高度は高く昇れば涼しく感じます。近頃は全く多忙で便りもなかなか出せなかった。悪しからずお許し下さい。先般、夏期登山に関東で名高い筑波峰に行軍致しました。絶壁なる山々で山頂には男女体と言う神社が立って居りました。また、先日(19日)には当隊のプールにて、分隊対抗水泳競技もありました。昨日の晩、盆踊り太鼓の音が聞こえ家のことも思い出し懐かしく感じました。

もう私は、軍籍以来1カ年近くなりました。軍隊生活に馴れ心地良く、また、団体生活誠に良きところであります。さて、写真の事私が立派な飛行兵に成るまで御待ち下さい。ではご自愛専一。

敏美は飛練31期生の初歩教程を優秀な成績で卒業した。単独飛行を分隊内でもっとも早く終え、特殊飛行、編隊飛行も難なくこなした。生来の努力家であったから、毎日の飛行作業でも手を抜くことを知らなかった。

そのために、彼はまっさきに練習生たちのあこがれの的「戦闘機搭乗員」に選ばれ、徳島航空隊戦闘機隊に向かうことになった。総勢39名。その他の者は艦爆・艦攻組が宇佐航空隊へ、陸攻組は台湾新竹基地へと配属された。この発表の瞬間、敏美は念願の戦闘機搭乗員として巣立つことができたのだ。

谷田部航空隊の隊門を出、常磐線の夜行列車に乗って東海道線、宇高連絡船と乗りつぎ、四国へ。高德本線で高松から徳島へと丸1日かかりで敏美たちの1行が新任地に到着したのは、昭和18年10月1日のことであった。



写真は谷田部空第6分隊卒業（中段左から2人目が敏美）



2-5 地獄の徳島航空隊

”地獄の徳島”とは

徳島航空隊は開戦後、艦上戦闘機の實用機訓練のために開隊された基地の一つであった。市の北方、旧吉野川と今切川に挟まれた開拓新田を整備し飛行場に造成したもので、現在の徳島空港である。

敏美たち丙飛15期生39名は、期長となった機関科出身の山本敏一を先頭に隊伍を組んで徳島航空隊の隊門をくぐった。長旅の疲れと衣囊の重さで、足なみが乱れていたのかも知れない。

「練習生、待て！」

隊門の中で新たに彼らの教員になった高橋兵曹長が仁王立ちになっていた。

「そんなだらしない歩き方で、この徳島空が通用すると思うか！」

号令台に飛び上がった飛行隊長牧幸男大尉の蛮声――

「これを見ろ！」

牧大尉は火傷で自由の利かなくなった片腕をかばうことなく、号令台の横に飾った木彫の鷲を指し示した。

「貴様たちを、叩いて叩いて鍛え上げる。」

ここを出るまでに、この鷲の眼のような搭乗員に仕上げる。そのつもりでかかってこい！」

それは、「地獄の徳島」を告知する洗礼の儀式なのであった。牧大尉にしてみれば、米軍の大反攻にそなえて大量の搭乗員養成を急務としていたから、尋常一様の訓練ではこの大戦での航空決戦に間に合わぬ、と心に決めていたのであろう。甲飛 10 期生の実用機訓練期間をわずか 22 日と短縮したのもその緊張感の表われの一つだが、丙飛練習生たちに対しても、通常の訓練をさらにきびしくする方法が採られた。

戦闘機搭乗員の訓練

徳島空での訓練内容は次のようなものであった。

(1) 実弾射撃

曳的機の曳航する吹流し標的に対して射撃を行い、各自弾頭に色をつけ、吹流しの弾痕の色によって各自の命中弾数を知る。曳的機の速度は 100～150 ノット。射撃態勢、射撃法は、後上方・下方射撃、前上方・下方射撃、垂直上方・下方射撃、側方射撃、地上銃撃（艦橋掃射）等である。

(2) 写真銃射撃

実弾を使うと危険な攻撃法や、編隊空戦中の射撃効果を判定するために写真銃を使った。判定は可成り不精確であったといわれている。

(3) 単機空戦（空中戦闘）

優位戦（相手より高い高度から空戦に入る）、劣位戦（相手より低い高度から空戦に入る）、同位戦（同高度で空戦に入る）。これ等は空中戦戦法の基本である。

(4) 編隊空戦

1 機対 2 機のものから始まり、逐次機数を増す。開戦前の母艦戦闘機隊で

は 18 対 18 磯の訓練を実施したところもある。

(5) 爆撃

艦爆（急降下爆撃機）の出現により訓練量は減少したが、昭和 19 年には反跳爆撃（低空で接敵、海面に爆弾を落とし、反跳させて敵艦船の胴腹に当てる法）を一部の部隊が訓練した。

(6) 夜間飛行 月明、あるいは晴天の暗夜にだけ実施した。

(7) 定着訓練

飛行場の一点に飛行機を着陸させる訓練である。滑走路の任意の場所に、母艦の飛行甲板を模して、巾約 30 メートル、奥行き約 50 メートルくらいの広さの布板（夜間はカンテラ）を置いて接地点を示し、指導標（進入降下角度の基準となる誘導標識）、夜間は指導灯を手前の布板の左側に置いて、定められた地点に正しく接地させるのである。これができなければ、飛行機が着艦するとき、母艦の艦尾に衝突したり、せっかく着艦しても横にずれて舷側から海にこぼれ落ちたり、行き過ぎて艦首から外に飛び出してしまったりする。

この訓練が終わると洋上を航行する母艦からの発艦、母艦への着艦訓練を行うことになるが、当時、この錬成訓練を行っていたのは、福岡県の築城航空隊（17 年 10 月 1 日開隊）と神奈川県厚木航空隊（18 年 4 月 1 日開隊）の 2 隊だけだった。敵潜水艦の来襲のない周防灘などの内海西部や、東京湾または相模湾などに空母を走らせ洋上訓練を行った。

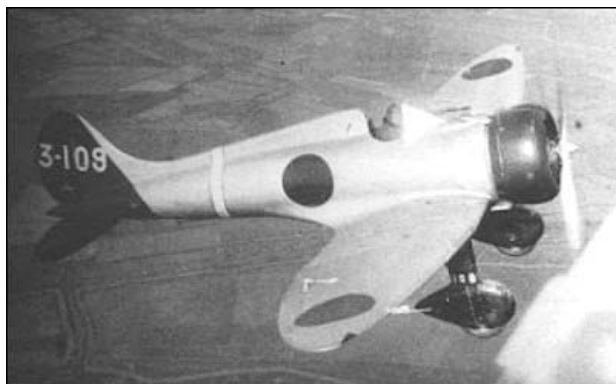
敵に勝つための罰直

徳島空での訓練の厳しさについて、前掲「敷島隊の五人（上）」は、原重蔵からの聞き書き含め次のように書いている。「たとえば、原重蔵の記憶では、飛行場で練習機を壊したため 15 期生全員が 11 名の教員から 2 人につき 5 発ずつ、計 55 本のバッテリー罰直を受けた体験がある。これは練習生のミスによる

もので、実用機訓練用として使われていた複座の九六艦戦のブレーキが利きすぎ、逆トンボの形でエンジン部分が滑走路に叩きつけられてしまった。その事故の責任を、連帯でとらされたのである。

練習用九六艦戦は、こうしてよくトラブルを起こした。徳島航空隊は東側が海で、真冬には海峡側からの強い北風が吹き込んでくるから、これが離着陸時には横風となり練習生を苦しめた。

九六艦戦（写真）はのちの零戦とくらべて脚が弱く、戦地でもよく横転事故を起こした。ここでも事情は変わらず、着陸時に強い横風を受けて流されな



ように修正しながら滑走して行くと、「ブレーキがほとんど利かなかった」と同期生の山田孜が回想している。

行き足が止まらないためにあわててブレーキを強く踏むと、足をとられ、ぐるりと1回転してしまう。運の悪いときは、それだけで脚

が折れた。

教員たちも、飛行場ではバッテリーを離したことはなかった。こうした練習生たちのトラブルを目撃すると、単純なミスなら飛行場で、軽い事故なら居住区で——。しかし、脚折れ事故などの大きな事故を練習生たちがしでかすと、その夜は凄惨な総員罰直が待ち受けていた。前述のバッテリー55本のケースなどは、その1例である。

バッテリー罰直、前支え、飯上げ……予科練生活にふれる場合、こうした苛烈な制裁ぬきで語ることはできない。実際、訓練や罰直の度合いがきびしければきびしいほど短期間で精強な搭乗員が生まれ育ったが、その分だけ彼らの心に大きな傷口を残したに違いない。

(鬼の谷田部)

(地獄の徳島)

とは、戦後も丙飛 15 期生たちが万感の思いをこめて同期会で語りあう言葉である。

平野恵に罰直についての感想を聞いてみた。罰直の筆頭格は「飛行場 1 周」だといった。炎天下、飛行服を着たまま飛行場を延々と走らされた。2 番目はやはりバッテリーだ。尻にタコができた。でも、原因は自分たちの方にあったからやむを得ないと思っていた。

丙飛 15 期生たちが体験した飛練時代は、米軍の大反攻が始まった時期にあたる。ミッドウェー海戦の敗北、ガダルカナル島からの日本軍撤退、米軍によるニューギニア作戦開始。戦線では日本側の敗勢がめだっていた。飛練時代の教員は、これらの過酷な戦闘を経験してきた前線帰りの搭乗員が多かった。彼らは、訓練はどんなに苛酷で厳しくてもよい。これ以外に、米軍とまともに太刀打ちできる方法はない、というのが彼らの経験に基づく結論であった。

徳島空では相変わらずきびしい訓練がつづいていた。死亡事故が 1 度も起こらなかったのが不思議なくらいであった。12 月に入ってから、練習機はカーキ色の塗装が目立たなかった九六艦戦から複座の零戦に代わった。やはり第 1 線機ともなると、脚の入れ方、フラップの使い方、操縦棹の操作なども軽快で、当初にしばしば起こった脚折れ事故なども皆無になった。

卒業

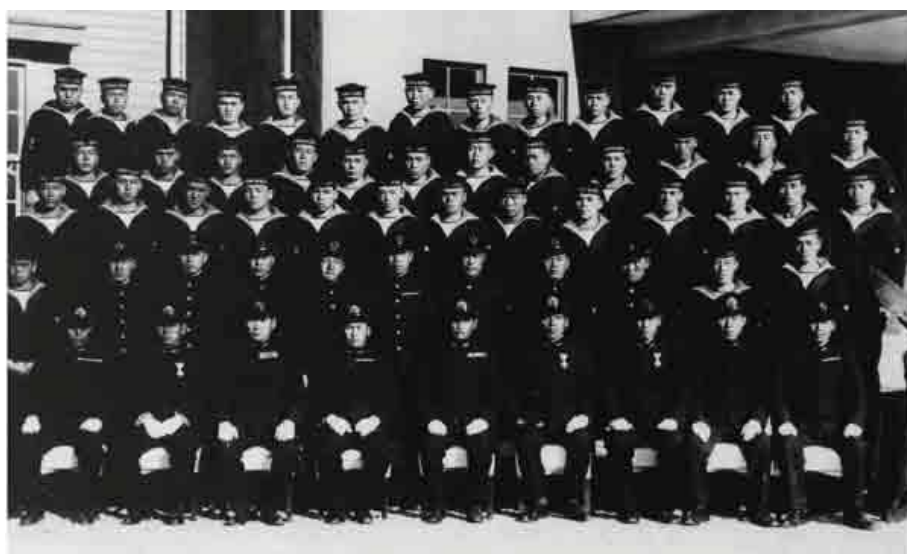
昭和 19 年 1 月に入ると、すでに甲飛 10 期生の中野磐雄たちが徳島空から実施部隊配備となって姿を消し、つづいて甲飛、乙飛の後輩たちが実用機教程に進むために同隊の隊門をくぐった。

丙飛 15 期生志賀敏美もまた戦場に立つ日が近づいてきている。さらに零戦による訓練は、離着陸に始まって特殊飛行、宙返り、失速反転、横転、緩横転、編隊訓練とますます高度になっていた。これに空戦訓練、射撃訓練が加わっ

た。

1月27日、敏美は徳島航空隊を卒業した。海軍上等飛行兵の辞令を受け、第一航空戦隊司令部附を命ぜられ原重蔵とともに厚木海軍航空隊に向かった。その先は、戦争が苛烈な様相を帯びはじめている太平洋の戦場である

写真は、徳島海軍航空隊での第31期飛練専修科（戦闘機操縦）の卒業記念写真である。最上段右から3人目が田邊準一。3段目右から3人目が敏美、同じく6人目が原重蔵、7人目が永峯肇である。



徳島空第31期飛行練習生戦闘機専修科
卒業記念写真

(総勢39名、うち戦死者32名<特攻6名>、
生存者7名で、戦死率は80%だった。)



同県人・田邊準一

新入練習生の自己紹介のとき、同県人のいることが分かった。彼の名は田邊準一、平市（現いわき市）の出身で、筑波海軍航空隊から徳島空に入隊してきた。「練習生時代に同県人と出遭うことはまれだった上に、同じ福島県でも浜通りの南の平市と北の相馬郡、故郷に近いこともあって非常に嬉しかったことが脳裏に焼き付いていると、田邊は回想した。（田邊準一『海軍少尉志賀敏美君を偲ぶ』（「国見の里から」志賀五三三、平成6年）

「それからの日々、友愛を深め、隊内では毎日の過酷なる飛行訓練（空戦、射撃、戦闘編隊等々）、地上では軍事学の勉強、夜になると午後7時から9時までの温習時間（1日の復習）には席を同じくして語り合い、また、17、8歳の私たちには何も解らないまでも力一杯、学科に、飛行訓練にと青春をぶっつけた。泣いたこともあり、苦しい中をお互い励まし合っただった。彼は極めて温和な人柄でありながら、何事にも率先躬行をモットーにしていた。

ある温習時間のことだった。敏美の話しぶりのおかしいのに気付いた。よく見ると”あご”の骨が外れている。教員に鉄拳を喰らったのだった。医務室に連れて行き、その後2週間訓練を休んだ。しかし、”あご”が治ってからの1週間、敏美だけ午前、午後と人の2倍の特訓で仲間の技量に追いついた」



そして、徳島空卒業の日の、敏美との別れについて次のように書いている。

昭和19年1月27日、徳島海軍航空隊第31期戦闘機操縦専修科を卒業し、遅まきながら同期一同は実施部隊または前線基地へと赴任が決まった。志賀敏美君は神奈川県厚木海軍航空隊、第一航空戦隊司令部附。私は福岡県の築城海軍航空隊。同期の諸君もそれぞれ本隊および基地へと午後零時

徳島航空隊を出発し、『散る桜残る櫻も散る桜』と誓い励まし合い、ただひたすら共に武運を祈り、同期 42 名、涙の握手で別れた。志賀敏美君とは卒業後お互いに連絡が途絶え、いずれかの基地または内地の航空隊で再会を願っておりましたが、今日まで再会できないままでした。(同上)

戦後 50 年、敏美の情報の第 1 報を生家にもたらしてくれたのは、このときの
同県人・田邊準一だった。

第3章 前線基地へ

敏美、601 空時代の年表

日付	記事
昭和19年 1月27日	海軍上等飛行兵を命ずる 第一航空戦隊附きを命ずる。厚木航空隊へ転勤
同 2月5日	第601海軍航空隊附きを命ずる
同 3月1日	空母瑞鶴に乗艦、シンガポールに向かう
同 3月15日頃	マレー半島バトバハ基地 ① 瑞鶴戦闘機隊へ転勤
同 5月1日	海軍飛行兵長を命ずる
同 5月1日頃	翔鶴戦闘機隊へ異動
同 5月5日	リング泊地入泊 ②
同 5月15日	タウイタウイ泊地入泊 ③
同 6月14日	ギマラス泊地入泊 ④
同 6月15日	「あ号」作戦、サンベルナルジ海峡通過 ⑤
同 6月19日	マリアナ沖海戦に上空直掩隊として参加、翔鶴 沈没 ⑥
同 6月22日	沖縄・中城湾に入港
同 6月27日	大分基地に帰還、601空再建に従事
同 8月1日	第653海軍航空隊へ転勤

- 表中の丸数字は次図に対応する。



一航戦 601 空に

1月27日徳島海軍航空隊を卒業した敏美は、次の発令を受けた。

昭和19年1月27日	海軍上等飛行兵を命ずる
同日	第一航空戦隊司令部附を命ず
昭和19年2月5日	第601海軍航空隊附を命ず

第一航空戦隊（略して「一航戦」）とは、連合艦隊第三艦隊所属の空母戦隊であり、その編成は、3隻の空母（瑞鶴、翔鶴、瑞鳳）からなっていた。

「ろ号」作戦（ブーゲンビル島沖航空戦—11月5日～12日）に備えラバウル基地に進出し、3次にわたる航空戦を戦ったが、総参加機数173機のうち70パーセントにあたる121機を喪失するという、手痛い損害を受けた。

その後、再建作業を岩国基地（山口県）で行うことになり、数名の士官がラバウルから引き揚げ、他の飛行隊と奪い合うようにして飛行機を集めた。艦上攻撃機と艦上爆撃機を鹿児島県の鹿屋基地に、艦上戦闘機を岩国基地に集結した。搭乗員も、ラバウルその他、各地の航空隊から集められた。その頃、

間もなく敏美の戦友となる池田二飛曹、平野二飛曹が、一航戦再建のために岩国基地に派遣され、群馬県の中島製作所太田製作所に、飛行機の受け取りに出向いたりした。

池田二飛曹は、大村海軍航空隊第 29 期戦闘機操縦専修科を卒業し、38 名の同期の中からただ一人母艦隊勤務に選ばれて築城航空隊（福岡県）に配属、この地で空母への発着艦訓練を終えた。同じく平野二飛曹は、徳島海軍航空隊で第 28 期戦闘機操縦専修科を卒業し、同じく築城空において発着艦訓練を終えていた。当時、築城空は空母戦闘機隊の西日本唯一の訓練基地だった。

両人は、昭和 16 年 5 月に佐世保第二海兵団入りした同期の仲間だった。その後、別々の艦隊勤務を経験したのち、それぞれ飛行予科練習生への転科試験を経て、築城航空隊で再会、いっしょに発着艦訓練をした。予科練入隊は平野が先で丙飛 12 期、池田は 2 カ月遅れの丙飛 13 期、そして敏美は、さらに 2 カ月遅れの丙飛 15 期である。

新しい配属先を示達された敏美は、あこがれの飛行服姿に変わった喜びと、間もなく前線に向かう決意を両親宛に書いた。

拝啓

父上様その後お変わりなくご活躍の事と存じます

降って私としても愈々晴れの长空南方戦線の決戦に参ります

セツ鉤も終了して巖たる帝国海軍の翼の姿に変わりました

さて、在中の通帳ご自由に銃後産業に当ててください

父母様の顔も夢で見ました

では、参ります

敏 美

父母様

生きては帰れまい、その心情が文末の「参ります」に表れている。「行って参

ります」は、「往復切符」だが、「参ります」は、片道切符の積もりで書いたような気がする。もう使うこともなかりとうと貯金通帳と印鑑を同封した。遺書とは書いてないが、遺書のつもりで書いた。

貯金通帳は、後日、父親の手で母校の相馬農蚕学校へ寄贈された。佐藤弘毅校長から丁重な礼状が届けられたが、文中に、「多大の御寄附に預り且つ又今回得難き珍品御恵贈被下」とある。入隊にあたって贈られた餞別プラス練習生時代の給料を寄付したと思われる。“珍品”とはいったい何だったのだろう。

手紙にはすべて「検閲済」とか「軍事郵便」のスタンプが押印してある。機密保持のため配属部隊や艦隊名などは一切書けなかったのだろう。この手紙にも、また、この後の手紙にも、“どこから”といった記載は一切なかった。

601 空、シンガポールへ

再建成り総勢 200 機あまりとなった一航戦は、シンガポールに進出して訓練することになった。理由は石油であった。日本本土に備蓄してあった石油も底をつき、油槽船も敵の潜水艦に沈められて補給ができない。そこで、石油の産地に近いシンガポール南方のリング迫地やボルネオ北方のタウイタウイ迫地を利用して訓練に従事し、待機することにしたのだ。

一航戦の飛行隊は、母艦隊と空輸隊の 2 つに分けられた。母艦隊は、瑞鶴または翔鶴に乗艦し、母艦を護衛しつつ南方に向かい、空輸隊は台湾・サイゴンなどの陸上基地を中継しながら、シンガポールまで飛行することになった。

母艦隊の一員となって南に向かった池田二飛曹は、当時を次のように回想する。

「いよいよ着艦訓練も修了し、岩国沖で空母瑞鶴に着艦した。

19 年 2 月 1 日、氷雨まじりの瀬戸内海から内地を後にした。長い航海の後、海南島沖で母艦から飛び立ちシンガポールへと飛行した。

シンガポールのセレーター基地には、先着の空輸隊員や、ラバウル方面からの転勤組など、大勢の搭乗員がいた。」

このとき、平野二飛曹も同じコースをたどっていた。

一方の空輸隊については、白浜芳次郎氏の記録を引用しよう。

「19年1月末に、飛行機隊はそれぞれの隊ごとに行動を起こした。まず母艦隊は母艦に収容のため飛び立ち、続いてわれわれの空輸隊も行動を起こした。空輸隊は数千マイルに及ぶ大飛行である。しかも、100機あまりの航空機が同時に行動するので、計画も天候も慎重に十分計画された。

19年2月×日、わが飛行機隊は鹿屋航空基地を飛び立った。最初の目的地は台湾の高雄飛行場である。南国の地高雄についたわれわれは、気候の変化に面食らった。私たちの感覚は常夏の国であるが、私たちの皮膚はまだ暑さになれず、ちぢこまっていた。着陸した時は熱風も涼しく私たちの肌をなでていたが、3、40分もたつと暑さのために汗が流れて来た。

常夏の国に来たと初めて皮膚が感じたような有り様であった。しかし、台湾は中国大陸に近い関係上、夜間頻繁に敵機が来襲した。暗くされた兵舎の窓から見る夜空には、南十字星とともにB-24のものらしい爆音が聞こえて来る。そして、わが防空陣地の高射砲が、花火を打ち上げるように暗い夜空に発砲され、内地から来たわれわれは、身近に戦いというものが感じられ、身内の引きしまる思いだった。

翌朝、われわれはシンガポールのセレーター基地にたどりつき、無事、空輸目的を達成することができた」（白浜芳次郎『最後の零戦』学研 M 文庫、2000年）

シンガポールのセレーター基地に到着した飛行機隊は次の3隊に分けられ、それぞれの基地で訓練することになった。

翔鶴戦闘機隊（増山大尉以下28名） → セレーター基地

大鳳戦闘機隊（瀬藤大尉以下32名） → バトバハ基地

瑞鶴戦闘機隊（酒見大尉以下28名） → バトバハ基地

池田二飛曹と平野二飛曹は、瑞鶴戦闘機隊員としてバトバハ基地に移った。

バトバハは、シンガポールの北西約 100 キロ、マレー半島のマラッカ海峡に面した小さな町で、さらに、そこから 10 キロほど奥まったジャングルの中に航空基地はあった。

新編 601 空開隊

2 月 15 日、各飛行機隊がシンガポールの基地で着々と錬成をしている間に、連合艦隊司令部は 601 空を新編して、従来、一航戦に従属していた飛行機隊を母艦から切り離して訓練し、必要に応じ各空母に分乗して出撃する体勢をとることにした。これは従来あった、それぞれの戦闘機隊は自分の母艦の艦爆は護衛するが、他の母艦の艦爆には冷淡であるといった欠点をなくし、飛行機隊の大同団結を高めようというのが理由だった。

瑞鶴・翔鶴の飛行機隊は、一応、母艦の指揮下を離れて、601 空という新しい組織の一員となった。3 月 7 日、待望の巨大空母大鳳（29300 トン）が竣工して、一航戦に編入された。瑞鶴の竣工以来 2 年半ぶりの正規空母である。

3 月 10 日、連合艦隊の戦時編制が改訂され、連合艦隊の決戦兵力は、母艦航空隊から成る第三艦隊を主力とし、この護衛を主任務とする第二艦隊（戦艦 5、重巡 10、軽巡 1、駆逐艦 16 隻）とで第一機動艦隊を構成した。司令長官に小澤治三郎中将が任命され、同時に一航戦を直率し、第三艦隊司令長官を兼務することになった。

第三艦隊の編成はつぎのとおり。

一航戦 空母（大鳳、瑞鶴、翔鶴）

601 空（艦偵 9、零戦艦戦 81、彗星艦爆 81、天山艦攻 54、計 225 機）

二航線 空母（隼鷹、飛鷹、竜鳳）

652 空（艦偵 0、零戦艦戦 81、彗星艦爆 36、天山艦攻 27、計 144 機）

三航戦 空母（千歳、千代田、瑞鳳）

653 空（艦偵 0、零戦艦戦 63、彗星艦爆 0、天山艦攻 18、計 81 機）

四航戦 戦艦（伊勢、日向）

634 空

十戦隊 巡洋艦 (矢矧) ほか 4 コの駆逐艦隊

第三艦隊 9 隻の空母と 450 機 (艦偵 9、零戦艦戦 225、彗星艦爆 117、天山艦攻 99) の大母艦航空隊で、マリアナ沖のアメリカ大機動部隊と対決することになった。

敏美、バトバハ基地へ

敏美は、徳島空を卒業して 1 カ月あまりたって、バトバハ基地の池田たちの前に姿を現した。そのときの印象を、池田は次のように回想する。

「19 年 3 月、空母瑞鶴戦闘機隊に凛々しい搭乗員が 4~5 名転勤して来た。その中に志賀敏美君がいた。色白で引締った口元が、いかにも頼もしく感じた。これが彼との最初の出会いであった」

池田二飛曹たちが瑞鶴に乗艦したとき、敏美は徳島空を卒業したばかりで、まだ、“発着艦訓練”を終えていなかったから、彼らとは同行できなかったはずだ。では、いつシンポールに向かったのだろうか。

その頃、瑞鶴は 2 度シンガポールに入港していた。

2 月 1 日 呉出港後内海西部に回航

2 月 6 日 洲本沖出港

2 月 13 日~20 日 シンガポール寄港(母艦隊を下ろして呉にトンボ返り)

2 月 27 日~3 月 5 日 呉寄港後内海西部に回航(601 空の第 2 陣が乗艦?)

3 月 8 日 洲本出港

3 月 15 日 シンガポール入港

つまり、2 月 13 日の入港では、池田二飛曹たちを下ろした後、瀬戸内海にトンボ返りをして、3 月 15 日に 2 度目のシンガポール入りをしている。

このときの瑞鶴に敏美は乗艦してバトバハ基地に飛んだのではなかろうか。発着艦訓練は厚木空で行い、瑞鶴の出港直前に、岩国基地あたりへ飛び、そ

ここで内海に浮かぶ瑞鶴に着艦したと思われる。

ジャングルの基地

バトバハ基地とはどんなところだったのだろうか、池田氏の回想記によると、「基地と言っても椰子の樹を切り拓いた細長い草原の滑走路が2つあるのみで、付近は鬱蒼たるジャングル、そのジャングルも半分はぬかるみであって、ところどころに泥水の川が気味悪く澱んでいた。上空からは樹が繁っていてそのぬかるみは見えなかった。水の中でもすべて木が生えているのであった。



海岸には日本のような気持のよい砂浜ではなく、水際まで熱帯樹に蔽われていて、その間に、原住民の家がポツンポツンと数軒あるのみであった。私たちの兵舎は椰子の木陰にバラックで造られてあり、原住民の家を大きくしたくらいな建物が5つか6つあった。実に原始的なさびしい場所であった。

ジャングルには私たちがポケット猿と言っていた小さいモンキーが沢山いた。私たちはこれを捕えて来ては相手にして楽しむのであった。深夜にはときどき番兵が「虎に注意せよ」と言いながら兵舎を廻っていた。虎は残飯捨て場に現れるらしいが、私は見たことがなかった。ジャングルの沼にはワニもい

ると原住民は言っていた。サソリやヤモリはどこにでもいた。整備員数名がサソリにやられた。サソリにやられても早く手当すれば死ぬようなことはなかった。

このような風土病の地に於いては、まず炎熱と病魔と戦わねばならなかった。激しい毎日の実戦訓練であったから、当然犠牲者も続出した。その頃、隊長瀬藤大尉は他に転出され、後任として、川添大尉が戦闘機隊長として着任されていた。

命がけの着艦訓練

敏美たちのバトバハ基地での訓練課目は、初歩の編隊から単機空戦、編隊空戦（少数機から多数機まで）、射撃、母艦発着艦、夜間飛行、攻撃隊直掩法、制空訓練、対艦船銃撃と多岐にわたった。

訓練日課も、早朝暗いうちに整備員とともに飛行機を格納庫から出して試運転を行い、まだ明けきらぬうちに飛行場を発進して行く。近くはマラッカ海峡、遠くはインド洋まで哨戒飛行を続けた。食事は朝、昼、晩の3食とも飛行指揮所でとり、夜は夜間飛行を終えてから兵舎に帰る、といった猛訓練であった。

2月中旬からはじまった訓練も、4月に入るとますます高度なものとなり、母艦発着艦、襲撃訓練となって来た。母艦発着艦は母艦搭乗員となるものは、一度は通らねばならぬ関門である。どんなに空戦上手でも、母艦に降りることができない者は、母艦搭乗員となることはできない。それほど、これは非常な危険をとまなうものであった。

したがって、着艦訓練がはじまると、古強者の先輩搭乗員でも、1週間も前から酒も飲まず、身を清め、着艦の研究を行う。なんといっても高速の飛行機で、わずか横幅20メートル前後、長さにおいてもせいぜい60～70メートルくらいの所に着艦しなければならない。

しかも母艦は洋上を高速で走っているのに、ウネリや波によって左右に傾い

たり上下に動いているので、修正が2分の1秒遅れても、舷側にはみ出したり艦尾に激突したり、前方に飛び出してバリケードにぶつけるというように、生命に関係するのである。

また、よし生命に別条なくとも、飛行機を壊せば、さっそく母艦搭乗員たちにニックネームを付けられ、艦内においても肩身のせまい思いをしなければならぬのであるから、搭乗員たる者も真剣である」

このような訓練を、開戦前の搭乗員は、飛行時間300時間くらいではじめたが、敏美の頃はそんな余裕はない。約半分の150時間足らずではじめなければならなかった。同輩の殉職を目の当たりにしながら、着実に技術を身につけていった。

遭難機の搜索

ある日、斎藤二飛曹は射撃訓練を終えての帰路、飛行場より約2キロ離れたジャングルに墜落した。エンジンの故障のためらしく、幸い、2機の友軍機がこれを目認し、内1機が急報のため帰投、1機は墜落箇所上空を旋回していた。基地では即刻救助班が編成され、10名ずつ位いで数班に分かれ、拳銃と小銃とを持って出発した。途中のジャングルの中で、虎、ライオン、イノシシ、毒蛇などに遭遇する恐れがあったからである。私もこの救助班のひとりとして加わった。

ジャングルを密林と訳するが、まさにその通りで、上方は枝が繁り合って全く空を望めず、灼熱の太陽の下であるにも拘らず、夕暮のように薄暗いのであった。それで方位がわからないので、上空を旋回している友軍機のエンジンの音をたよりに進んだ。猛獣と間違えて同志討ちをしないように、絶えず声をかけ合いながら、約一キロばかり進んだとき、地面に虎の足跡を発見した。そこで一同拳銃の安全装置をはずした。

なお、200メートルぐらい進んだころより全くの泥沼となって、それより密生している樹木の根につかまり、またその下を潜り、あるいは泳ぎ全身泥まみ

れになって進んだのであった。そして漸く、ジャングルの中に逆立ちとなった斎藤機を発見、座席に失神状態となって伏せている斎藤二飛曹を風防を破って引き出した。

斎藤二飛曹は一見したところ、致命傷は受けていないらしく、生命は救かるように思われた。われわれは遭難機の発見を上空の友軍機に合図した。友軍機はこれを確認して飛び去った。四方より次々に救助班が現われた。墜落した零戦も使用できる場所は取りはずして持ち帰った。

私たちは斎藤二飛曹をタンカに乗せ、背に余る沼は泳ぎながら、又、ある個所では背負いながら、木の根を潜ったりして、一刻も早くと救出につとめたのであった」

艦隊攻撃訓練

5月上旬、601空全戦闘機隊はセレーター基地に集結し、大部隊の戦闘訓練を行なうことになった。以下は、池田二飛曹の記録である。

私たち分遣隊もこれに参加するため、僅かの間だったが、思い出深いジャングルの基地バトバハを後に、砂煙を残して離陸していった。幾人かの戦友の永遠に眠るバトバハの基地よ、サヨウナラ。心の中で亡き戦友の冥福を祈りながら、一路セレーター基地に向かった。

セレーターに着くと、久しぶりで、全戦闘機隊員がいっしょになった。そして、ふたたび、実戦同様の激しい訓練が毎日のように行なわれた。当時リング湾には、日本艦隊の大部分とも言うべき第一機動部隊が在泊していて、近づく海上決戦に備えて猛訓練中であった。私たちセレーターに集結した航空隊も、水上艦艇の総合訓練に参加することになった。

5月中旬のある日、リング湾に於いて艦隊攻撃訓練が行なわれた。約20機の零戦が、艦隊の上空を護衛し、攻撃に來た敵機（友軍による仮想敵機）を攻撃するのである。私たちの小隊は艦隊上空護衛となり、約30前に発進した。そして1番機山本飛曹長を先頭に、勇躍リング湾上にさしかかった。

味方艦艇が数隻見えた。空母も3隻、大鳳、翔鶴、瑞鶴のほか巡洋艦、駆

逐艦など数隻がいた。区隊ごとに別れ、高度 3,000 メートルにて上空警戒をはじめた。艦隊は輪型陣をとっていた。その速力も 20 ノット以上で、大小の白い航跡が長く尾を曳き、攻撃隊の来襲を待っていた。

敵味方の相違こそあれ、近くこのような輪型陣をとって驀進する敵空母群を攻撃することになるのだと思うと、実戦と同様の武者振いを感じた。やがて攻撃隊を発見した。1 番機が大きくバンクした。私も相当注意して見張っていたが、やはり発見は 1 番機の方が早かった。敵味方の区別をするために上空護衛機は翼に白線をひいてある。1 番機がぐんぐん高度を下げはじめた。攻撃隊は高度 5,000 ぐらいであるのに変だなんて思って、フト前下方を見ると、いるいる。雷撃隊が超低空で突入していた。

艦隊は Z 形運動を始めた。上空では空戦が始まった。雷撃隊は次々に超低空で艦隊に殺到した。私たちは、魚雷投下を終えて離脱する雷撃隊を捕捉、高度 200 メートルにて反復攻撃を敢行した。低空で反転しては急上昇し、再び下方の雷撃機を攻撃する。海面がぐんぐん上って来る。急反転、そして急上昇、再び攻撃——それを繰り返した。

1 番機の技倆がうますぎるため、2、4 番機は、ついてゆくだけで精一杯である。それでも同じような攻撃を何度も何度も繰り返した。つづいて、第 2 攻撃隊が突入して来た。私たちはいろいろな角度から、これへの攻撃を繰り返した。その雷撃機中、天山 1 機が私たち戦闘機の攻撃を避退せんとした瞬間、右翼端が海面にあたった。パッとしぶきをはね上げたと思うと、左翼と胴体がバラバラに散った。忽ち海面は火の海となった。私は 1 番機につづいて急上昇し、高度をとりながら「しまった」と言った。

それが、われわれの攻撃を避けようとしたものだっただけに、ひどく胸を打った。その後も攻撃は数秒つづき、間もなく終了した。基地に帰ってから、1 番機がくわしく、天山機の殉職の様子を報告していた。隊長はただ黙ってそれを聞いておった。

やがて 5 月×日、いよいよ空母に乗艦の命が下った。

「おい、いよいよ古巣に帰るぜ」

この命令が出てからは、搭乗員だけはみな笑みをたたえ、その足どりも軽

かった。艦隊の搭乗員は、やはり毎日波に揺られる艦内生活が恋しかったのだ。

翔鶴戦闘機隊へ

いよいよ空母分乗の日が来た。さすがに広いセレーター基地も 601 空の翼で埋まっていた。それぞれ乗艦する空母が次の通り決まった。

隊長川添大尉以下 30 機は大鳳へ、増山大尉以下 24 機は翔鶴へ、そして、酒見大尉以下 24 機は瑞鶴へと、それぞれ配属になり、池田は瑞鶴と決まった。そして、それまで酒見大尉の下で池田二飛曹とともに訓練をしてきた 4 名(佃精一飛曹長、藤島博之上飛曹、平野恵二飛曹、志賀敏美飛長)が、瑞鶴から増山分隊の戦闘機隊員として翔鶴に移ることになった。この 4 名が、6 月 19 日のマリアナ沖航空戦で、上空直掩隊の第 1 中隊第 2 小隊の 4 機として編隊を組んだ。

下の写真は、瑞鶴戦闘機隊員一同

(19 年 5 月敏美たちが異動する直前、セレーター基地戦闘指揮所前で撮影)



(最前列左より) 中矢長蔵一飛曹、志賀敏美飛長、黒木一飛曹、塚本一飛曹、
★平野恵二飛曹、★池田速雄二飛曹。

(前から2列目左より) ★福井義男少尉、大藤三男大尉、分隊長・酒見郁郎大尉、深川清大尉、★佃精一飛曹長。

(前から3列左より) 三宅実二飛曹、花村雅之上飛曹、佐多忠久一飛曹、神崎三根雄上飛曹、白川正助二飛曹、山本一郎飛曹長、中村常石上飛曹、前田秀明上飛曹、高山澄一飛曹。

(最後列左より) 松本光太郎飛長、倉崎高次飛長、坪田与士雄一飛曹、☆山口市郎一飛曹、藤島博之上飛曹、田村雅男飛長。

総勢26名。うち、戦後までの生存者4名(★印)、同じく不明1名(☆印)。下線は、翔鶴に異動した4名。

敏美は、直前の5月1日付けで海軍飛行兵長(略して「飛長」)に昇進した。苦勞をともにした敏美たちとの別れを、池田は次のように回想する。

5月はじめ、セレーター基地に零戦80余機が集結、いよいよ艦隊決戦間近の感がしていた。艦攻・艦爆・戦闘機合同の機動部隊攻撃訓練も終わり、数日後に母艦に収容と云うときに突然、佃精一飛曹長、藤島博之上飛曹、平野恵二飛曹、志賀敏美飛長の4名が空母「翔鶴」へ移動した。

一つ釜の飯を喰っていた戦友たちともしばしの別れである。だが空母さえ違え、戦場は一つである。

『さらば、決戦場で!』

私たちは肩を叩き、手を握り合いして励まし合った。そして、何分間かおきに小編隊に別れ、次々にセレーター基地を飛び立っていった。私も1番機山本飛曹長の後につづいて機上の人となった。もう2度と来ることはないであろうシンガポールよ、さらば!

敏美がその後池田二飛曹と再会するのは、マリアナ沖海戦で敏美の乗艦翔鶴が沈没、瑞鶴に移乗したときだった。

この頃書いたと思われるはがきが生家に残されている。発信元を示すのだから

うか裏面に「佐世保局気付イ 19 イ 109」とある。

「拝啓 長らく御無音に過ぎました。悪しからずお許し下さい。
その後父母様にはお変わりなくお暮らしの事と拝察致します。
私も相変わらず元気澁刺として決戦的大空へ邁進致しております故
ご安心下さい。
内地も桜花散り果て早若き青葉の頃でせう。5月の時そろそろ農務も多
忙のことでせう。
父母様には尚一層御身体に御注意下さい。私も愈々進級熱を以て頑張
り奮闘致す覚悟です。 敏美 」

第4章 いざ、出撃

4-1 一航戦、リングア迫地に集結

全機、母艦へ収容

5月5日、セレーター基地に601空の飛行機が集結した。第一機動艦隊に対し連合艦隊司令長官豊田副武大将より、5月20日までに比島南西端のタウイタウイ泊地に集結せよとの命令が発せられたからだ。セレーター基地に集結した飛行機は総数250機、見るからに頼もしい限りだった。

翌6日、飛行機隊はリングア迫地で待機する母艦群に収容されるため、小隊ごとつぎつぎに離陸した。わずかな期間だったが、セレーター基地での辛かったこと、楽しかったことなどが脳裏をよぎる。

編隊はジョホール水道上空を大きく旋回した。シンガポールの街の深緑の間の赤い建物があざやかに目に入る。私たちの空母の待っているのは、シンガポールの南方、ついこの間訓練を行なって来たスマトラ島リングア湾であった。

シンガポールから海上に出れば、無数の小島が点々と連なり、それらの到るところに、要塞と重油タンクがあり、大きなクレーンが突っ立っている。まるで瀬戸内海のような景色であり、これなら正しく軍港の適地であり、しかも重油の産地と来ている。ただ予定の戦場に遠いのが唯一の欠点であった。

20分ほど飛ぶと、遙か前方に、白く銀色に光るリングア湾が見えはじめた。リングア群島は銀色の中に点々と連なり、やがてその沖にわが艦隊も見えはじめた。なおも近づいてみると、なつかしい空母3隻が、数隻の駆逐艦と共に白波を蹴たてて驀進している。そしてすでに私たちより数分前に発進した零戦を着艦収容中だった。

着 艦

母艦航空隊員にとってもっとも神経を使うのが、空母への着艦である。ちょっとした油断が死に直結するからだ。そのせいか、元航空隊員の戦記は例外なく、着艦の詳細を書いている。以下は、池田速雄氏の「血戦マリアナ沖」からの引用である。

やがて私たちも、高度を 500 メートルに下げ、母艦上空を通適した。たのもしい大型空母、これが現在の 9 隻の空母のうちの生き残りの正規大型空母であった。殊に空母「大鳳」はまるで浮島の如くたのもしく、威風堂々と驀進していた。その飛行甲板は長いというよりむしろ盥の如くまるい感じがした。私たちは機上よりしばしその偉容にみとれていた。

ずいぶん大きいなあ、一度乗ってみたいものだな」と思いながら、大鳳に乗艦することになった戦友が羨ましかった。

大鳳、翔鶴、瑞鶴は、各々、1,500 から 2,000 メートルの間隔をもって、20 ノット以上もあると思われる速力で直進しながら、盛んに飛行機を収容中だった。

飛行甲板後部の紅白線の標識がくっきりと浮き出している。瑞鶴と翔鶴とは実によく似ているが、この標識で一見して区別がつくのである。

一番機がフックを下した。「着艦よろしきや」の合図である。つづいて私もフックを下した。飛行甲板の中央白線が点々と白くあざやかに浮き上がっている。新しく塗りかえたものであろう。下したフックが、飛行甲板に接艦と同時に、幾本か張り渡してあるワイヤに引っかかるのである。何回着艦しても、いざ着艦となると緊張する。着艦の際の失敗は人も機も諸共に最後となる場合が少なくないのである。

飛行甲板前部には、すでに着艦した飛行機が並べられ、前部リフトで次々に格納庫に収容されている。その後方にはバリケードが立てられている。(防壁) 接艦のやり直しはきかないので、接艦と同時にフックがワイヤーにかからなければ、いやでもこのバリケードに激突するのである。

空母上空を 1 旋回、高度 200。編隊解散の 1 番機の合図に、列機はサッと

ひらいた。そして1機1機着艦誘導コースに入る。



空母が白く航跡の尾をひいているその 300 メートル後方に駆逐艦がついている。高度 200 メートル、私は 1 番機との距離をとりつつ、第 1 旋回、第 2 旋回、空母を左に見ながら、すなわち空母の針路と反対の方向でフラップを下げた。飛行甲板の両舷には、それぞれ係の要員が、忙しく機敏に動いている。又、先に着艦した乗員も見ているであろう。

翼端が空母の艦尾をかかわったと同時に第 3 旋回、やや艦尾の方向に飛行し、駆逐艦上空で旋回である。

(この第 4 旋回、または第 3 旋回で空母に気をとられ、失速となって墜落することがしばしばあった) 空母左舷の指導灯 (赤青灯) により着艦角度度 (パス) を合わせる。

零戦の着艦速力は 60 乃至 65 ノットであった。訓練された機敏にして微妙な神経と熟練した腕と度胸とによって、操縦し着艦するのである。搭乗員が着艦できるようになるまでには相当の訓練を重ねていたのであった。601 空搭乗員は全員何回か着艦しているので、着艦は鮮かに機敏に行なわれた。

私が第 4 旋回を廻ったとき、1 番機が着艦したところだった。2 番機が第 3 旋回に 4 番機が第 2 旋回に続いている。

飛行横は安定し、絶好の角度である。飛行甲板がだんだん浮き上って来るように見える。艦尾通過と共にエンジンをやわらかく急ぎ絞り、操縦桿を

引き起こした。飛行甲板がチラチラと後ろに流れた。と、フックがワイヤーにかかり、大きなショックとともに磯は中央に停止した。バリケードとワイヤーがいっせいに倒れた。これは自動式に操作されているのである。両舷のポケットからは整備員が矢の様に飛び出しワイヤーをはずした。ピピピと笛と旗の合図でフックを巻き上げつつエンジンを入れ、バリケードより前方に出る。と共に、一瞬サッとバリケードとワイヤーが立つ。その間数秒にすぎない。

エンジンを停止し、座席内のあらゆる操作を終え、飛行甲板に飛び降りた。強い風をぐつと全身に受け、ひよろひよろとしながら、私はポケットに飛びこんだのであった。

一航戦、リング泊地に集結

搭乗員たちは母艦に乗り組むと、母に抱かれた赤児のように安心感を得て、過ぎし苦しかった猛訓練を思い出しながらも、ゆったりと落ち着いた気分になってくるものだった。

母艦に乗り組んだわれわれ搭乗員には、飛行機に乗って闘う以外には、これといった配置がなかった。艦橋下の飛行甲板に集まった搭乗員は、機敏に立ち働く乗組員の行動をただ見守っている。

泊地には戦艦長門をはじめ巡洋艦、駆逐艦など十数隻の艦艇が静かに停泊していた。かつての旗艦長門のマストには、今はもう司令長官旗がなく、かつて補助艦艇といわれた空母の護衛任務に当たっていた。そして空母大鳳のマスト高く、旗艦を示す司令長官旗がへんぼんとひるがえっていた。

泊地における第一夜をすごしたわれわれは翌朝、艦隊乗組員の力強いかけ声で目をさました。そして昨日までの基地における訓練によって汚れた愛機の掃除にとりかかった。いつでも命令一下出動できる態勢にしておくことを忘れてはいけない。

南国の太陽を直接、鉄のかたまりのような空母に受けるのであるから、格納庫の中は蒸し風呂のようにむれかえっていて、半ズボン一つとなった身体からは、滝のごとくに汗が流れていた。しかし、一たび飛行甲板に出れ

ば海面を渡って来る海風は、灼熱地獄も、うそのように忘れさせてくれた。

新たに連合艦隊司令長官に着任した豊田副武大将は、第一機動艦隊の集結を命じて来た。臨戦態勢となった各艦艇は、あらゆる可燃物の揚陸をはじめた。食事をとる食卓はもちろん、各自の持ち物でも必要最低の物を残して、残余の一切の可燃物は艦内から取り除かれた」

4-2 いざ、マリアナ沖へ出撃

リング泊地出航

5月12日、早朝から各艦は出港準備に忙殺されていた。投錨されていた錨は巻き上げられ、旗艦の指令を待っていた。午前八時、旗艦大鳳のマストに“全艦出航用意”の旗りゅう信号が上げられた。摩下各艦艇のマストにも旗りゅう信号が上げられ、信号兵の吹奏する出港用意のラッパの音が、リュウリョウと鳴りひびいた。

全艦の出港用意完了を見た旗艦は、引き続き出港を令し、旗艦大鳳の飛行甲板に円陣となった楽隊の奏でるマーチは、リング泊地にこだました。艦長の力強い「出港」の声が艦橋から聞こえる。駆逐艦が前路哨戒のため、身軽く前方に出て行く。

「前進微速」

航海長の重々しい声とともに、翔鶴の巨軀は静かに動き出した。前甲板からは「しずかに動きます」と航海科員が知らせて来る。

「前進半速」

「取舵」（艦首を左へ回すこと）

命令を復唱する伝令員の声もはずんでいた。全艦艇が軍艦マーチとともに行動を一つにする感激は、よくぞ男と生まれけり——と私の血肉をわきたたせた。

駆逐艦を前衛に、空には巡洋艦を発進した水上機の対潜警戒機を配置し、旗艦大鳳、翔鶴、瑞鶴、戦艦長門、巡洋艦、駆逐艦の順で堂々抜錨した第一航空戦隊は、タウイタウイ泊地に向け進撃を続ける。目的地タウイタウイ泊地とは、ボルネオとフィリピンのミンダナオ島の間にある 1 孤島であった。

リング泊地を出港したわが艦隊は、南シナ海を通って行ったが、途中は決して安穩ではなかった。リング泊地におけるわが艦隊の行動も、敵の知るところとなっていて、南シナ海には数隻の敵潜水艦が警戒の目をひかせていた。

巡洋艦は、交互に次々と対潜哨戒機を射出、空から敵潜水艦の発見につとめ、駆逐艦は前に後ろに空母、戦艦を守るため、必死の活動を続けていた。全艦艇の見張当直員は、双眼鏡をもって目を皿のようにして見張りを続けている。われわれ搭乗員たちも飛行甲板に出て、四方を肉眼で見張りしていた。

艦隊は敵潜水艦の攻撃を予防する意味から、ボルネオ北海岸伝いに東進し、右側からの攻撃をさける作戦に出た。夜間は完全な灯火管制で増速し、敵潜水艦からの離脱を計ったりした。

見えない敵潜水艦の威力に、このようにわが艦隊は脅威を受けていたのであったが、艦内にいる搭乗員たちは狙板の上の鯉で、艦長まかせであったから呑気なものだった。居室にいても臨戦態勢のため、必要以外の所は密閉されているので、蒸し風呂のように暑苦しい。従って搭乗員は好んで飛行甲板に出ていた。艦橋前は風通しもよく、煙草盆を出しては、いつも大勢の搭乗員たちが、航行する僚艦を見ながら休んでいた。

タウイタウイ泊地に入港

5 月 15 日、一航艦はタウイタウイ泊地に入港した。入港用意のラッパのひびきの中に、初めて見るタウイタウイ島は渺々たる小孤島であったが、泊地は珊瑚礁にかこまれた自然の港であり、波は静かにゆれ動いていた。湾口近くで駆逐艦が停泊のための投錨を開始する。続けて巡洋艦が投錨、一番奥に空母、戦艦が投錨する。平時においては駆逐艦が港の近くに投錨し、

空母、戦艦などは沖合遠く投錨するのが普通だが、今の状態はちょうどその反対の現象だった。それは、敵潜水艦の攻撃を防御するための布陣だった。夕日を背景にして入港が終わった艦隊の静かな風景は、われわれの気持ちを休めるなにかがあった。

そこで私たち塔乗員は骨休みをしたのであるが2、3日たった頃、夜間、私たちが寝ている間に、艦隊は出航していた。出航の時間は知らされていたが、用のない私たちは眠ってしまっていたのであった。

艦隊は、リング泊地を出で、タウイ・ダウイの泊地に向かったのであった。次の朝、起きてみると、すでに艦隊は外洋にあった。どの艦も艦首に燦然と菊花章を輝かせながら、堂々と航行していた。その偉容はすばらしく、見るからに心強さを感じた。

このような大艦隊であれば、いかなる敵艦隊も撃滅することはできない筈はないと思われたのであった。空母につづく空母、戦艦につづく戦艦、その中には、大和、武蔵の姿もあった。それはもう血湧き肉躍るという言葉の通りであり、力いっぱい万歳を叫びたい衝動を感じ、思わず拳を握りしめ「やるぞ！」と心に誓ったのであった。

タウイタウイ島は、ボルネオとミンダナオ島の間であり、珊瑚礁にかこまれている天然の泊地であった。ここに一大決戦に臨むべく大艦隊が満を持して集結したのであった。

停泊中、私たち塔乗員はなすこともなく、いささか退屈を感ずる日もあったので、

「戦闘塔乗員閑有り」

と題して一冊のガリ版の本をつくった。それには瑞鶴戦闘機塔乗員が全員何か書いたのであったが、それに私は「富士の麗峰仰ぎ見て」の歌を作ったのであった。

第一機動艦隊、70隻集結

5月16日、「二航戦、三航戦の艦隊が入港する。手あき総員出迎えの位置に整

列！」の艦内放送で、「それ入港するぞ——」とばかりに飛行甲板に飛び出した。湾口には白波を立てて堂々と入泊する艦艇の姿が見える。

先頭の菊の御紋章もあざやかに、堂々たる勇姿の戦艦 2 隻（大和、武蔵）が入港して来る。空母 6 隻が続いて入港する。

このときの第一機動艦隊の兵力は、

- 一航戦 空母（大風、翔鶴、瑞鶴）
- 二航戦 空母（隼鷹、飛鷹、龍鳳）
- 三航戦 空母（千歳、千代田、瑞鳳）
- 一戦隊 戦艦（大和、武蔵、長門）
- 三戦隊 巡洋艦（金剛、榛名）
- 五戦隊 巡洋艦（妙高、羽黒）
- 七戦隊 巡洋艦（熊野、鈴谷、利根、筑摩）
- その他、軽巡、駆逐艦、補給艦艇

入港した僚艦は、それぞれの所定の投錨位置に向かって静かに進む。駆逐艦は湾口付近に、その次に巡洋艦と、順序は同じだった。旗艦大鳳のマストには中将旗がはためき、艦橋には司令長官小沢治三郎中将が摩下艦艇の入港を見守っている。

入港した艦艇は旗艦に対し、礼式令による礼をつくし、衛兵隊のラッパの音は次々と、広いタウイタウイ泊地にこだまして鳴り渡った。

ついに日本海軍の現有勢力の大半は、南海の 1 孤島タウイタウイ島に集結を終わったのである。

その数は 70 隻を超える大集団の名は第一機動艦隊と名付けられた。司令長官小沢治三郎中将は、開戦劈頭のハワイ急襲を手初めに、日本海軍の全艦艇を縦横に駆使した、日本の生んだアドミラル山本五十六元帥のふところ刀と呼ばれた知将であるとともに、シンガポール攻撃作戦、コタバル上陸作戦、マレー沖海戦、ベンガル湾機動作戦などに勇名をはせた猛将であった。

旗艦大鳳の勇姿は堂々たるものがあり、また大和、武蔵の勇姿も大鳳に負けぬ堂々たるものがあった。この艦隊、この勇姿には敵艦艇も相当の脅威を感じずるものがあると思われた。わが機動部隊は、嵐の前の静けさのごとく満を持して、来るべき戦いを待った。

停泊している艦船の乗組員たちには休日というものがない。ふたたび、決戦に備えての訓練がはじまった。

戦艦群の巨砲をはじめ、各艦艇の主砲は図体の大きい割に終日縦横に機敏な動きを見せている。またわが翔鶴においても、乗組員たちは必死の訓練に入っていた。舷側の針ねずみのような25ミリ機銃が、指揮所の指令で一斉に右、左に旋回し、また各砲台指揮官の指令により、砲台ごとの訓練が続けられている。

飛行機整備員たちも戦いの主要戦力たるべき飛行機整備に余念がなく、彼らの手によって飛行機が甲板上に引き出されて、試運転が行われていた。また一航戦の空母間に出撃競技が行われることもあった。

すなわち一航戦の指揮官を兼務されていた小沢長官の「訓練第一攻撃隊用意」の指令一下、整備員は格納庫に格納されている飛行機を所定の数だけ出す訓練をするのだった。

指令と同時に格納庫に入った整備員は、古い下士官の号令で飛行機を出すのだが、限られたスペースの格納庫にできるだけ多くの飛行機を格納する必要上、組み合わせるようにして入れてある飛行機を出す時には、翼端と壁との隙間が一寸くらいしかないのである。

下士官の号令が間違ったり、飛行機についている整備員が号令を間違えて、「右前へ」をちょっと「左前へ」としたら、とたんに翼端をぶっつけて壊してしまい、作戦に使用することができなくなってしまう。したがって、号令をかける下士官は古い者が選ばれていた。

大体において班長級以上であったが、「配置につけ」「右前へ」「右止め」「左

あと」「両方あと」「左止め右一杯あと」「両方あと」「石止め」 次々の号令に、若い整備員は必死に飛行機を押し、また引いて号令にしたがっているが、気をゆるめたりするとすぐトチる。

飛行機が号令官の意志の通り動かぬ。すると重要な所や危険な個所の監視役をかねている副班長級の下士官が飛んで来て、「びし」と気合を入れる音がする。その下士官は一言も口をきかない。

号令官のじゃまになるからだ。また気合を入れるといっても単なる制裁ではない。1人の間違いや不注意は1機の飛行機を壊し、ひいては戦力を失うことになるからだ。

3つのリフト（昇降機）で格納庫から出された飛行機は、後方から艦攻、艦爆、艦戦と重量の重い順に並べられると、整備指揮官の「整備完了」の合図でしよう頭高く整備旗がひるがえるのであるが、これが在泊艦艇の目の前で行われるので、艦長以下の士官は、自艦の名誉に関することでもあり、相当な張り切りようであった。

このように訓練は激しかったが、その反面、訓練が終わるとゆったりとした面もあった。

空母艦内の生活

空母は任務の性質上、相当なスペースを格納庫にとられていた。空母翔鶴の場合、内部は格納庫が2段になっていて、80機以上の第一線機が格納されている。もちろん戦闘第一主義なので、乗組員の居住というものは極度に狭められており、格納庫の下に居住区が作られていて、大部分の乗組員がそこで起居していた。写真は空母・瑞鶴（翔鶴も同型）



また格納庫は両側に空間を作り、敵の攻撃から守られるように設計されていて、居住区やその他に使用されていた。

居住区は小さく区切られて、戦闘になるとハッチががっしりと締められて、被弾してもその一部分にしか浸水しないようになっている。「配置につけ」の号令から2、3分で各ハッチが閉められてしまうのだから、居住区でまごまごしていたら、飛行甲板に出られなくなってしまうので、どんな横着者でも駆け足で飛び出して行く。

また艦内には外気の新鮮な空気を取り入れるファンがあったが、艦内の暑さは大変なもので、居住区に入ったとたんに汗が吹き出して、数分も経つと滝のように流れて来る。

だから、われわれは寝る時と食事の時以外は、飛行甲板で時を過ごすような有り様であった。

この南海の泊地では、上陸したくても上陸する陸地がないので、しぜんと艦内をぶらつくようになり、艦内のいろいろなところを見ることができた。

翔鶴が就役した時から乗り組んでいる者の話では、歩いて艦内見学をやったら、たっぷり2時間はかかるというが、私たち搭乗員は暇を見てはよく艦内

散歩をやった。

内地を遠く離れた南海の一孤島では、食料品や水の補給が大変であった。ちょっと計算しても5~6万人の人間がいるのだから、消費する量も相当な数字である。米などの主要食料は内地出港の時に多量に積み込んであるから心配なかったが、副食品が不足していた。朝、昼、晩の3食とも醤油汁の中に麩(ふ)が一つ浮かんでいるというような副食が、毎日続けられる。

初めのうちは、酒保から缶詰などを買って副食の補いをつけていたが、艦長以下2千名以上の乗組員が艦内生活をしているので、誰しも同じような考えとみえ、一週間と酒保物品が続くわけではなく、たちまちにして缶詰もなくなり、3食とも、また麩の浮いている澄まし汁だけになってしまった。

また、水も補給がきかないので、節約せざるをえなかった。暑い時には毎日風呂に入って汗を流したいのは人情の常だが、艦内では毎日というわけにはいかない。週に2回入れれば上々であった。

風呂といってもお湯の中に肩までつかって鼻歌でもうたってられるような風呂ではなく、各自に3枚の湯券が配給され、それを持って風呂場に行くのである。風呂場には、風呂番の兵隊がいて券1枚と交換に洗面器1杯の湯をくれる、3枚の券を持っていることは3杯の湯を貰えることを意味するわけだが、その3杯の湯で、頭から足の先まで石けんをつけて洗うのだから大変だ。

初めて乗艦した連中は、身体の石けんを落とせないうちに湯がなくなってしまふ。さあ、そうなると大変、タオルで身体の石けんを拭くだけで終わりになってしまうから、身体から石けんの臭いをぷんぷんさせながら、次の風呂まで我慢しなければならない。

しかし、そのような苦労も初めの2、3回だけで、そのうちなかなか要領よくなって、身体を洗って、なおハンカチの一枚も洗ってこられるようになる。といっても湯水で身体を十分に流してさっぱりしたいのは人情の常、そこで南方特有のスコールを利用することになり、われわれもこれには大変ご厄介

になった。スコールが来そうになるとスピーカーで知らされる。非番直員は総員裸になり、石けんとタオルを持って飛行甲板に飛び出して行く。

われわれの艦ばかりでなく、どの艦も同じように水に苦勞しているのも、スコールが来ると各艦でも上甲板に、飛行甲板にと飛び出してスコールを待っている。しかしスコールは降り出したらすごい大雨になるが、通過する時間がまちまちで、制約される。

また隣の艦に降っても、われわれの艦には来ないこともあるので、停泊中はスコールが完全に来る見通しがつくまでは、石けんをつけるわけにはいかないから、みな慎重に準備をして待つ。そしてスコールが来ると、いっせいに石けんをつけて身体を洗う。いや洗うというよりも石けんを身体になすりつけるといった方が適當だが、石けんで洗ったあとを、激しいスコールに身体をまかして、さっぱり洗い流した時のすがすがしさは、何よりも気持ちのよいものであった。

人間は清潔な環境を好むもので、そのためには、いろいろと工夫するものである。週に2回の汗ふきといった方が適當なほどの入浴をやっているが、毎日毎日汗を滝のように流しているのも、どうしても身体が汗くさくなって来る。そこで考えられたことは、食器洗いの湯を利用することだった。

艦内生活のように大勢の人がせまい所で生活する時は、どことなく非衛生的になって来る。それをふせぐ意味においても食器洗いの湯は割合に豊富であった。

洗われた食器は衛生的に熱湯処理される。われわれは主計科に内緒で、バケツに1杯この湯をくんで来て半分を食器洗いに使用し、残りを皆で汗ふきに使用することで、辛うじてスコールのない時の入浴代わりとしていた。

衛生の面には、このように十分に注意されてはいたが、水の使用を極度に制限されているため、やはり病気が発生してしまった。1名の赤痢患者を出したのである。が、軍医の適切な処置で、その1名だけで、ほかには赤痢患者を

出さないですんだ。軍医の処置が適切でなく、もし誤っていたならば、せま
い居住区に多数の乗組員が起居を共にしているので、重大な結果を招いただ
ろうことは十分予想されることだった。

脅威の敵潜水艦

敵機動部隊は必死になってわが機動部隊の行方を探していた。シンガポール
を発進した大型空母 3 隻を有するわれわれの一航戦、内地を発進した空母 6
隻を有する二航戦、三航戦と、ここタウイタウイ泊地に集結したわが機動部
隊は、追尾してきた敵潜水艦によって監視されていた。

これに対しわが駆逐艦は、この敵潜水艦を発見攻撃すべく湾外に出動し、湾
口の警備に当たっていた。

昔から戦艦は巡洋艦よりも、巡洋艦は駆逐艦よりも、また駆逐艦は潜水艦よ
りも、それぞれの特色からいって強いものであり、またそれを撃滅すること
ができるものとされていた。しかし、科学の力はこの原則にしたがわず、湾
口警備をする駆逐艦が 1 隻、2 隻と敵潜水艦にほうむられていった。

即ち敵潜水艦は昼は海中にその姿を隠して潜望鏡を用い、夜間は浮上して電
探でわが駆逐艦の行動を探知し、行動、速力を測定して魚雷を発射して来る
のだった。

これに対抗するわが駆逐艦にも探知機は搭載されていたが、未だ幼稚なも
のであって、十分に活用することができなかった。そして、もっぱら見張員の
肉眼による対潜警戒に頼らざるを得ない有り様であった。

水中にいる敵潜水艦は、こんな日本の駆逐艦など問題にせず、かえってそれ
を撃沈するのは朝飯前の簡単なものようであった。これでは大海戦を目前
にひかえて駆逐艦が 1 隻、2 隻とその数を減ずるので、わが機動部隊としても
相当な痛手である。もちろん艦載機も明かりは一切禁ずる。状況は、判明次
第知らせる」と報じて来た。わが湾口を警備する駆逐艦の無能力さに、なめ
きった敵潜水艦は湾内にしのびいって大艦を攻撃するつもりなのか？ 私た

ちは飛行甲板で歯ざしりしながら待機するより仕方がなかった。情報は次々と知らされた。

「湾口付近にス交互に対潜警戒に飛び立って行くが、その効果は少なく、敵潜水艦を発見もできずに引き揚げて来る始末であった。ある真夜中、

「総員起こし」

「砲員配置に付け」

「手あき総員、飛行甲板に上がれ」

の号令が次々と、艦内にけたたましく鳴り渡った。機敏なことを自慢し、また訓練を受けていた砲員たちは、またたくまに配置につき、戦闘準備完了の報告を艦橋に報じている。一方、飛行科員、非番乗組員たちは飛行甲板に集合を終えた。深夜の集合に、何事ならんと総員の顔に緊張の色が見える。

総員が集合するや、艦橋指揮所から、「敵潜水艦が湾内に進入した形跡があるので、総員しずかに飛行甲板に待機せよ。クリュー音を探知す」

「各艦エンジンを止めて、探知機に協力せよ」

エンジンはもちろんのこと発電機まで止められ、艦内灯は蓄電池に切り換えられた。続けて情報は、

「スクリュー音、湾内方向に進む」

「スクリュー音、聞こえなくなる」

私語も禁ぜられた私たちは、緊張と不安の中に黙々と立ちすくんでいた。時間はどんどん経過する。在泊艦船の水中探知機は、懸命にスクリュー音を探っているが、依然として敵音は聞こえず、広いタウイタウイ湾には、いつのまにか緊張の夜が明けていった。

明るくなった湾内上空では、下駄ばき機（艦載水上機）が高く低く怪音の正体を見つけんものと飛び交い、海上には艦艇が緊張して警戒していたが、ようとして怪音の行方は知れず、また攻撃もなかった。

敵潜水艦におびえた富士川の水鳥の二の舞いか？ 有効な探知機をもたぬわ

が機動部隊の、タウイタウイ泊地における偽らざる姿の1コマであった。

湾口を取りまく敵潜水艦は、約5隻と推定されていたが、いかにしてこれを取り除くかは頭痛の種であった。しかしまた、決戦を前にして大切な駆逐艦を失うのも痛手である。

といって駆逐艦までも湾内深く隠し、湾口の警備をおろそかにするわけにはいかない。そこで戦艦の艦載水雷艇で湾口警備をさせることになり、湾口警備はまず一安心となったが、今度は敵潜水艦とあいまって、B-24が空中からわが機動部隊の動静をうかがうようになった。

各空母には多数の戦闘機を有していたが、空母が一定の速力で走り、ある程度の風を起こさせて、甲板上の飛行機の翼に揚力を持たせぬ限り、軽いといわれる戦闘機としても、攻撃のために発艦もできない。まして停泊中の母艦から発艦することは不可能だ。しかしせまい湾内では、発艦に必要な速力を出すことはできない。

また湾外に出れば、敵潜水艦が待ちかまえているので、これも危険この上ない。また1機や2機のB-24のために、空母を湾外に出すとなると、護衛艦艇も付けて出さなければならないから、経済面からいっても利巧な方法ではない。

そこで広い海原を飛行場とする水上機隊の活躍ということになり、停泊地における水上機隊の任務は重大かつ忙しくなって来た。しかし幸いにも敵B24は、わが機動部隊がタウイタウイ泊地に停泊しているか否かを確認するだけで、攻撃はしてこなかった。

搭乗員集合

戦雲は次第に南洋諸島の上を覆うかのように、続々と敵情が入電されてくる。そのようなある日、旗艦大鳳に搭乗員集合を命ぜられた。空母搭乗員ばかりでなく、水上機搭乗員まで上飛曹以上の搭乗員が招集された。各艦艇からぞくぞくと搭乗員が内火艇で大鳳へ集合してきた。各艦艇の飛行長以下、士官、

准士官、下士官などその数はゆうに 300 名を超えていた。

やがて定刻となり、第一機動艦隊司令長官小沢治三郎中将が、防暑服姿でわれわれの前に現れた。長官は、型のごとく戦局の大局的推移について、いかに今度の決戦が重大であるかについて諄々と話されたが、現在の戦局についての構想ならびに敵状については、確たることは何もいわなかった。

三々五々と帰艦する搭乗員たちにとって、それほどの意味ももたない集合だったが、それでも、昔の仲間との久しぶりの会合にお互いに元気づけられるところがあったようだ。

わが機動部隊の作戦計画とは別に、戦局はどんどん進行していた。その一つが、敵一部隊がニューギニア西北方にあるビアク島に突然上陸を開始した。そして橋頭堡を確保し、なおも陸軍部隊を揚陸した。これに対し連合艦隊司令部は、この敵の目標はビアク島ではなく、一種の陽動作戦と見たらしい。しかし、もしもビアク島が敵の手に落ちれば、ボルネオのタラカン油田地帯は敵 B24 の空襲圏内に入り、南方の重要資源を失うことになる。これは傍観するわけにはいかない。

しかし敵の1部隊の行動であって、いまだ敵主力は南洋諸島方面にある現在、第一機動部隊の全力をあげてこれに向けるわけにはいかない。

司令部は結局、大艦の巨砲をもってこれらの部隊を撃滅すべく、第一戦隊ならびに水雷戦隊に出撃を命じた。

第一戦隊の大和、武蔵は、わが連合艦隊の雄であった。その砲口ひとたび火を噴けば、いかなる敵艦艇をも一瞬にして、海底の藻くずに葬らずにはおかぬような巨砲を搭載していた。

6月11日、第一戦隊は水雷戦隊を前後に配し、堂々敵艦隊撃滅の壮途について。出撃を見送る在泊艦艇の甲板上には、作業服姿で帽子を振る乗組員の姿でいっぱいだ。軍楽隊の奏でる軍艦マーチ、見送る乗組員の打ち振る帽子、堂々と進撃するわが巨艦、タウイタウイ泊地は勇壮な気迫が波うっている。

壮途を祈る在泊艦船乗組員からは、口々に、

「頼むぞ、ビアク島の敵をやっつけてくれ」

「無事でまた会おうぜ」

「敵をやっつけて早く帰って来いよ。そして俺たちの護衛を頼むぜ」

とそれぞれ巨艦に対する信頼をあらわにして、敵艦隊を撃滅し、無事帰還を祈る言葉が次々と出撃部隊に投げかけられるのだった。そしてこの作戦は“揮作戦”と名付けられた。

艦長奪取の出撃祝い

出撃を直前に控えたころ、どの艦でも出撃祝いをした。白浜芳次郎氏が「最後の零戦」に「翔鶴」での出撃祝いについて書いている。

「揮作戦発動と同時に、在泊艦艇は決戦態勢を命ぜられた。リング泊地で大半が陸揚げされてはいたが、最後の可燃物の整理がはじめられ、各人の手回り品や毛布など一切のものは吃水線下の倉庫に入れられた。

乗組員一同、着たきり雀のようになり、これでわれわれの周りには固定された木製寝台、廊下に張られたリノリウム以外には可燃物はなく、鉄製品ばかりとなった。

出撃を祝う出撃祝いの開催が各艦艇に許可された。いくたびか戦場を駆けめぐる勇士でも、将来のことは予測を許されない。これが最後と思う者、士気を鼓舞する者、各人いろいろの感懐をこめて出撃祝いは開かれた。これは戦いの勝利を祈り、また無礼講であった。

わが戦闘機隊は初陣の者が多かったので、初めての出撃祝いをやる連中であるから、なかなか勇ましかった。先任搭乗員の音頭による天皇陛下万歳の三唱ではじめられた出撃祝いは、盛大そのものであったが、まもなく配給のビールも足りなくなって来た。

大抵の場合、グループのうち幾人かは酒の飲めぬ者があり、酒は余るものとされていたが、搭乗員には豪の者が多く、配給の2、3人前くらいは一人

で平気で飲んでしまうので、たちまちにしてなくなってしまった。

さあ、いかにしてビールを獲得するか？ 茶目気の多い搭乗員たちは作戦をねるのであった。

次席搭乗員（私）の役目は、前任搭乗員の任務を補佐するにあつたが、こんな場合には、立役者とならなければならないという不文律もあつた。やむなく私は、前田上飛曹はじめ主だった搭乗員とビール獲得の作戦をねつた。酒保はすでに他分隊の攻撃でたぶん、酒もビールもあるまい。そうするとビールのある所は士官室以外にはない。わが作戦会議の結論は決まつた。当時、茶目では一番の私は、ただちに搭乗員 10 名ばかりと行動に入つた。

私の計略は、“将を射んと欲せば、まず馬を射よ” にあつた。即ちビールを獲得するには、まずビール出し入れの権限者をつかまえることにあつた。それは誰か。酒保物品係の士官か、否。では副長か、否。

私の目標は本艦最高の権限者艦長にあつたのだつた。では、どうして一下士官が艦長にお願いするか？ 否、お願いしたのは茶目の本領にもとる。

ではどうするのか。即ち艦長に搭乗員室に来ていただくのである。艦長に来てもらえれば、艦底にしまつてあるビールも泉のごとく搭乗員室に集まつてくる。しかし艦長が来るかどうか、これは疑問である。が、待てよ、我に成算あり。今日は出撃祝いの無礼講である……。

閉めきられた艦内は蒸し風呂のように暑い。私たちは半ズボン一つの半裸体で士官室に現れた。艦長以下の士官連も、出撃祝いの杯をかわしていた。そこへどかどかと半裸体の怪人物が現れた。士官連はびっくりした「艦長、出撃祝長はール一行が搭乗員室の手前まで来た時、「こら！ 搭乗員ども待て！」と大声を上げて駆けて来る者があつた。あまり声が大きかったので、思わず 2、3 人の搭乗員がふりかえつた。そこには顔を真っ赤にした飛行長が、怒つたような顔をして立っている。私たちの一番苦手の飛行長だ。

れわれの先輩パイロットであり、訓練の指導者である飛行長に、われわれの茶目を見つげられてしまったのである。しまった、万事休す ー。

今一步というところで、艦長を奪回されてしまうとは。しかも一番苦手の飛行長につかまるとは。今日の出撃祝いもこれまでか……。

私が観念のほぞを決めた時、「お前たちは艦長ばかり直掩して、飛行長たるわしをなぜ直掩せんのか。わしの実弾もいま従兵が持って来るぞ」と、飛行長はにやりとした。

飛行長はわれわれが士官室に現れた時、ちょうど用事で私室に居られたらしい。そこへ、艦長が搭乗員室につれて行かれたと、忠臣面をして従兵が知らせたらしいが、訓練と違って特別の出撃祝いであったので、飛行長も一緒に飲みたくて追いかけて来たのであった。せっかくの艦長の御入来をさまたげられるのかと思っていた搭乗員たちはほっとした。

そして茶目気をたっぷり發揮して、艦長、飛行長の二手にわかれ、かけ声勇ましく訓練員室にくり込んだ。

出撃祝いは今や最高潮に達した。艦長が戦闘機隊搭乗員室に来ていると聞いた艦攻隊、艦爆隊の搭乗員は、艦長の奪取にくり込んで来た。

艦長に、われわれの方にも来てくれと頼んでいる。そうはさせまいと妨害する艦戦隊。しかし、多数におされた艦長、飛行長は彼らの搭乗員室に出かけていった。

敏美も平野氏もこの祝いの中にいた。敏美の酒の飲みっぷりについて平野恵氏に尋ねてみたが覚えていないということだった。平野氏は酒豪だったようだ。生き残りの戦友会で

「お前には、良く酒を飲まされた！」と言われたことがあった。アルコール類は豊富に積み込んであったようだ。「田中」の印鑑で伝票一枚、こんどは逆さに押し「中田」にしてもう一枚伝票をつくって融通をつけたという。

決戦前夜の池田二飛曹

6月18日夕方、瑞鶴では酒見大尉から「いよいよ、敵機動部隊攻撃に明朝8時発進」の知らせと、進撃の注意事項、作戦及び戦闘についての訓辞があっ

た。

池田は、搭乗機を一度見ておくようにと1番機から言われ、小さなマンホールを潜り抜け、せまくるしい通路を走るようにして、前格納庫に降りていった。翼端を折りたたんで、所狭しと並べられた零戦の中から、自分の搭乗機を探すのは容易なことではなかった。整備員はすでに準備万端整へて、胴体、座席内等を綺麗に磨き上げている。

「池田兵曹、心配いらねえ、大丈夫だよ」

元気のよい整備員の声が格納庫いっばいに響いた。他機の胴体の下をくぐり抜け、わが愛機に飛び乗ってみた。お守りをちゃんとつけてくれてある。池田は整備員に感謝しながら、母が送ってくれた氏神様のお守りを守袋から取り出してつけた。

今日あるを期し、激しい訓練をともにして来た愛機の翼を撫でながら、弾煙飛び散る明日の決戦海面を心に描いてみた。

「愛機よ、明日こそ頼むぞ」

昔の騎馬武者の出陣に際して愛馬を愛でる感じであろうか。

最後の夕食が始まった。すごい！ 特別のご馳走であった。しかしそんなことを考えてしみりする者は一人もない。名物男の中矢一飛曹は、
「こんなご馳走がでるんなら、毎日戦闘がつづかないかな。せめて4、5日はつづいて貰いたいなあ、一週間もつづいたら一貫目は必ず肥えるんだがなあ」

みんな、また冗談が始まったと大笑いした。

食事がすんで、池田は4番機の田村飛長と静かな甲板に出た。涼しい風がさっと肌を流れる。遠く余韻を残すような機械の音と、大波を蹴って轟進する波しぶきの音。海面は夕闇に包まれて薄暗く、遠く水平線が星明かりで、ぼうと微かに認められた。前方に大鳳が黒く見え、その左右、4、500メートルぐらいに戦艦、巡洋艦等が静かに轟進している。ただ黒くかすかに見え、航跡だけが白く光り、それが次第に消えてゆく。艦隊は南下しているらしく、

南十字星が艦首の方向にあった。やがて時刻を見計らって反転、まっしぐらに敵機動部隊目がけて北上するであろう。

「南十字星も今夜限りか」

田村飛長がポッとそう言った。

「ん・・・」

池田は、そう答えたただけだったが、心の中は、いろいろな思いでいっぱいであった。

明日はやるんだ、戦って戦って戦い抜くんだ。そして立派に散るんだ。桜の如くに。故郷の母が泣くだろう。だが泣きながらもよくやったと褒めてくれるだろう。本当に南十字星も今夜限りとなるかもしれない。

田村飛長はまだ18歳の若桜だった。そしてキリリとしまった口元が凛々しく印象的であった。苦しい訓練をともにし、そしていよいよともに出陣することになったのだ。田村飛長の南十字を見つめる瞳は星の光を映しているのか、美しくキラッと光っていた。

時々カチャカチャと信号兵が発信する信号機の音のみがあわただしい嵐の前の雰囲気を伝えていた。

第5章 初陣、マリアナ沖海戦

昭和19(1944)年6月19日~20日、マリアナ沖で、アメリカの空母機動部隊と日本海軍の空母機動艦隊が激突した。敏美にとって初陣となったマリアナ沖海戦、果たしてその結果は……

5-1 サイパン島をめぐる攻防

日本本土爆撃基地として狙われたサイパン

アメリカは昭和18年(1943)12月、連合国の統合参謀会議において「日本打倒総合計画」を決定した。

「日本打倒を完遂するには、日本本土へ進攻する必要はない。むしろ日本を海と空から封鎖し、日本周辺に基地を設け、集中的な爆撃を加えることによって、日本打倒は成し遂げられるであろう」

この方針にのっとり、アメリカは長距離重爆撃機“B29”を開発した。航続距離がおよそ6000キロ、飛行高度は1万メートルもあり、対空砲火の届かないはるか上空から、4トンもの爆弾を投下することができた。

このB29を戦力として手にしたアメリカ軍が、その航続距離から日本本土爆撃の基地として注目したのがサイパン島だった。アメリカ軍は、6月15日を上陸日とするサイパン島の進攻作戦を決定した。

一方、この情報を入手していた日本側は、サイパン島を死守することを決定、ここに陸海軍4万3000人の兵力を投入した。マリアナ沖海戦は、このサイパン島をめぐる日米の攻防戦だった。

サイパン争奪戦

6月11日、マリアナ諸島に接近したアメリカ第58機動部隊は、空母から戦闘機、攻撃機を発艦させ、サイパン島とその周辺の島々へ攻撃をくわえた。さらに12日、13日、14日と攻撃を続け、日本軍の基地航空隊に壊滅的な打撃をあたえ、この地域の制空権を手に入れた。この結果、わが基地航空隊と母艦航空隊とが共同して米機動部隊に対抗するという当初の目標は完全に崩れてしまった。

翌15日早朝、アメリカ軍はついにサイパン島攻略を開始、第51合同進攻部隊が島の西部から上陸を始めた。沖合のアメリカ艦隊はこの上陸作戦を援護するために艦砲射撃をくわえ、アメリカの上陸部隊と日本の守備隊との間で、激しい水際の攻防が繰り広げられた。

5-2 日米母艦隊の対決

アメリカの第58機動部隊

マリアナ諸島攻略に向かうスプルーアンス大将率いる部隊のうち、高速空母部隊の第58機動部隊は、大型空母7、軽空母8、戦艦7、重巡3、軽巡7、駆逐艦60という編制になっていた。

この大型空母・軽空母計15隻に搭載された航空機総数は901機に上り、そのほぼ半数はF6Fヘルキャットで占められていた。

・戦闘機	F6F ヘルキャット	448機
・夜間戦闘機（レーダー装備）		
	F6F および F4U	27機
・爆撃機	SB2C ヘルダイバー	174機
・雷撃機	TBF アベンジャー	193機

この他、艦砲射撃を任務とするターナー中将の統合遠征部隊には、別に護衛空母8隻が随伴し、旧式ながらF4Fワイルドキャット110機とTBFアベンジ

ヤー80機を搭載していた。

この大部隊を率いるスプルーアンス大将の関心事は、艦艇とサイパン上陸部隊を、いかに日本軍の攻撃から守るかという点に集中していた。このため、各艦艇には、5インチ砲、40ミリ機関砲、20ミリ機銃の各種対空火器が濃密に装備されたのをはじめ、主要艦には、150哩（277キロ）四方をカバーできる新型の防空レーダーが備えられ、作戦海域周辺には24隻の潜水艦を配置していた。

この潜水艦隊が、日本空母部隊に打撃を与え、その接近を阻止するのに絶大な威力を発揮し、さらに防空レーダーが、日本機の接近をいちはやくとらえ、F6F戦闘機隊に完璧な迎撃態勢を組む時間を与えることになる。

対するわが第1機動艦隊

これに対し、パラオ付近海面を「第一決戦海面」として、米空母部隊を一気に撃滅しようとする日本側「あ」号作戦の中心部隊・小沢治三郎中将の第一機動艦隊は、大型空母や改造空母計9隻を中心に、戦艦『大和』『武蔵』など7、重巡11、軽巡3、駆逐撃32などから成り、各航空戦隊の航空部隊は、一航戦が601空、二航戦が652空、三航戦が653空で、その機数は計450機、うち零戦は225機であった。

連合艦隊が総力をあげて結集した母艦航空隊だったが、機数だけを見ても、米側の半数でしかなかった。しかも、450機というのは、定数であって、使用可能機数は、それをかなり下まわっていたのである。

「あ」号作戦発動

6月15日、豊田長官は「あ」号作戦を発動した。

「連合艦隊電令作第154号

1. 敵は15日朝有力部隊を以て、サイパン、テニアン方面に上陸作戦を開始せり。

2. 連合艦隊はマリアナ方面に来攻の敵機動部隊を撃滅、次で攻略部隊を殲滅せんとす。

ついで、

6月18日、敏美の所属する第一機動艦隊はフィリピンのタウイタウイ島を出発し、サイパン島の南西1000キロの海域まで進出していた。

5-3 マリアナの死闘

第1次攻撃隊発進

6月19日の日の出は5時22分だった。第一機動艦隊の各艦からは、すでに3時30分から、次々に索敵機が発進していた。

そして、6時30分、米機動部隊の空母艦隊発見の第一報が入った。「大鳳」艦橋の第一機動艦隊司令部では、刻々と入る報告を分析した結果、敵機動部隊主力はグアム島西方にあり、我が方との間合いは、前衛部隊とは300カイリ（約550キロ、直線ではぼ東京一岡山間の距離）、本隊から380カイリと判断した。

こちらからは攻撃可能であるのに対し、敵側からは攻撃圏外になっているという絶好に位置関係になっていた。所期の「アウト・レンジ戦法」に踏み切る瞬間がやってきたのである。

7時25分、まず前衛部隊の三航戦（千歳、千代田、瑞鳳）から、中本道次郎大尉を指揮官とする零戦14、戦爆（零戦に爆弾を抱かせて艦船攻撃に使用）43、その戦爆群を誘導する天山7の合計64機が発進した。だが、この攻撃隊は敵艦隊の前方130カイリ付近に待ちかまえていたF6Fヘルキャット約450機につかまった。指揮官を含む零戦8、戦爆32、天山2の計42機が未帰還となった。

米側資料によると、防御網を突破した1機が戦艦サウスダコタに爆弾1発を命中させ、他の1機は重巡ミネアポリスに至近弾をあたえたが、空母まで到達したものはなかったとのことである。F6Fの邀撃陣を辛うじて突破して、米空母部隊の輪型陣上空に達した機も、VT信管をつけた弾丸によって撃破されていった。

三航戦第1次攻撃隊の損失は大きく、既述の零戦8機に加えて、戦爆31機、天山2機の多きに達していた。

ついで7時45分、本隊の一航戦（大鳳、瑞鶴、翔鶴）から垂井明少佐を指揮官とする零戦48、彗星53、天山27の合計128機が攻撃に向かった。零戦48機の編制は次のようであった。

第1大隊（大鳳発艦）4小隊 16機 指揮官 大尉 川添利忠
第2大隊（瑞鶴発艦）4小隊 16機 指揮官 大尉 酒見郁郎
第3大隊（翔鶴発艦）4小隊 16機 指揮官 大尉 山形不美夫

防衛庁戦史室に「601空戦闘詳報」が保存されていた。「あ号」作戦に参加した母艦航空部隊のなかで唯一残されていたものだ。池田速雄二飛曹の名がある第2大隊の編成表は以下の通りであった。

大隊	中隊	小隊	機番号	操縦員	
第二大隊 (瑞鶴発艦)	第一中隊	1	1	大尉 酒見 郁郎	行方不明
			2	上飛曹 前田 秀秋	
			3	一飛曹 高山 澄	行方不明
			4	飛長 松本光太郎	行方不明
		2	1	少尉 福井 義男	
			2	上飛曹 神崎三根雄	行方不明
			3	一飛曹 坪田与志雄	
			4	飛長 倉崎 萬次	行方不明
	第二中隊	1	1	大尉 深川 清	行方不明
			2	一飛曹 中矢 長藏	
			3	二飛曹 白川 正助	行方不明
			4	二飛曹 三宅 実	行方不明
		2	1	飛曹長 山本 一郎	行方不明
			2	上飛曹 花村 雅之	行方不明
			3	二飛曹 池田 速雄	
			4	飛長 田村 雅男	行方不明

表中「行方不明」とあるのは、未帰還となったもののうち、僚機によって最後が確認されなかった場合の表記で、帰還機によって被撃墜が報告されたときは「自爆」と記載される。

池田二飛曹、瑞鶴を発艦

第一次攻撃隊に参加した池田二飛曹は、発艦の時の様子を次のように回想する。

「午前5時半、いっせいに飛び起きた。昨夜見た星はもう見えなくなっていた。今日の天気はあまり上乘ではないらしかった。私は下着を全部新しい

ものと着かえた。発着甲板にはすでに天山雷撃機、慧星艦爆戦闘機と運び出されていた。

0700、戦闘機隊員を始め、雷撃隊員、艦爆隊員一同集合し、攻撃隊指揮官より攻撃命令が発せられた。つづいて名ばかりの乾杯があり、塔乗員はそれぞれの方向に散っていった。私の区隊4名は揃って瑞鶴神社に参拝し今日の武運を祈った。瑞鶴神社は中甲板前部の士官室の近くにあった。

発着甲板には艦首の方より零戦、慧星艦爆機、天山雷爆機と並び、整備員は真剣な面持ちでエンジンの調子を見ていた。雷撃隊は必殺の魚雷を抱き、艦爆隊は必中の爆弾をこれまたしっかりと胴体に抱いている。この魚雷でもって、この爆弾をもって敵機動部隊の航空母艦を、マリアナの海底深く沈めなければならないのだ。

われわれ戦闘機隊の任務は重かった。敵機動部隊近くの上空で邀撃に出てくる敵戦闘機から、味方の攻撃隊を護衛し、一撃必殺の攻撃を完了させなければならないのだ。われわれ掩護戦闘機隊は敵戦闘機の攻撃を一身に引き受け、甘んじて攻撃機の身代りとならなければならない。元よりそれは覚悟の前であった。

整備員はあごひもをかけ、中に鉢巻きしめてキビキビと動いている。艦橋では信号兵が手旗信号で、各艦と忙しく連絡をとっていた。艦橋の下には敵機動部隊の位置、帰投進路母艦符号、風向、気温等、飛行に必要な事項が大きく書き出してあった。

その附近の艦橋やポケットには発艦する攻撃隊を見送らんとする乗組員の真剣な顔が見える。

「がんばれよ」

「頼むぞー」

と力強く励ましてくれている。戦艦、巡洋艦からも見送りの乗組員の姿が見える。

午前7時50、登場の合図とともに、私たちは日の丸の鉢巻をぐっと締め直した。そして、それぞれ手を振りながら愛磯に飛び乗った。整備員がエン

ジンの調子を見ていたが、搭乗と同時にプロペラの回転を絞り、座席内の計器板や風防を拭ったりして最後まで心をつくしてくれている。そして塔乗員の軽く一礼するのを合図に、手を挙げて翼から飛び降り、強風速の飛行甲板を匍うようにしてポケットに飛び込み、じつと調子を見ている。塔乗員は操縦装置、エンジン等綿密に調べている。

右舷側にいる私は、愛機の良いことを高々と手を挙げて1番機に合図した。つづいて整備員に対しても、感謝の意をこめてそれと知らせた。整備員はにっこり笑って手を振った。別の整備員がチョークを握って、吹きとばされそうな体を車輪に抱きつく甲板に伏せ、今やおそしと発艦を待っている。

午前8時、Z旗が高々と揚った。去る6月15日、「あ号」作戦発動と同時に、連合艦隊司令長官豊田大將は、

「皇国の興廃この一戦に在り、各員一層奮励努力せよ」

の有名な日本海海戦以来の歴史的訓辞を、全軍將兵に発した。そして、6月17日、いよいよわが機動部隊が敵機動部隊に対し決戦を挑むための進撃を開始したとき、小沢中將は、

「機動部隊は今より進撃、敵を求めて之を撃滅せんとす。天祐を確信し、各員奮励努力せよ」と訓示した。

祖国の興廃はかかってわれらの双肩にあり。日本男子と生れてこの重責を負う者誠に本懐これに過ぎるものあらんや。よし、一命を捨てるのはこのときだ。挺身必殺、敵艦隊を撃滅して民族の危胎を救い、一命を捨てて悠久の大義に生きるのだ。今や全艦隊の乗組員の期待がただわれら攻撃隊の上にかかっている。

すべての乗組員が司令以下われらの攻撃の成功を祈ってくれているのだ。

「よしやるぞ、見事やって見せるぞ」

操縦棒を握りしめ発艦を待つ全身に感激が溢れた。戦闘機隊長酒見大尉が「ブー」と勢いよくエンジンを入れ飛燕の如く発艦した。つづいてその列機が、遅れてなるものかと、次々に鮮やかに発艦してゆく。見送る整備員が、

手をちぎれんばかりに振りながら、1機1機見送っている。

いよいよ私たちの区隊だ。一番機がチラと列機を振り向いて「ブー」と全速で突進した。つづいて私の番だ。発艦合図の旗がサッと揚った。見送る整備員に一礼して勢いよくエンジンを入れた。打振る帽子がチラチラと目に映る。艦首近くでフワッと浮き上がった。すぐ後に2番機、つづいて4番機がサアッと脚を入れている。

通常、1番機と3番機が、2番機と4番機が編隊を組んで、1区隊となる。母艦上空高高度1000メートルで一航戦は大編隊を組むことになっていた。発艦後左に大きく旋回して、たちまちにして瑞鶴戦闘機16機は堂々と編隊を組んだ。

瑞鶴戦闘機隊が編成されて半年、われわれは、今日この日のために寒さに鍛え、暑さに耐えながら猛訓練を重ねて来たのだ。さすが艦隊の戦闘機隊である。一糸乱れずがっしりとくっついている。そして大鳳、翔鶴の編隊と合流すべく、大鳳の上空にさしかかったのであった。

編隊を組むため大鳳の上空600メートル付近を上昇中のことだった。突然、彗星1機が500Kg爆弾を抱えたまま池田機の前方を横切った。“何事だろう”と右下方を見下ろすと、敵潜水艦が発射した魚雷2本が大鳳の右舷中央に向かって突進している。“危ない！”と思った瞬間、池田機の前方を横切った彗星が、この魚雷目掛けて体当たりを敢行した。この壮烈かつ崇高な犠牲的搭乗員魂を目の当たりにして、池田はジーンと胸を打たれた。と、同時に先行きに不穏な予感がした。

体当たりした撃星搭乗員は、小松幸男上飛曹（甲7期操）と国次萬吉上飛曹（乙11期偵）であった。（後に、両上飛曹は二階級特進した）

第一次攻撃隊は、敵戦闘機と防御砲火の厚い壁にはばまれながら、敵空母をめざしたが、指揮官を含む零戦23、彗星41、天山23の計87機が還らなかった。瑞鶴戦闘機隊16機も、そのうちの11機が未帰還となった。帰還できたのは、池田機を含めわずか5機。

未帰還が多かったのは、敵に撃墜されただけでなく、攻撃距離が非常に長かったこと、実戦的な着艦訓練を受けていなくて母艦に戻る技量がなかつ

たからであった。

敵味方入り乱れての乱戦

この日、池田二飛曹は、戦闘中に単機となり 300 カイリを飛びつづけて生還した。以下は、その回想記である。

われわれ第 2 小隊の 1 区隊 1 番機深川清大尉と 2 区隊 1 番機山本一郎飛曹長は、ともに真珠湾攻撃に参戦した強者であった、わたしはその 3 番機として天山雷撃隊を護衛し進撃した。130 機近い第一次攻撃隊の大編隊は勇壮そのもので感動と緊張に身が震えた。

海上に目をやると、空母大鳳が轟進しており、その左後方 1000 メートルに翔鶴がつづいていた。それらの前後左右を戦艦、巡洋艦が護り、その外側に数十隻の駆逐艦があった。そして、各空母の後 300 メートルに 1 隻ずつの駆逐艦がついている。空母大鳳、翔鶴の飛行甲板でも、出撃体勢は整っているらしかった。上空を警戒機が勢いよく通過した。

遠く 4、5000 メートルぐらい離れたところには、二航戦が、隼鷹、飛鷹、竜鳳の 3 空母を中心に、戦艦、巡洋艦、駆逐艦が輪型陣を組んで進撃していた。

敵機動部隊に近づく頃から、徐々に高度を 4000 から 5000 メートルに上げ、酸素マスクをつけ、OPL 照準器のスイッチを入れ、戦闘体勢を整えた。

その時、前方雲間の上空 7000 メートルにキラキラと光るものを見つけた。山本飛曹長が機銃を発射、前方の川添隊長が大きく了解のバンクをした。全機いっせいに増槽（補助タンク）を落し、“来たぞ！”と山本飛曹長の合図に答える。敵機群は高度 6000～7000～8000 メートルと数段の邀撃体勢で、黒点が空一面に見える。敵戦闘機隊が急接近して来た。艦攻・艦爆隊は米機動部隊を発見したのであろう。高速で降下を開始する。



(写真は日本軍の攻撃を有利な体勢で待ち受ける米軍戦闘機隊)

しかし、われわれは、米機動部隊を発見し得ていない。空一帯に光る曳光弾は上下左右に乱れ飛ぶ。次から次へと急降下攻撃して来る敵戦闘機、これを追撃する零戦、後部座席から応戦する攻撃機、火を噴きながらなお敵の編隊を追う天山。敵味方入り乱れての修羅場のなか、私は F6F を追って、機銃も裂けんばかりに無我夢中で撃ちまくった。

4 番機田村雅雄兵曹も 2 番機花村雅之兵曹も火を噴いて編隊を離脱、山本飛曹長も F6F を撃墜した直後、火を噴きながら大きく旋回し海面に自爆した。血みどろになりながら弾雨を必死でくぐりぬけ突入したわが攻撃機は、敵の VT 弾の洗礼を受けてつぎつぎと散っていった。海面一帯には油紋が何処までも続いていた。

もはや編隊行動は不可能だ。グアムに帰投することにした。出発に際し、「事故その他によって母艦に帰投不能の場合は、グアム島に着陸しろ」と云われていた。何機かでグアムに向かう途中、前方を 1 区隊の中矢長蔵兵曹が単機で飛んでいた。福井義夫中尉（操 26 期）と坪田与士雄一飛曹にも出会った。「空母へ帰る」の合図に、進路を変えて帰路についた。途中で、ふたたび敵 F6F 数機の攻撃をうけた。空中戦は混戦となり、気がついてみたら単機となっていた。

海と空だけの洋上を 300 カイリ先の空母を目指さなければならない。もち

ろん母艦はもとの場所にはいない。仮に同じ場所にいたとしても広い洋上では笹舟のようなものだ。

そこで、操縦者は自分の飛行機の色と風向きとその強さ、自分の飛行時間、さらに母艦の色、方向などを計算した上で、操縦機の色と進路を厳重に保持しながら飛ぶことになる。艦攻は3人搭乗、艦爆は2人搭乗だが、戦闘機乗りは1人だから大変である。

途中ふたたび中矢機らしい機影が遙か前方に見えたが、たちまち雲間に隠れてしまった。雲と空とが果てしなく、どこまでも続く。わたしは単機淋しく飛んでいた。母艦を発見出来できなければ自爆しよう、そう思った途端、母の顔が臉に浮かんだ。妹や弟の顔も。

誘導電波のスイッチを入れてみた、クルシー（無線帰投方位測定器一空母から電波を発信してもらい、それを受信して方向を測定する機器）が作動し始め「一ミー」、三航戦空母「千代田」からの懸命の打電であった。「千代田」着艦を目標にした。

南海特有のスコールが広がってきた。翼がビシャビシャと激しい飛沫に濡れた。撃ちまくった20ミリの銃身と灼熱の太陽に焼かれた翼が、流れる飛沫で冷えて行くのが感じられた。スコールを突き抜け暫らく飛んでいると、水平線上に点々と黒点が見えた。前方の黒点が近づくとつれて、それは戦艦武蔵と大和であることがわかった。朝、進撃のとき、三航戦の上空を高度3000で通過中、敵と誤認され、あの46糎砲で撃たれたことを思い出した。空戦で燃料を使い過ぎたのか燃料計がゼロに近づいてきた。わが機の被弾も気になってきた。

近くに特設空母の千代田、千歳、瑞鳳が笹舟のように小さく見えた。千代田の上空で「燃料不足」の信号を送ったところ、「着艦準備よし、着艦せよ」の旗流信号が揚がった。無事に着艦して艦長に戦況を報告したあと、飛行甲板にいと、ポケットの銃座から飛び出してきた幼なじみの友が、肩をたたいて

「元気でいたか」、「よう無事で」

迎えてくれた友の声に熱い涙が込み上げた。しかし、このときの言葉を最

後に、彼は海の藻屑と消えたのか、復員しては来なかった。師範学校卒の 1 人息子だった」

一航戦にやや遅れて 9 時、二航戦（隼鷹、飛鷹、龍鳳）から石見丈三少佐を指揮官とする零戦 15、戦爆 25、天山 7 の合計 47 機が飛び立った。しかし、この隊は結局、敵を発見できずに帰還した。それでも零戦 1、戦爆 5、天山 1 が F6F に撃墜されている。

3 群 9 隻の空母から発進した第 1 次攻撃隊は、合計 241 機。連合艦隊の大部隊であったが、敵にかすり傷一つ負わせることができず、わが方は 137 機を失った。

続けて第 2 次攻撃隊も発進

第 1 次攻撃隊が戦闘に入った 10 時 15 分、第 2 次攻撃隊が発進した。1 番手は、二航戦の艦爆隊であった。「隼鷹」の九九式 1 コ中隊、「飛鷹」の 2 コ中隊合計 27 機の艦爆隊に、援護戦闘機 20 機と天山艦攻 3 機をつけた計 50 機で発艦した。

しかし、予定地点に到達しても敵を発見することができず、350 カイリ近く飛んだので、母艦に帰る燃料がない。グアム島に降りることにしたが、着陸寸前、上空にいた F6F30 機に背後から襲撃されて、零戦 14、艦爆 9、天山 3、計 26 機が撃墜された。

2 番手の一航戦からは、零戦 4、艦爆 10、天山 4 の合計 18 機が、10 時 20 分に発進したが、行動がばらばらとなって、天山隊は敵を発見できず、3 機のみ帰還。直掩の零戦隊は途中で引き返し、戦爆隊のみ目標地点に到達したが、戦果を上げられぬまま、8 機を失い、帰還できたのは 2 機のみだった。

この日、小沢機動艦隊は、敵に決定的な打撃を与えることができぬまま、その戦力の大半を喪失してしまったのである。

初陣の敏美は、上空直衛隊

前掲「601 空戦闘詳報」（6 月 19 日）に、この日初陣の敏美の名が、「第一、

二群上空直衛隊（艦戦）編成表」にあった。第1中隊第2小隊の4名は、バトバハ基地とともに訓練し、リング泊地出撃直前に、瑞鶴から翔鶴戦闘機隊へ移動した仲間であった。

第一、二群上空直衛隊（艦戦）編成表

(6月19日)

指揮官 大尉 増山保雄 (601)

中隊	小隊	機番号	操縦員	記 事
1	1	1	大 尉 増山保雄	
		2	上飛曹 橋口嘉郎	(比島にて戦死)
		3	一飛曹 菅沼陽一	(台湾にて戦死)
		4	二飛曹 藤井四万夫	(台湾にて戦死)
	2	1	飛曹長 佃 精一	
		2	上飛曹 藤島博之	(沖縄にて戦死)
		3	二飛曹 平野 恵	
		4	飛 長 志賀敏美	(比島にて戦死)
2	1	1	大 尉 福島敏雄	行方不明
		2	上飛曹 伊藤史雄	行方不明
		3	上飛曹 清水 運	行方不明
		4	一飛曹 林田忠雄	行方不明
		5	一飛曹 中野 孝	行方不明
		6	飛 長 谷 卓三	行方不明
	2	1	飛曹長 窪田晴吉	(比島にて戦死)
		2	上飛曹 後藤徳雄	(比島にて戦死)
		3	二飛曹 坂田武雄	行方不明
3	1	1	大 尉 大藤三男	(比島にて戦死)
		2	上飛曹 中村常石	(比島にて戦死)
		3	二飛曹 佐多忠久	行方不明
		4	一飛曹 山川市郎	

		1	上飛曹 早川 寿	(台湾にて戦死)
--	--	---	----------	----------

注 記事欄の（比島・台湾にて戦死）は筆者が記入
 作戦経過

上空直衛零戦 17

0845 発艦、2V1D H2000 2V2D H4-5000 ニテ哨戒中、1025 敵触接機発見。

コレヲ攻撃後 2V3D は敵触接機ト共ニスコールニ突入セリ。戦果不明

1V 敵ヲ見ズ任務終了

收容中 敵触接機 340° 方向、距離 3,000m ノ電信ヲ受ケ直チニ上昇

1045 敵触接機 PB2Y 12 高度 2,000 距離 3,000 迄接近スルモスコール中ニ

遁走セリ。1100 帰着

大鳳ヨリ瑞鶴ニ移動 天山 5、零戦 1、彗星 1

0930 大鳳被雷撃ノタメ瑞鶴ニ移動

上空直衛 零戦 1

1020 発進中 高度ニテ一群、二群上空ヲ哨戒

1110 瑞鶴ニ帰着ス

この日の上空直掩隊の任務は、2つの輪型陣をとって驀進する一航戦・二航戦の母艦群の上空哨戒であった。敏美ら4機は、戦闘隊形のまま高度3000から5000メートルの間を、目を皿のようにして見張った。敵の偵察機を発見すれば直ちに撃墜するよう命令を受けていた。

上記「作戦経過」に、第2中隊第1小隊が、10時25分に敵の偵察機を発見し、攻撃したが、共にスコールに突入した、とあり、編成表の搭乗員名の後ろに「行方不明」と記載されている。

南方のスコールは、日本の夕立に見るような生やさしいものではなく、それは巨大な瀑布の中に突入したようであり、視界はまったく失われた。

この日、第1中隊第2小隊4機の行動について、平野恵氏は次のように回想

する。

この日の直掩隊は、4機または8機編隊で行動することになっていた。わたしたち第1中隊第2小隊4機は、午前11時頃、『大鳳の艦爆隊援護』の命令を受けて、小隊長 佃精一飛曹長（甲飛2期）、2番機 藤島博之上飛曹（甲飛8期）、3番機 平野恵二飛曹（丙飛12期）、4番機 志賀敏美（丙飛15期）の順に『翔鶴』から発艦しました。

しかし、肝心の『大鳳』が、直前に米潜水艦アルバコアの魚雷を受けてエレベーターが故障して、援護するはずの艦爆隊が発艦できなくなったのです。しばらく上空で旋回しながら待機していた4機は、いったん翔鶴に戻るようになりました。

『次の出撃は12時！』との命令、『30分ほど時間があるから、弁当でも食おう！』と、艦橋下の搭乗員待機室で箸をとっていると、突然、グワーンという大音響とともにフワッと身体が浮くような強烈な衝撃があって停電しました。敵潜水艦の魚雷を受けたのでした。

外に飛び出してみると、さらに2本の魚雷がこちらに向かって来るのが見えました。前部のリフトの下あたりに命中して黒煙があがり大火災発生です。私たちの零戦も胴体が折れ、延焼の危険があったので海中に投げ込みました。

翔鶴沈没、敏美海に飛び込む

前日から密かに追尾してきた米潜水艦「カヴァラ」が、大胆にも日本機動部隊の本隊内に深く入り込み、「翔鶴」の右舷前方わずか1,100メートルから、立てつづけに6本の魚雷を発射したのだった。11時20分、敏美たち直衛隊の収容を終わった直後のことだった。6本のうち4本が翔鶴の全部から中部にかけて命中した。発電機室が破壊されて艦内の照明が消えた。前部と後部のリフトがぼっかり大口を開いて一番下まで落ち込んでいる。後部リフトの口からは、格納庫内の真っ黒な煙を激しい勢いで噴き上げている。浸水が進んだ。

急激な傾斜とともに飛行甲板は阿鼻叫喚の場と化した。

平野恵氏の回想は続く。

『翔鶴』は停艦、まず、航空機搭乗員に退艦命令が出され。

『搭乗員は大事な身体だ。巡洋艦まで泳ぐ自信のあるものは飛び込め』

といっても、海面から 15、6 メートルもある飛行甲板から飛び込むことはできない。

私たちは、海面に最も近い前部左舷のフロアまで下り、ライフジャケットの下は“ふんどし”1本で海中に飛び込んだ。5、600メートル先に、巡洋艦『矢矧』が止まっていた。

ライフジャケットのおかげで搭乗員は海に浮かんでいるが、海軍でも泳げない者がいた。何人もがもがきながら沈んでいった。

間もなく短艇がやってきて私たちを掬い上げ『矢矧』に運んでくれた。矢矧の甲板上から振り返ると、『翔鶴』が艦尾を上にもたげ、艦首から前のめりになって沈んでいった。あっという間の出来事だった。

逆立ちした甲板後部にいた何百人という乗組員は、ある者は甲板上をずるずると滑りながら燃え盛るリフトの中に、ある者は甲板にしがみついたまま海中へと消え去っていった。乗組員の3分の1くらいが亡くなったように思う。

海に飛び込んだ直後、平野二飛曹は泳げない人にすがり付かれた。自分も必死だったから、抵抗して振り払ったが、そのとき救ってやれなかったことが後年いつまでも悔やむことになった。

「あのときの光景が夢に現れるようです。ときどき夜中にうなされていましてから」と平野夫人が語った。

「矢矧」には、平野二飛曹が戦艦「金剛」に乗艦していた時の上官が居て、

「よう！ 生きていたのか」

と喜んでくれ、兵曹長の襟章のついた自分の服を貸してくれた。

敏美もまた翔鶴の断末魔を目の当たりにした。そして、晴れの初陣が、夢にまで見た「空戦」でなく、愛機を海中に捨てるという思いがけない不運に、大きなショックを受けていた。

このようにして、昭和14年6月1日、横須賀軍港に進水し、ハワイ真珠湾攻撃、ソロモン海戦にと赫々たる戦果を上げてきた主力空母「翔鶴」は、4本もの魚雷を受けては如何ともしがたく、被雷から2時間50分たった14時10分、前のめりとなって沈んでいった。

この日、翔鶴を護衛していたのは「矢矧」と駆逐艦「若月」、「初月」ともう1隻であったが、救助にあたったのは、前記の3艦であった。「矢矧」が約500名、「若月」、「初月」が合わせて70名、合計570名が救助されが、1272名が翔鶴とともにマリアナの沖に沈んだ。

続けて大鳳も沈没

第1次攻撃隊発進直後の8時10分、小松咲男兵曹長機が「大鳳」の右舷に向かって進む2本の雷跡を発見し、母艦「大鳳」を救うため魚雷に体当たりしたのだったが、もう1本の魚雷が、大鳳の前部右舷に吸い込まれるように命中した。魚雷を発射したのは米潜水艦「アルバコア」、6本のうちのたった1本が「大鳳」の命を奪うことになった。

「大鳳」は竣工後3カ月の最新鋭空母で、特に飛行甲板は爆弾防御のため250キロ爆弾に十分堪えられる不沈空母として信頼されていた。しかし、この爆弾防御甲板がその命を縮めることになる。被雷後も速力は17ノットから1ノット落ちただけで悠々と走っていたが、前部の飛行機用エレベーターが故障し、その付近のガソリタンクに破孔が生じた。そして、そこから漏れる揮発性ガスが次第に艦内に充満していた。

翔鶴が沈没して間もない14時32分、突然目のくらむような大爆発を起こした。ガソリンの臭気を抜くためすべての換気栓を解放したことが、ガソリン

と重油の揮発性ガスを艦内に充満させてしまい、それに排気用電動送風機の火花が引火したのである。

爆弾に堪えるための厚い飛行甲板が下からの爆発を抑えたために、爆発圧力をさらに強める結果となり、甲板を小山のように盛り上げながら2つに割れ、内部の人員を圧殺した。

直衛する駆逐艦「羽黒」「若月」は「大鳳」への接近を命じられたが、爆発が続くためにあまり近寄れなかった。小沢長官以下が「羽黒」に移乗してから20分後の16時28分、爆発時に艦内のあちこちに飛散した死体をそのままに、左に傾いた姿勢のままスーッと艦尾から沈んでいった。「大鳳」の乗員1,000名余りは退艦したが、660名が、艦と運命を共にした。

その夜、小沢長官は第一機動艦隊をいったん北上させて後退した。

5-4 機動艦隊、壊滅

池田二飛曹、瑞鶴に帰艦

前日、千代田に着艦した池田二飛曹は、応急修理と燃料の補給をうけ、午前中は千代田の零戦3機と艦隊上空の哨戒にあたったあと瑞鶴に戻るようになった。

池田は、9時発艦したが、千代田は小型空母なので艦首が低い。海面すれすれとなって冷や汗をかいた。

この日、一航戦、二航戦、三航戦は3つの大輪型陣をとって驀進していた。その大艦隊の上空を、たった零戦4機で護衛しているのである。重任がひしひしと胸に迫りまた感無量だった。大和、武蔵の巨艦が島のように見える。それに較べると、他の戦艦や巡洋艦は小船のようだ。一航戦の上空にきたとき、大鳳と翔鶴の姿のないのが淋しかった。

出陣する連合艦隊の全貌に感激したのは幾日前のことだったろう。それから

僅か数日で、戦いに敗れて避退する艦隊を見ようとは想像もしなかった。

上空哨戒を始めて 3 時間、瑞鶴の上空に来た。高度 200 メートル。フックを下ろして通過しながら「着艦」の信号を送った。「着艦よし」の信号とともに、大勢の乗組員が両舷のポケットや艦橋から手を振っていた。

1 番機が大きくバンクした。3 番機についていた池田は、1 機サッと離れて千代田の零戦と大きくバンクを交わした。別れの挨拶だ。無事、瑞鶴に戻れると思うとうれしかった。慣れた母艦だ。気を張りつめることなく着艦できた。

とんで来た整備員が方向舵に書いてある「601」を撫でながらじっと見つめていた。池田が降りると、中矢一飛曹が飛んで来た。同郷のよしみで兄弟のようにしていた 2 人だ。

「よう！ 帰ってたのか」

「うん、よく帰ったな」

2 人は固く手を振り合ったまま、互いに見交す目には涙が光っていた。中矢一飛曹は前日の攻撃で、池田と同じように単機で帰還していたのであった。

前日瑞鶴から発艦した第一次攻撃隊 16 名のうち無事帰艦できたのは、池田二飛曹、中矢一飛曹のほか、福井少尉、坪田一飛曹、前田上飛曹の 5 名だけと知った、雷撃隊、艦爆隊もそれぞれ 2、3 機ずつ帰艦していた。他の空母もまた、ほぼ同じくらいの帰艦者がいることがわかった。大鳳に配乗して出撃したわが戦闘機隊長川添大尉は遂に帰らなかった。

私は汗を拭き拭きジャケットを下げ、搭乗員室に降りていった。そこには前日沈没した翔鶴から救助され、瑞鶴に移乗してきていた搭乗員たちが大勢いた。池田は自分の持っている下着や未帰還となった戦友のそれを配った。1 日にして搭乗員室はさびしくなっていた。昨日いっしょに飛び立って行った戦友たちの遺品を眺めながらしばし私は茫然としていた。遺品はまだ親の死を知らない幼児のようにそのあるじの帰りを待っているかのようであった。われらの分隊長酒見大尉も遂に帰らなかった。

空母飛鷹沈没

この日、今度はアメリカ軍が追撃に出た。アメリカ第 58 機動部隊は、早朝から偵察機を発進させていたが、ようやく夕刻になって、西方に進んでいる日本艦隊を発見した。17 時、旗艦空母「レキシントン」が、戦闘機 85 機、急降下爆撃機 77 機、雷撃機 54 機の計 216 機を発進させた。

避退中の小沢機動部隊は、上空直掩中のものや緊急発進したものなど、零戦 23 機、戦爆（爆装した初期の零戦 21 型）19 機、天山 2 機が、各空母上空に散って敵機の迎撃にあたった。これら迎撃機はよく奮戦し、敵機 20 機をたたき墜としたが、自らの犠牲も大きかった。

前日の戦いで戦闘機とパイロットの多くを喪失していた日本軍は、これを迎え撃つ手立てを失っていたのである。日本の第一機動艦隊は、アメリカ軍のすさまじい攻撃にさらされた。

この日の戦闘を、瑞鶴の艦上にいた池田は「血戦マリアナ沖」で次のように回想している。

「夕方頃、敵航空部隊が来襲するらしいと聞いた私は、急いで大藤大尉に今日の邀撃戦に加えて貰うようお願いに行った。しかし、すでに残存機数機でもって邀撃戦の搭乗割ができていた。私の飛行機は使用不能の状態になっていることがわかった。それでも私は私をぜひ加えてくれるようお願いしてみたが駄目だった。

「戦闘は今日だけではないぞ」と大藤大尉に言われて、私も遂に引き下った。

夕方、敵の空襲に備え、数機の戦闘機が発艦した。きのう、われわれが敵機動部隊攻撃に向かったときは数百機という大群であったが、いま、敵の攻撃隊を迎え撃つ邀撃戦闘機は僅か数機のみ、これでは勝負にもならない。

飛行甲板には大小の機銃が数十挺並べてあった。飛行甲板の両舷には高角砲、連双機銃などが無数にあった。それらの要員が防毒面を背に、鉢巻姿で、それぞれ大空を睨んでいた。私は数名の塔乗員と共に、艦橋の一隅（中

段ごろ) に立って、空をぐるぐる見張っていた。3,000メートルぐらい離れたところに、二航戦の空母が見えていた。

右舷の遙か彼方は、武蔵、大和の巨艦が見えている。多くの戦艦、巡洋艦が勇ましく白波を蹴って慕進していた。やがて敵襲の予定の時刻だ。いよいよ全乗組員は殺気立った。嵐の前の静けさである。ただ聞こえるは機銃のひびきと、艦にはねかえされるしぶきの音のみだった。レーダーがぐるぐると動いている。

一 敵機発見一

高角砲と機銃の砲身がぐるぐると廻わった。

やがて私の肉眼にも、右舷後方上空、5、6,000メートルあたりにゴマ粒のように点々と敵攻撃機が見えはじめた。各艦からは主砲、高角砲がいっせいに火を吹いた。忽ち上空が炸烈弾の赤黒い煙のかたまりで埋れた。

瑞鶴では右舷の高角砲が第1弾の火蓋を切った。やがて大小の機銃の曳光弾が一面に空に飛びちった。敵艦上爆撃機がその弾幕の中を、次々に急降下して来た。

敵艦爆が突入して来る度に空母は急旋回して針路を変え、投下爆弾をそらした。その度に、至近弾が海中から白い飛沫を吹き上げた。敵機も燃えながら、また、バラバラになって海中に墜落していった。

機銃員が、機銃も裂けんばかりに撃ちまくっていたが、その銃身は真赤に焼けていた。

投下された至近弾の破片で、両舷の機銃員、高角砲員が次々に斃れていった。艦橋前部で撃っていた機銃員が、破片のため片腕をもぎ飛ばされ、鮮血に染まって、それでも機銃を抱くようにして撃っていた。

上空は機銃弾、高角砲の弾幕がはりめぐらされていた。一寸のすきもない弾幕を犯して敵艦爆は勇敢に急降下して来た。配置のない私たちは、急降下してくる敵艦爆を、近くで撃っている機銃員に次々に知らせ、敵機が爆弾を投下した瞬間にバタと伏せていた。

艦尾後上方から突入してきた艦爆が投下した爆弾が、艦橋に向って向かって落下するのを見た瞬間、空母が大きく傾斜して急旋回した。

『あッ、来た』

と思った瞬間、伏せると同時にグンと大きなショックを感じた。機銃、高角砲が一層猛烈にうなっていた。急いで起き上ってみると右舷、艦橋の後部に命中、鉄板が大きく破れ、附近の機銃員、高角砲要員数十名が硝煙の中に倒れ、鮮血にまみれていた。私の附近にも至近弾で数名倒れていた。

敵の攻撃は止んだ。その間 4、5 分ぐらいのものであったかも知れないが、数時間経過したような感じがした。乗組員たちの目は血走り、悲愴な顔付きであった。遙か後方に猛火に包まれ沈没寸前の艦があった。

左舷後方に二航艦の空母 1 隻（「飛鷹」）がむくむくと黒煙をまきあげ航行不能になっていた。近くを駆逐艦らしき数隻が救助に当たっていた。これでまた、空母 1 隻を失ったのだ。私たち翼なき搭乗員たちも、これを見て憤激の涙を抑えることができなかった。

『瑞鶴』は命中弾 1 発と、数十発の至近弾により、多数の戦死者を出し、各所から煙を吹いたが、乗組員の必死の防火により、一時は沈没も危ぶまれたが、遂に極めて小さな被害に止まったのであった。

敵機を撃退した艦隊は、なおも、フルスピードで北へと航進していった。

敏美と平野二飛曹も、救助された「矢矧」艦上で応戦の術もなく同じような光景を目撃していた。19 時 30 分、「飛鷹」は沈没した。乗組員の約 4 分の 1 にあたる士官・水兵計 247 名が海に消えた。

この 2 日間の戦闘で、第一機動艦隊に所属する大鳳、翔鶴、飛鷹の 3 空母を失い、瑞鶴をはじめとして隼鷹、龍鳳、千代田、榛名、摩耶らに相当な被害を受け、そのうえ補給艦玄洋丸、清洋丸の 2 船を失ったが、そのほとんどは、潜水艦によるものだった。

さらに、出撃時には 400 機以上だった飛行機は、わずか 61 機を残すだけとなり、ベテラン・パイロットも大半を失ってしまったというのが「あ号」作戦

のわが損害であった。一方の米機動部隊の被害は、空母「バンカーヒル」や「ワスプ」などが小破したに止まった。

戦死した飛行機の搭乗員と艦艇乗組員は、アメリカ軍が 111 人だったのに対して、日本軍の戦死者は、飛行機の搭乗員が 395 人、艦艇乗組員は 2056 人、計 2451 人に及んでいる。わずか 2 日間で日本海軍は母艦航空兵力のすべてを失った。

母港への帰投

6 月 21 日午後、機動艦隊の損害を知った小沢長官は、避退針路を北西にとり、沖縄回航を決意した。22 日午後 1 時、沖縄の南岸中城湾に入港した。直ちに、大鳳および 601 空の乗員は瑞鶴へ、翔鶴乗員は巡洋艦摩耶へ、飛鷹の乗員は隼鷹へ、それぞれ移乗した。

瑞鶴に移乗した平野二飛曹が目にしたのは、火災で煤けた格納庫の一面に毛布が敷き詰められ、沈没した大鳳や翔鶴から収容された負傷者と戦死者が何百と横たえられていた悲惨な様相だった。火傷の薬品と焼けただれた体臭でむせかえる中を、軍医と衛生兵とが忙しく立ち回っている。うめき声が格納庫内に、また、見るものの心の底に響く。まさに阿鼻叫喚の地獄絵だった。

翌 23 日、同泊地を出発して瀬戸内海の基地へ向かった。毎日のように息を引きとり戦死者の列に加わる負傷者が出た。沖縄に向かう海上で告别式が行われた。貝塚艦長以下総員が後部飛行甲板に整列して、儀仗隊のラッパ「国の鎮め」吹奏、弔銃発射で、1 体ずつ毛布にくるんで海中に葬った。高角砲の空薬莖をつけてあるので、遺体はゆっくり海底に沈んでゆく。

豊後水道も間近にせまる頃、護衛駆逐艦は前方に出て対潜哨戒を行い爆雷の威嚇投射をしている。旗艦「瑞鶴」に続く 70 隻あまりの艦艇は、単縦陣となって豊後水道に入って行く。左に九州の緑が間近に見え、右には白波くだける四国の海岸。

6 月末の母国の臭いは、若いわれわれの心を癒してくれた。激烈な戦闘、そう

して3空母の喪失、また親しかった戦友を失ったわれわれは、彼らも一緒に帰ることができたらと、今は亡き戦友の上に想いをはせるのだった。

24日、艦隊は豊後水道から瀬戸内海に入り、わが海軍の停泊地柱島に入港した。柱島では連合艦隊司令長官豊田海軍大将の座乗する軽巡大淀をはじめ、2、3の艦艇がわが艦隊を迎え入れてくれた。豊田司令長官に敬意をはらう入港艦隊のラッパの音は、柱島泊地に鳴り渡ったが、その音はむなしく消えて行った。

入港が終わった艦隊からは、内火艇が下ろされ、第一機動艦隊の司令長官、司令官などの将星は旗艦大淀に参集して行く。

この主脳部の動きとは別に、泊地は混雑していた。格納庫に収容されていた負傷者たちはつぎつぎと小舟に乗せられ、病院船に移されて行った。歩行できる者は看護人に手をひかれ、重傷者はタンカに乗せられ、せまいラッタルを渡って行く。見送る乗組員はこの傷ついた戦友にはげましの言葉を送っていた。

サイパン玉砕

わが機動艦隊の敗北は、すでにアメリカ軍が上陸していたサイパン島にも大きな悲劇をもたらすことになった。

上陸に成功していたアメリカ第五合同進攻部隊は、6月20日のマリアナ沖海戦の勝利の報せとともに、日本軍守備隊への攻撃を開始した。そして孤立した日本の陸海軍の守備隊4万人を、急速に島の北部へと追い詰めていったのである。

武器、弾薬、食糧を消耗した日本軍はジャングルや洞窟に立て籠もって、アメリカ軍に抵抗を試みながら、本土からの救援部隊の到来を待ち望んでいた。日本の守備隊には、大本営がサイパン島を放棄したという決定は知らされていなかったから、真珠湾攻撃で名声を馳せた南雲忠一中将の部隊もジャングルの洞窟に立てこもり、友軍が上陸した場合の後方撓乱について作戦を練っ

ていた。まさか、大本営がサイパン島を放棄したとは思ってもよらなかったのである。

このジャングルに隠れた日本軍に対して、アメリカ軍は徹底した掃討作戦を実行した。小さな洞窟や窪み、草むらも見逃さず、前方に動く影があれば容赦なく銃弾を浴びせた。

7月3日、サイパン島の町の中心ガラパンが完全にアメリカ軍に占領された。追い詰められた日本軍は「バンザイ突撃」や自決で、次々と玉砕していった。そして、アメリカ軍の上陸からわずか3週間で、サイパン島は陥落した。

サイパン島で戦死した日本兵は4万人。この中には南雲中将の部隊も含まれている。また日本人住民の死者も1万人にのぼった。

空母機動部隊が敗れば孤島の守備隊を救援する望みはゼロだ。8月2日テニアンが、つづいて8月11日グアム島が玉砕して、マリアナ3島から日本軍が消えた。

このサイパン島の喪失の責任をとって東条英機首相は辞任し、新たに小磯国昭朝鮮総督が首相に選ばれた。

サイパン島を占領したアメリカ軍は、すぐに飛行場の設営作業に入った。そして10月12日、アメリカ本土からB29の第1陣が到着した。アメリカはこのサイパン島をはじめとするマリアナ諸島に最終的に985機のB29を待機させ、ここを拠点に日本本土への爆撃体制を整えていったのである

5-5 「あ」号作戦の敗因

情報筒抜けの日本海軍

相当な自信を持って臨んだ「あ」号作戦だったが、連合艦隊は完敗した。その原因の一つが情報戦での完敗である。

この年の3月31日夜、連合艦隊司令部の古賀峯一司令長官以下8名がパラオ近海で遭難し、全員殉職した。そのとき、参謀長福留繁中将以下11名が乗った1号機が、セブ島沖に不時着水した。米軍指揮下のフィリピンゲリラによって福留を含む10名が捕らえられ、そのとき携行していた機密書類を紛失するという事件があった。その書類は古賀長官の策定した「Z作戦計画書」であって「あ号」作戦の母体をなす計画であった。

4月10日になって、ゲリラ討伐中であった陸軍の大西精一中佐とカッシング米軍中佐との交渉で福留以下は日本軍に引き渡されたが、「Z作戦計画書」は米軍の手に残った。福留は4月18日、東京に送られて海軍中央部の事情聴取をうけたが、機密書類は飛行艇とともに炎上して海中に没したので、米軍に渡るはずがないと言い張った。海軍当局は参謀長ともある高官が捕虜になったことを秘匿せねばならないので、うやむやのまま暗号更改の処置さえも講じなかった。

米海軍は「Z作戦計画書」を英文に翻訳して、要所要所にそのコピーを送った。このようにして、米第五艦隊は、わが方の手のうちを事前に知っていたのであった。

その上、アメリカ軍はフィリピンの抗日ゲリラを活用した。ゲリラ用のガイドブックを配り、日本の陸海空の軍事情報や作戦計画にとどまらず、地理、気象、経済、政治、国民の心理状況など多岐にわたる情報の提供を求めた。例えば敵の戦術の項目では、指揮官だけでなく兵にいたるまで、可能な限り、フルネーム、前任地、どんな訓練を受け、どんな戦闘経験があるのか、日本

のどこの出身なのか、までを徹底的に調べるよう指示していた。巻末には、日本軍の飛行機や船舶の見分け方が図解で載っていたという。

あるものは港の荷役夫として船舶情報を、あるものはホテルのボーイとして、日本軍人の出入りや会議の様子を報告した。司令部に忍び込み、日本軍の作戦計画書を秘かに盗んだもの、コールガールとして将校から情報を聞き出したものもいた。

ありとあらゆる入江や海岸には日本海軍の行動を監視する基地が設けられ、日本艦隊を発見した位置、陣容、航行方向と速度が、100 以上はあったという無線基地から、オーストラリア、ブリスベーンのマッカーサーの司令部に伝えられた。

その一例が、アメリカの国立公文書館に保存されていた。6月16日付けの沿岸監視員（コースト・ウォッチャー）の報告は、フィリピン西海岸サンベルナルディーノ海峡を通過する日本艦隊について、「……駆逐艦 11、巡洋艦 10、戦艦 3、空母 9。… 最後の艦艇が東経 124 度 9 分、北緯 12 度 34 分の地点を 8 時 30 分に通過」と書かれていたという。

レーダーに捉えられた連合艦隊

二つ目の敗因は、レーダーなど科学兵器の性能差だった。レーダーは、敵に向けて発信した電波の反射波をキャッチすることで敵の位置を把握する兵器である。アメリカはこの時すでに、高性能のレーダーを完成させほとんどの艦船に装備をしていた。

その一つが、昭和一九年四月に完成させた対水上艦艇用の SJ レーダー（超短波レーダー）で、全潜水艦に搭載されていた。アメリカはこの新兵器 SJ レーダーで、たとえ夜間や濃霧であっても、発見した艦艇までの距離や方位を正確に確認することができた。この情報を魚雷データ計算器に入れると、見えない目標に対しても正確な魚雷攻撃ができる。アメリカ潜水艦は、月明りもない大荒れの海で魚雷攻撃を行うなどといった、日本側には想像もできない

ことを実戦で行っていた。

連合艦隊がタウイタウイ迫地に1ヶ月近く閉じ込められたのも、大鳳、翔鶴、飛鷹の3空母を失ったのも、すべて、米潜水艦のSJレーダーによるものだった。

その二が、対空見張り用のレーダーである。敵攻撃機の水平方向をキャッチするSKレーダー・SCレーダー、敵攻撃機の高度をキャッチするSMレーダーなどが、旗艦「レキシントン」に搭載されていた。それぞれのレーダーから判明した敵の位置や動きが集中戦闘司令室に集められ、そこから迎撃のための作戦命令が即座に発せられるようになっていた。

6月19日、旗艦「レキシントン」には、およそ100人のレーダーオペレーターが待機し、24時間交替で監視を続け、日本軍の攻撃を待ち受けていた。この日、アメリカは防御だけに専念する戦法をとった。

9時30分、CIC(集中戦闘情報室)のレーダー画面は、200キロ前方、高度3500メートルで向かってくる攻撃隊の影をとらえた。しかも、攻撃隊は立て続けにやってくる。

この情報はすぐに「レキシントン」の戦闘司令官に伝えられ、司令官は迎撃のためにF6Fヘルキャット戦闘機450機を発進させた。

戦闘機同士の戦いでは、上空に位置した方が有利である。アメリカは攻撃隊の方向と高度をつかんでいたから、母艦群のかなり手前で、かつ、こちらが5000メートルで飛べば、向こうは6000メートルで待っているといった具合で、常に、攻撃隊の少し上空で何段にも構えていて、急降下でいっせいに攻撃をかけてきた。

不意打ちを食らった日本軍の攻撃隊は混乱状態におちいった。そしてさらに、その混乱に輪をかけた原因が、日本軍のパイロットの練度の低さであった。

VT 信管

VT 信管とは、弾頭につけられた敏感な電波の送受信装置によって、標的の飛行機が数十メートル以内に接近すると自動的に感知して、弾丸を爆発させる“近接電波信管”（プロクシミティ・ヒューズ）のことである。

従来の対空砲弾に使われていた信管は、いわば時限爆弾のように、「何秒後」と予め設定した時間によって作動するか、さもなければ直接の命中によって作動するなど、条件が固定されていた。従って、砲弾はほとんど敵機から離れたところで炸裂していた。

これに対し、VT 信管は、経過時間に関係なく、敵機の至近距離を通過するときに自動的に炸裂するのだから、その威力は絶大だった。

アメリカは、このマリアナ沖海戦に参加した全艦艇の砲弾に、この VT 信管を装備していた。日本側は、まだ VT 信管のことは知らなかった。

5 インチ砲弾以外の機銃についても米艦艇は格段に強化していた。20 ミリ機銃の発射速度は1分間に480発、40 ミリ機銃の発射速度は1分間に120発という凄さで、ともに零戦の速度などの性能に合わせたジャイロ付照準器を備えていた。

対する、日本海軍の艦艇の25 ミリ機銃は、7発射って銃弾を補強しなければならなかったから、日米艦艇の対空砲火は、大人と子供以上の差があった。

戦闘経験のないパイロット

マリアナ沖海戦に出動した日本の航空隊は、601 空、653 空、654 空の3航空隊であった。このうち、搭乗員の訓練が比較的順調にいていたのは、2月15日に編制された一航戦の601 空だけだった。その601 空でさえ、基幹となる古手上飛曹クラスが10人程度しかおらず、過半数は飛行予科棟習生を卒業して部隊配属になってから半年も経っていない未熟練者で占められていた。

4機編成の小隊長も階級は中尉クラスだったが、兵学校を出たばかりの若手で、

戦闘ははじめてというものが多かった。

二航戦の 652 空になると、昭和 18 年暮から 19 年 2 月にかけて、南東方面やトラックに対する支援作戦中に、多くの搭乗員と機材を失ったために、ようやく 3 月 10 日に未熟練者で補充して再編制されたものの、機材の補充が遅れていた。

また、三航戦の 653 空は、やはり南東方面やトラックで多数の隊員を失った瑞鶴飛行機隊の内地帰還組を基幹として、大半は飛行学生や操縦練習生を 1 月に卒業したばかりの搭乗員を投入して、2 月 15 日に編制された部隊であった。

もしパイロットに戦闘経験があれば、上空で待ち伏せしていた F6F 戦闘機の攻撃もかわせて、あれほどの被害を受けずに済んだといわれている。

さらに、戦闘機のパイロットに不利な条件がこの時重なっていた。このマリアナ沖海戦で、日本海軍ははじめて「戦闘爆撃隊」の戦法を試みた。それはゼロ戦に 250 キロ爆弾を積んで出撃し、敵艦隊にまず爆撃をくわえてから、そのあと戦闘機として敵機への攻撃に使用するという戦法である。その結果、アメリカ軍の攻撃から逃れようとしても、250 キロ爆弾の重さのために動きが自由にとれず、F6F 戦闘機の格好の餌食にされた。

アウト・レンジ戦法の無理

アウト・レンジとは、日本語にすると「遠距離先制攻撃」ということになる。敵の攻撃力の届かない遠距離から、こちらの足の長い飛行機を発進、出撃させる戦法であった。当時の日本海軍の艦上機は、米軍のものに比べて平均九十カイリ近くも航続距離が長かったからそれは可能だったが、この日の攻撃隊のパイロットたちは、アウト・レンジ戦法のために長時間の飛行を余儀なくされ、疲れ切った状態で敵の迎撃を受けた。

パイロットの飛行時間は 1 時間から 1 時間半が限界だとされていたが無視された。アウト・レンジを成功させるには、搭乗員の技倆が熟達していること

が必須の条件であるのに、練度の低い攻撃隊搭乗員に過重な負担を強いることになった。

第一機動艦隊のある航空参謀は、この時のことを次のように語ったという。

つまりこの時のアウト・レンジ戦法を考えた人たちは、飛行機の性能だけで作戦が成功すると思ったのです。まったくそれに乗る人間のことなどは、考えてはいませんでした。

しかし、こうしたベテランパイロットの消耗も、やはり日本海軍の底流にあった「防御軽視」の体質に、大きな原因があったといえる。

それは、日本海軍の航空機的设计思想にも歴然と現れていた。

「ゼロ戦」の防御軽視

日本海軍の主力戦闘機「零戦」、開戦当初は、イギリスやアメリカ軍などを相手に、華々しい戦果をあげていた。アメリカ海軍は零戦の性能を調べるために、零戦と戦った兵士から聞き取り調査をした。また、捕獲した零戦を修理して試験飛行を行い、あらゆる米海軍、陸軍機との性能比較、テストを行った。

彼らがまず驚いたのは、零戦の軽さだった。どうやったらあんなに軽い戦闘機が作れるのか、不思議に思ったくらいだ。

飛行機が軽いと言うことは、弾があたった時に壊れやすいことでもあった。事実、左右と天井は風防が一枚あるだけ。燃料タンクにも防弾装置がなく、むき出しのままだから、一度撃たれようものならパッパッと燃えて、すぐにバラバラになって落下していった。スピードと航続距離を優先させた結果だった。

このような分析調査から、零戦より高い性能をもつ戦闘機の開発が始まった。しかし、零戦の空戦性能を上回る性能を保持するためには、より高馬力のエンジンを装備しなければならない。高い出力のエンジンは大型になり、それ

を格納する機体も大型化してしまうのである。これが陸上機ならばそう問題はないのだが、艦載機の場合は深刻な問題となる。

限られたスペースしかない空母の艦内に、どれだけの戦闘機を搭載できるかは、艦隊全体の攻撃力に影響をあたえるからだ。そこで、考え出されたのが、戦闘機の翼を折りたたみ式にすることだった。これで、2機しか収納できなかったスペースに5機の収納が可能になった。

こうして開発されたのが新型戦闘機 F6F ヘルキャットであった。昭和 18 年 1 月、太平洋戦争にデビューし、マリアナ沖海戦の時には、アメリカ第五八機動部隊の主力として日本の攻撃隊や零戦を迎え撃った。太平洋戦争の期間中、アメリカは F6F ヘルキャットを 1 万 2274 機生産した。

アメリカ海軍の防御思想

アメリカ軍が日本軍と違ってパイロットの生命を守ろうとしたのは、人命を尊重することにくわえて、パイロットの喪失が大きな代償をとまなうことを冷静に判断していたからだ。当時、一人前のパイロットをひとり育成するためには、2年の歳月とおよそ 7 万 5,000 ドルの費用が必要といわれていた。現在の金額に換算すると約 2 億円になる。

さらに、戦争全体が「航空戦時代」に突入し、戦力としてパイロットを失うことは、それ自体が戦局の不利を招く要因となる恐れがあった。こうした合理的な判断から、アメリカ海軍は航空機のパイロットを最大限、敵の攻撃から守ろうと考えたのである。

まず、戦闘機や爆撃機に十分な防御・防弾の装備を施した。ついで、パイロットを守るためのさまざまな装備や訓練を実施していた。

例えば戦闘機や爆撃機には「救命キット」と呼ばれる袋が載せられていた。これには救命具、救命胴衣、薬品、保存食糧、魚釣りの道具、海面に色を付けて救助隊に居場所を知らせる特殊な染料などが一式揃えられていた。パイロットが、パラシュートで海上に脱出した場合に備えてのものである。これ

にくらべて日本は、パラシュートを付けるのが精一杯で、なかにはそのパラシュートでさえ装備されなかったこともあったという。

またアメリカ海軍は海戦が行なわれる場合、必ずその区域の海面に潜水艦を待機させ、攻撃を受けて脱出をはかったパイロットの救助にあたらせた。そのための訓練も通常から行なわれていた。パイロットの救助は作戦の一部でもあった。こうした配慮は、パイロットの育成時にパイロットたちに伝えられ、彼らが安心して戦えるように指導がなされたのである。

第6章 ゼロからの再建

敏美、653 空時代の年表

日付	記事
昭和 19 年 6 月 27 日	大分基地に帰投
同 7 月 10 日	第 653 航空隊附きを命ずる
同 8 月 1 日	戦闘 164 飛行隊附きを命ずる
同 10 月 14 日	沖縄へ出撃、台湾沖航空戦に参加
同 10 月 22 日	フィリピン・バムバム基地に進出
同 10 月 24 日	バムバム基地にて池田一飛曹ら空輸隊と合流
同 10 月 25 日	バムバム基地にて中川隊長ら母艦航空隊と合流
同 10 月 27 日	中川隊長、653 空に特攻機直掩の出動命令
同 11 月 1 日	任海軍二等飛行兵曹
同 11 月 6 日	敏美、第四神風特攻隊零戦隊として出撃、戦死
同 11 月 6 日	任海軍少尉

懐かしの大分基地

6 月 27 日、柱島沖に戻った機動艦隊は次期作戦にそなえての再建に乗り出していった。第一機動艦隊は解散することになり、大和、武蔵を主力とする司令長官栗田中将のひきいる第二艦隊は、シンガポール南方のリング泊地において整備、訓練に当たることになった。また、被弾した艦艇は呉軍港に回送され修理されることになった。そして残った搭乗員たちは航空戦隊の再建要員となって、大分基地に集結することになった。

搭乗員にとって 4 カ月振りの内地だった。その時の印象を白浜芳次郎氏は次のように回想している。（「最後の零戦」学研 M 文庫）

瑞鶴甲板には、3 機の零戦が引き出された。これが一航戦の最後に残った全機であった。かつては 250 機あまりの飛行機を有した一航戦も、1 回の

攻撃と1度の遊撃戦だけで、その大部分の航空機を失い、たった3機の零戦が残っただけとなった。今その3機も、停泊中の母艦から発艦させようというのである。

機銃も下ろされ、燃料も近くの岩国基地まで飛べる最少燃料だけが搭載された。操縦員は特務士官のベテランが選抜された。風速は3メートルぐらいか。零戦は飛行甲板の端から端まで使って、やっと上がって行った。ついに5月上旬に収容した飛行機隊は、これで1機もいなくなったのだ。

空母の乗組員たちは飛び去る零戦に、『さようなら、また来てくれよ。今度来る時は大勢の友達を連れて来てくれよ。俺たちは君たちのねぐらを整備して待っているぜ』と空行く鳥にたとえて、零戦を見送るのだった。」

この日、敏美たち搭乗員や整備員たち航空関係員は、空母「千歳」に便乗して別府湾に向かった。柱島泊地に浮かぶ大小の艦艇の甲板上で、見送る作業服姿の乗組員たちの打ち振る白い作業帽の波。それにこたえる千歳甲板上の私たちの手には、飛行帽が振られていた。

「しばらくの別れだ。また会おうぜ」互いに手旗信号で誰彼の区別なく信号を送り、しばしの別れを惜しむのだった。

第一機動艦隊に別れを告げた搭乗員は、大分の町に久方ぶりに上陸の第一歩を踏みしめた。半年ぶりの内地の土は、われわれをあたたかく迎えてくれた。鋼鉄の固い甲板もなく、せまい通路をぶつかるようにして通り抜けて行くことももうない。そして白い作業服ばかりでなく、戦時下とはいえ色とりどりの服が私たちを楽しませてくれた。

内地、内地……これは海を家とする強者たちでも、また故国を離れて遠く外地に戦うものでも、一様に恋いしたう。何がそうさせるのか？

その筈は簡単である、われわれは日本人であるからだ。祖国日本で生まれ、日本で育ったからだ。そして、われわれの血潮の中には脈々と日本人の血が流れている。祖国のために命をかけて戦い、血潮を流しても悔いない精

神の持ち主たちも、やはり人の子である。

母国の土を踏んだ時の気持ちは、口ではいえない楽しいものがあった。栈橋に上がった搭乗員たちは、出迎えに出た町の人々を見て、

「おじさんが歩いている」

「女の人がこっちに来る」

「おい、おばさんが手を振っているぞ。ご苦労さんといっているのだろう」

とか、自分勝手にいろいろと想像して喜んでいるのだった。なつかしい内地の風景は、どれ一つ見ても楽しいものであった。

トラックで、われわれは大分航空基地に送られた。大分航空基地は、大分市の町はずれにあった。そしてそこは、日本海軍の戦闘機乗りを育成したところでもあった。」

「当直将校の『ご苦労さん』に迎えられ、私たちは昼間から入浴を許可された。数カ月ぶりの風呂、満々とはられた湯、深々と湯槽に身を沈めて、風呂のありがたさを感じる。

着任の日のはびやかであったが、次の日からは戦死した戦友たちの名簿作成、遺品整理に忙殺された。また南方各諸島からは、母艦から発進して敵艦隊攻撃に向かい、陸上基地に着陸した搭乗員たちが帰って来た。

他の母艦生き残りの戦闘機搭乗員も、ほとんどが顔をそろえたが、その数は出撃前の3分の1以下に激減して、一航戦の戦闘機搭乗員は30名あまりだった。母艦隊として出撃するだけの航空部隊はどこにもいない。母艦航空隊の再建は緊急を要する問題であった。

653 空の編成

大分基地に集合した搭乗員は再建の基幹要員となった。二航戦の搭乗員は松山基地で、新たに一航戦所属の601空の編成と訓練を行い、一航戦と三航戦の搭乗員は大分基地に残って三航戦配下の653空の編成・訓練に当たること

になった。

三航戦（司令官 大林末雄少将）は攻撃用空母群としてまとまっており、その再建には最も期待がかけられていた・そのため、飛行機隊の編成も一、四航戦に比べて最も早く実施された。

7月10日、次の3コの飛行隊が編成され、653空に編入された。

戦闘 165 飛行隊 艦上戦闘機 48

戦闘 166 飛行隊 艦上戦闘機 48

攻撃 263 飛行隊 艦上攻撃機 48

さらに、8月10日、「瑞鶴」の三航戦編入とともに

戦闘 164 飛行隊 艦上戦闘機 48

が編成されて653空に編入された。

上のうち本来の戦闘機隊は、戦闘164、165飛行隊の2隊で、戦闘166飛行隊は、戦闘機に250キロ爆弾を付ける戦闘爆撃隊で、搭乗員たちは艦攻、艦爆の操縦員が転科してきた。

敏美に対し、7月10日付けで「第653海軍航空隊附を命ず」の、そして8月1日付けで「戦闘第164飛行隊附を命ず（第653海軍航空隊所属）」の発令があった。

敏美たちマリアナ沖海戦の生き残りは、164・165飛行隊にわかれて配属になったが、中川大尉（海兵67期）の指揮下で一緒に訓練に当たることになった。

さらに、各航空隊から優秀な搭乗員が集められ、母艦航空隊の誇りと伝統を受けつぐ飛行隊に仕上げられていった。機材は中島飛行機の製作所や三菱重工の航空機製作所に古い搭乗員が派遣され、受け入れ作業に当たることになった。

8月10日現在の編制は次表のとおり。

部隊	母艦	航空兵力（括弧内は定数－常用/補用）
一航戦	雲竜 天城	601 空 偵察 61 飛行隊 （艦偵 18/6）
		戦闘 161 飛行隊 （甲戦 36/12）
		戦闘 162 飛行隊 （甲戦 36/12）
		攻撃 161 飛行隊 （艦爆 36/12）
		攻撃 262 飛行隊 （艦攻 36/12）
三航戦	瑞鶴 千歳 千代田 瑞鳳	653 空 戦闘 164 飛行隊 （甲戦 36/12）
		戦闘 165 飛行隊 （甲戦 36/12）
		戦闘 166 飛行隊 （艦爆 36/12）
		攻撃 263 飛行隊 （艦攻 36/12）
四航戦	伊勢 日向 隼鷹 龍鳳	634 空 艦爆 18/6 飛行隊 （水爆 18/6）
		戦闘 163 飛行隊 （零戦 36/12）
		戦闘 167 飛行隊 （零戦 36/12）

第一機動艦隊司令長官は 8 月 15 日、三航戦、四航戦の再建の様様を大本営に次のように報告した。

三航戦 8 月末、基地からする作戦辛うじて可能

9 月末、着艦訓練終了後、母艦にて作戦可能

四航戦 8 月末、機械不整備のため訓練中断のやむなきに至り作戦不能

9 月末、基地訓練終了後基地からの作戦可能、ただし、戦闘機、艦爆は約半数の見込み

10 月末、総合訓練終了後母艦からする作戦辛うじて可能、ただし、戦闘機、艦爆は約半数の見込み

「あ号」作戦で甚大な損害を被った一航戦の 601 空には、5 コの飛行隊が編成され、601 空に編入されたが、8 月 1 日現在の保有機は零戦 4、彗星 4、九九艦爆 2、天山 12、九七艦攻 3、計 25 機に過ぎず、一航戦の再建は、事実上、この日から出発となった。

結局、攻撃用空母群としてもっとも期待をかけられたのが三航戦 653 空であった。

訓練の日々

梅雨もからりと明けた快い初夏のころ、受け入れられた零戦の整備も終わって、新編成部隊の訓練がはじめられた。湯煙上がる温泉の別府を一望の下に見下ろせる大分海軍航空基地では訓練に明け、訓練に暮れる激しい気迫が脈動していた。

ぐうーんと激しい爆音とともに、指揮所にめがけて突っ込んで来る戦爆隊、海上に浮かぶ標的艦に対し波間をほうのように魚雷投下突撃する艦攻隊、その艦攻隊の上空に直掩のため覆いかぶさるようにして進撃する零戦隊、これらを近づけまいと突撃する戦闘機隊。

総勢 100 名ばかりの搭乗員たちは、中川隊長の指揮下に猛訓練に入っていたが、隊員には歴戦の士があり、教員出身があるかと思うと、練習生を出たての 80 時間足らずの者ありで、老練な搭乗員と練度の低い搭乗員とが雑然としていたので、中川隊長は訓練の調和をとるのに苦労していた。

迫っている次期作戦に備え、短时日の間であったが、初歩の編隊飛行、離着陸訓練、単機空戦から大編隊空戦、機動部隊攻撃法、母艦発着艦訓練まで行うのであるから、その訓練は猛烈を極め、訓練開始以来、事故を出さなかった週はないほどだった。とくに母艦発着艦訓練がはじまった時などは、古い搭乗員たちが殉職者の海軍葬役員になり、そのまま解任にならずに海軍葬を続けるというほどの殉職者を出したものだ。高度の技術が要求される母艦搭乗員を短时日で仕上げるためには、多少の犠牲はやむを得ないという当時の現状であった。

敏美と池田は、連日のようにペアを組んで飛んだ。



上の写真は、昭和 19 年 9 月、来るべき捷号作戦発動に備え、大分基地で訓練に励んでいた頃の、653 空零戦隊。手前列が中島製五二型。（光人社発行「写真集 零戦」から転載）。

同書の写真左に、当時大分基地で勤務していた機関兵長佐藤道生氏の「出撃前夜」と題する以下の回顧談が掲載されている。

文中にある藤井一飛曹は、6 月 19 日のマリアナ沖海戦では敏美と同じ上空直掩隊員（敏美は第 2 小隊 4 番機で、藤井は第 1 小隊の 4 番機）であり、10 月 15 日大分基地から沖縄基地に出撃したときのペア搭乗員だった。（指揮官・1 番機中川健二大尉、2 番機藤井四方夫一飛曹、3 番機太田 譲二飛曹、4 番機志賀敏美飛長）

一番手前の零戦の垂直尾翼には、白くはっきりと『653-111』と書かれているが、これはまさしく、丙種予科練出身の藤井四方夫一等飛行兵曹の愛機である。彼は、巡検後よく私のところへ遊びにきた。19 年 10 月 13 日の夜、私たちはいつものように缶室で酒をくみかわしていた。そのとき、彼はぼつりといった。

『俺はぜったいに墜とされないぞ。しかし、たぶんこのつぎ貴様と会うのは靖国神社だろうな・・・』

それは、653 空がよいよ大分基地から台湾へ進出しようとする前夜であ

った。そして翌朝、藤井一飛曹は僚機とともに沖縄の空を目指して飛び立て行った。これが彼の姿を見た最後であった。

戦後になって知ったことであるが、藤井一飛曹は、大分を出撃した次の日、台湾沖において敵戦闘機 30 機と空戦をまじえ、ついに還らぬ人となった。

上の写真のいずれかに敏美の愛機がある。

下の写真も前掲誌に掲載されていたもの。説明に「大分基地で訓練に励む、最後の母艦部隊 653 空の零戦」とあった。三菱製の五二乙型“653-28”号機搭乗員はだれであろう。ひょっとすると敏美かも知れない。

7 月 10 日、601 空から 653 空への転属が発令された日、敏美は生家に葉書を出している。宛名を次兄の英勇宛とし、発信元は大分海軍航空基地日付ウ 364 増山隊となっていた。

元気でお働きの事と推察致します。
私も益々張り切って軍務に奮闘致しております故、安心を乞ふ、
どうですか故郷に変わった事は有りませんか、
私の同級生も検査でなかなか多忙でしょう。
五三三は元気かね、母さんに頼んでありますが、
もう一つお守りがないと淋しいです。先ず、

頑張りませう。

敏 美

戦場は常に生きるか死ぬか紙一重の修羅場だった。「もう一つお守りがないと淋しい」には、多くの死をみてきた敏美の偽らぬ心情が滲み出ている

盛夏を経て爽涼の秋となっていた頃、164・165 飛行隊に属する戦闘機隊搭乗員は、頻繁に零戦受け入れに、関東地方に出張していた。

下は、投函日不詳のはがきである。戸籍抄本はなんのために必要だったのだろうか。平野恵氏に聞いてみた。当時、隊員は基地周辺の民家を下宿のように利用していた。すでに食料品そのたの日用品が配給制となっていたので、下宿先の口数を増やすために利用したのではないかと。

民家と言えば、マリアナ沖海戦で敏美と編隊を組んだ佃精一飛曹長は、基地近くの民家を借り、新妻と暮らしていた。「遊びに来いよ！」といわれて平野氏は、敏美たち仲間といっしょに訪問した記憶があるといった。

文中の「部落の居所宛名書き」とは住所録のことだろう。なにしろ、マリアナ沖海戦での母艦翔鶴の沈没で、身の回りもの一切をなくしていたからの注文だと思われる。

前略 御免下さい。

戸籍抄本取って下さい 父上様度々御便り申し上げます。

家の方にはお変わりない事と存じます。

私も一日と大空へ舞い上がって居ます。

早速ですが、現在の部落の居所宛て名書きを至急御送り下さい。

此の前の物は紛失致しました。

では暮れぐれも軀を大切に無理をせざる様。

最後となった便り

次は、最後となった手紙である。「稲は稔りを見せかけ・・・」とあるから、9月下旬から10月上旬の間に、大分基地で書いて投函したと思われる。戦闘帽に浴衣姿の写真が同封してあった。厳しい訓練の中にありながら4日間の休暇が出た。近県近郷の仲間達は、それぞれ、家族のもとに帰省することができたが、遠方の者は、往復するだけで休暇日数は尽きてしまう。やむなく、別府の湯につかって静養したという。写真は、その時に撮影したものだ。



敏美にとっては2度目の前線行きである。マリアナ沖海戦での思い出、内地へ戻ってきてからの厳しい訓練、いつきの安らぎ、語りたいことは山ほどあっただろうに、検閲があるために一言も書けない。マリアナ沖で海上漂流したことも、平野恵氏から聞くまでは、誰にも知られていないことだった。

拝啓 父上様御家内様いろいろとご心配かけ誠にすみませんでした。

先日（お願いした戸籍の）原本、速達にて正に届きました 御安心下さい。

家の方は皆元気のこと嬉しく存じます。

私も相変わらず壮健にて軍務に精勤邁進致して居ります故、何とぞ御放念下さい。

秋となり田圃の稲は稔りを見せかけて居ります。

そちらの山には紅くさぞ景色も良きことと思ひます。

裏山には粟が真赤に熟れて居るでせう。

月影に鳴く虫の声も淋しく郷里を思へ浮べられます。

五三三もフミヨもお元気に通学のことと察します。

兄兩人とも住所を知らずお便りも出されません。

家の方でわかったら知せて下さい。

聖戦で愈々敵を目前に引き寄せ決戦の瞬時と迫って参りました。
各部落の同級生も、只今徴兵入営の事と存じます。
私も今より益々村の若者に負けずに頑張ります。
敵機殲滅の腕はあることと自分ながら待機に満足致して居ります。
兄も奮斗の事と思います。銃後も防空訓練に邁進であろう。
当地は町民一致防火防止に日々訓練致して居ります。
さて二、三日前に御送りした写真受け取って下さい。
又、群馬県太田町に出張せる時の写真もあります。十八日頃に届く
予定です。
もしついたら一枚御送り下さい。当宛に居らん場合は御知らせ致
します。
出張の時に面会致したかったが余裕がありませんで残念です。
大分迄は余り遠く時間もかかるし金もありますから成るべくなら
よして下さい。
私には何時も変わりはありません。では御送りの品物付き次第返事
を出します。
御心配はいりません。毎日御身体に御留意下され、御丈夫にて御暮
して下さい。
先づは乱筆にて。 敏美より
父上様

大分市大分海軍航空基地気付ウ参六四増山隊

親元を離れて2年が過ぎていた。家族に対する思い、また、故郷への思いが切々と綴られている。筆無精の男がよくも長々と書いたものだ。

この頃、敏美は群馬県の太田まで何度か戦闘機受領に来ていた。往きは列車で、戻りは受領した飛行機を操縦して大分基地に戻る。零戦の空輸は653空再建には緊急の課題だったし、特に、この時機は頻繁だったから、「ちょっと親の顔を見てくる」といったわがまは許されなかったのだろう。とって、親の報から出向いてもらうことも、「金がかかるからなるべく止してくれ」と気配りを見せた。

生家には次の電報も残されている。

イシカミムラ オオアザ ババ
シガヒョウゾウ
カヘルマデ マテ サトウ

大分駅の電報局から発信、10月18日の消印である。敏美はその4日前の14日に、大分基地から沖縄に向けて出撃していったから、この電報は敏美の依頼を受けた人物からの発信である。文末の「サトウ」が、その人物の名だと思われる。敏美が世話になっていた下宿先の人なのだろうか。

いずれにしろ、電報を打つ余裕もなく出撃していったにちがいない。

敏美は特に遺書といったようなものは残さなかった。それは、「連日激戦が続き、戦死者が増えてくると、ジnkスがまかり通るようになる。遺書を書いた者、身のまわり品を整理して出撃した者、金を貯めている者は、必ず死ぬというジnkスであった。初めのうちは誰もが冗談として一笑に付していたが、このジnkスがあまりにも多く当たるので、だんだん皆が気にするようになってきた。前任搭乗員が部下に向かって、

『遺書は書くな。遺言を書いた者は必ず死ぬぞ』と注意しているのを聞いた。その後この前任搭乗員が戦死したとき、彼の遺品を整理すると遺書が出てきたのである。部下には書くなと注意していた本人が書いていたのである。

私も、ジnkスを信じるとまではいかないが、人がやってはならないということは、しない方がよいと考え、遺書は書かなかった」（岩井勉著「空母零戦隊」）。敏美も同じ心境だったにちがいない。

出撃を前にして、それぞれ記念写真を撮ったようだ。



上 平野恵二飛曹 右 敏美

敏美が大分基地で訓練に明け暮れた期間は、6月27日から10月14日まで111日間、再び、この地に戻ることはなかった。

第7章 台湾からフィリピンへ

- アメリカ軍はレイテ島上陸に先立ち、沖縄と台湾の主要基地を10月12日から16日まで連日爆撃した。これに対してわが機動艦隊が全力をあげて攻撃を仕掛けた。
- 敏美は14日、653空の先発隊として大分基地から台湾へ向かった。
- 池田・平野の両名も、それぞれ別のルートでフィリピンに向かった。

関連年表

日付	記事
昭和19年10月14日	敏美、653空先発隊として大分基地出撃
同 10月18日	敏美、台湾にてB-29 邀撃戦
同 10月20日	平野、母艦航空隊として大分基地から比島へ
同 10月21日	池田、松山基地から空路、比島へ向かう
同 10月22日	敏美、フィリピン・マバラカット基地へ
同 10月24日	池田、マバラカット基地で敏美らと合流
同 10月25日	母艦航空隊、マバラカットで敏美らと合流 平野は、途中で不時着
同 日	連合艦隊、比島沖で壊滅
同 日	第一神風特別攻撃隊・敷島隊突入
同 10月27日	653空に特攻機直掩の命令下る
同 11月1日	任 海軍二等兵曹
同 11月6日	敏美、特攻直掩機として出撃、自爆
同 日	任 海軍少尉
同 11月7日	敏美の上官、653空再建のため内地帰還
同 11月15日	653空 解隊



● 印は、以下の本文中に登場する転戦地

タテ線とタテ線間の距離は約 550 キロ

ヨコ線間の距離も同じ

捷一号作戦

すでに、マリアナ諸島、カロリン諸島およびニューギニア島北岸の航空基地のすべてが米軍の手に落ち、米軍の次の攻撃目標はフィリピンだった。その前に、日本軍の戦闘機や爆撃機が出撃してくる沖縄や台湾の航空基地および軍事施設を徹底的に空爆してその機能を喪失させておかなければならなかった。

これに対する連合艦隊は、「捷号作戦」に備えて、寺岡謹平中将を司令官とする第一航空艦隊（略して「一航艦」）を、フィリピン方面の第五基地航空部隊とし、福留繁中将を司令官とする第二航空艦隊（略して「二航艦」）を、南西諸島から台湾にかけての防空にあたる第六基地航空部隊として発令していた。

「捷号作戦」とは、次に予想される決戦区域を次の4つに区分して、このいずれに米軍が来寇しても陸海空の戦力を総結集して起死回生の決戦を行う、とする計画であった。

作戦区分	予期決戦海面
捷一号作戦	比島方面
捷二号作戦	九州南部。南西諸島および台湾方面
捷三号作戦	本州、四国、九州および小笠原諸島方面
捷四号作戦	北海道方面

この計画をうけて連合艦隊司令長官は捷一号作戦の場合の「連合艦隊捷号作戦要領」を8月4日に発令した。航空隊に関しては、一航艦（第五基地航空部隊・司令部はマニラにあり司令長官は海軍中将寺岡謹平）と、敏美の所属する二航艦（第六基地航空部隊）は、その全力を比島に集中する。そのために、二航艦は本土西部にあって、いつでも進出できる態勢をとることなどが下令された。当時、母艦航空隊は大分・鹿児島・徳島・岩国・呉・美保の各基地に分散訓練中であった。

沖縄・台湾大空襲

10月10日、米機動部隊は突然、沖縄、奄美大島、久米島、宮古島等の各島を、艦上機延べ1,396機で、早朝から夕刻近くまで4次にかけて空襲した。このとき沖縄の那覇市は市街地の9割を焦土と化した。米軍の記録によると、空戦らしい空戦はほとんどなく、日本軍の飛行機の大半を地上で撃破したとある。

次いで10月12日、今度は台湾全土に対し早朝から夕刻まで、戦爆連合延べ1,378機が数次にわたって空襲を行った。この日、台湾所在の陸海軍戦闘機120機が邀撃を行い、一日で海軍戦闘機兵力は可動26機に減少した。米機動部隊の被害は48機（米側発表）。

10月13日早朝、米機動部隊は台湾の東方約80カイリ附近に達し、昼間に数次にわたり、台湾各地を空襲した。来襲機数は974機だった。前日の戦闘で、戦闘機の大半を喪失していたので日本軍の邀撃は低調だった。

敏美、先発隊として沖縄・台湾へ

10月14日、連合艦隊司令部は「基地航空部隊捷一号捷二号作戦発動」を下令した。この結果、二航艦の三航戦（大分、鹿児島）、四航戦（徳島、岩国、呉、美保）の可動兵力154機に出撃命令が下令された。

敏美の所属する653空164・165戦闘機隊のうち24機が、先発隊として中川健二大尉指揮のもと大分基地から沖縄・小緑飛行場に進出した。

このとき、大分基地でいっしょになって訓練に励んできた池田一飛曹、平野一飛曹の2人は、零戦受領のため群馬県に出張中で、結局、3人3様の出撃となった。

● 池田一飛曹の回想

昭和19年10月12日、台湾、沖縄方面アメリカ機動部隊艦載機の大空襲を受けた。米軍比島上陸の前ぶれである、わが戦闘機隊も14日、先発隊とし

て24機が石森学中尉指揮のもと沖縄小緑飛行場に進出した。その中に志賀飛長も出撃し、台湾・比島へと転戦して行った。日夜、同じペアで訓練していた仲だったから、私が居れば一緒に出撃しただろうに。代りに中仮屋兵曹長、坂本二飛曹がつれて出撃した。

そのとき、私は、他の4名（名白浜芳次郎兵曹、志村雄作兵曹、杉山光平兵曹、山川一郎兵曹）と、小泉飛行機製作所（旧群馬県大田町中島製作所）に派遣され新しい零戦をテスト飛行中でした。出撃の電報を受けとり急ぎ大分基地に戻ったが、私たちが乗艦する母艦群は、すでに豊後水道を通過しているところでした。

私たちは全員艦隊の経験者だったので、太平洋上に出てから空母に着艦する予定で準備をしていたちょうどそのとき、副指令に呼ばれて、『5名は今日午後松山基地に飛び、明日比島へ行け。ただし、一式陸攻1機を護衛して』との命令を受けました。

●平野一飛曹の回想

私は群馬県の中島飛行機工場に零戦受け入れに行ってましたが、アメリカ機動部隊が台湾に来襲、受領した飛行機は早く帰隊せよとの連絡があり、確か4機で先に大分に帰りましたが、すでに653空（三航戦）の一部は沖縄、台湾へと進出していました。志賀さんも台湾で戦いながら比島に行ったのではないかと思います。

母艦搭乗員も少なくなり、私が乗艦した瑞鳳は平常30機が16機。瑞鶴、瑞鳳、千代田、千歳あわせて100機余り（定数のほぼ2分の1）、これが小沢艦隊のオトリ艦隊のすべてでした。

このオトリ艦隊は、戦艦・大和、武蔵をはじめとする日本の機動部隊をレイテ島攻撃に向わせるため、アメリカ空母部隊を北方に引き寄せるのが目的でした。オトリの役目は成功したのだったが、空母4隻は25日ともに撃沈されています。

敏美と池田一飛曹は、10月24日フィリピン・ルソン島のバムバム基地で合流し、ふたたび編隊を組んだが、平野一飛曹と再会することはなかった。

台湾沖航空戦

10月14日、午前7時から米戦爆連合約250機が基隆、新竹、台南、屏東の各地区に分散飛来した。主として、飛行場を目標にして約2時間にわたって銃爆撃を繰り返したのち、東方海上に避退した。そして、午後には中国からB29約100機が来襲した。

これに対し、わが攻撃隊はつぎのように発進した。

●第一次攻撃隊（午後1時30分から沖縄の小禄や北（読谷）、中（嘉手納）飛行場を発進）

<偵察隊> 141 空偵察 3、4 飛行隊	艦偵	4 機
634 空	天山艦攻	8 機
<制空隊> 221 空戦闘 308、312、313、407 飛行隊)	零戦	29 機
203 空戦闘 303 飛行隊	零戦	6 機
341 空戦闘 401、402 飛行隊	紫電	16 機
	零戦	8 機
634 空戦闘	零戦	32 機
<爆撃隊> 762 空攻撃 3 飛行隊	彗星艦爆	24 機
752 空攻撃 5 飛行隊	彗星艦爆	6 機
634 空	彗星艦爆	9 機
<雷撃隊> 763 空攻撃 405・406 飛行隊・	銀河	24 機

●第二次攻撃隊（午後2時頃から沖縄の各基地を発進）

<偵察隊> 653 空攻撃 263 飛行隊	二式艦偵	4 機
	天山艦攻	4 機
<誘導隊> 653 空攻撃 263 飛行隊	天山艦攻	4 機
<制空隊> 203 空戦闘 304 飛行隊	零戦	30 機

341 空戦闘 401 飛行隊	零戦	16 機
<u>653 空戦闘 164、165 飛行隊</u>	<u>零戦</u>	<u>19 機</u>
166 飛行隊	零戦	14 機
<爆撃隊> 701 空攻撃 102、103 飛行隊	九九艦爆	56 機
<援護隊> 252 空	零戦	24 機
<雷撃隊> 752 空攻撃 256 飛行隊	天山艦攻	16 機
701 空攻撃 252 飛行隊	天山艦攻	17 機
653 空攻撃 263 飛行隊	天山艦攻	14 機

- 下線は、敏美が所属した飛行隊（引用者注記）

編成上は 360 余機からなる編成であったが、それぞれ所属を異にする混成部隊で合同訓練もなされず、使用する電波の周波数も異なっていたので、各編隊は個々に索敵攻撃を行わざるを得なかった。おまけに戦域の天候は曇が多く、結局、各部隊は小編隊で戦場を目指した。

母艦航空隊の 653 空は索敵攻撃を行ったが、米戦闘機と悪天候に禍されて、目標を発見できずに、宮古島や台湾に着陸した。（中略）このように白昼に行われた総攻撃は、戦果をあげぬままに終わった。これら攻撃隊の残存機も、16 日までに、ほぼ失われた。（神野正美「台湾沖航空戦」2004 年 11 月 光人社）

この日の、敏美たちの行動が「653 空 164・165 戦闘機隊の戦闘詳報」に、次のように記録されていた。

「零戦 20 機は、台湾沖敵機動部隊攻撃ノタメ大分基地発進 沖縄小禄基地着。同攻撃ノタメ零戦 13 機小禄基地発進セルモ天候不良ノタメ宮古島基地ニ帰投」

敏美は、この宮古島で、谷田部空時代の戦友に出会っている。701 空攻撃 102 飛行隊の馬場助治（丙飛 15 期飛練 31 期）である。

馬場は、平成 12 年 8 月 15 日発行の『わかざくら』第 55 号への寄稿文のなか

で、” 沖縄の小さな島でのできごと” の一つとして、次のように書いていた。

「早朝トラックで飛行場に行くと、飛練の谷田部空で一緒だった同期の零戦組の志賀飛長の逞しくなった顔に会い握手をして再会を喜び合った。(彼も 11 月 6 日、第 4 神風特別攻撃隊零戦隊として出撃、鹿島隊の直掩機、比島で体当たり散華した。)」

台湾における 653 空戦闘機隊の戦闘詳報

653 空 164・165 戦闘機隊の戦闘詳報が、「連合艦隊海空戦戦闘詳報 全 80 巻」のうちの 1 巻、「航空母艦戦闘詳報」に掲載されていた。戦闘機隊の戦闘詳報としては、希有の存在であった。

以下は、その全文である。ただし、縦書きを横書きに、漢数字を算用数字に直した。

- 下線部分は、敏美に関連すると思われる事項 (引用者注記)



1. 計画

- (1) 任務企図不詳
- (2) 作戦準備 (ナシ)

2. 経過

(1) 自隊及び友軍の戦闘経過

月日	自隊の戦闘経過	友軍の戦闘経過の概要
10月14日	<p>零戦 20 機、台湾沖敵機動部隊攻撃ノタメ大分基地発進 沖縄小禄基地着</p> <p>同攻撃ノタメ零戦 13 機小禄基地発進セルモ天候不良ノタメ宮古島基地ニ帰投</p>	<p>零戦 (爆装) 15 機同左</p> <p>天山 22 機鹿兒島基地ヨリ小禄着</p> <p>彗星 5 機鹿兒島基地ヨリ小禄着</p> <p>零戦 (爆装) 12 機天山 4 機同左</p> <p>天山 11 機同第 2 次攻撃に参加攻撃セルモ戦果不明</p> <p>彗星 1 機索敵ノタメ発進未帰還</p>
10月15日	<p>索敵攻撃ノタメ零戦 10 機宮古島基地発進。敵機動艦隊ヲ発見 攻撃直前敵戦闘機 (F 6 F) 約 30 機の奇襲に遭ヒ空戦ヲ実施ス 戦果 (F 6 F) 3 機撃墜 未帰還 5 機</p> <p>同敵艦隊攻撃ノタメ零戦 2 機小禄基地発進セルモ敵ヲ見ズ宮古島基地ニ帰投</p> <p>零戦 1 機空襲ノタメ発進セルモ以後全然消息不明未帰還</p>	<p>天山 3 機誘導機として参加 未帰還 1 機</p> <p>天山 3 機同左</p> <p>彗星 1 機索敵ノタメ大岡山基地ヲ発進セルモ引返ス</p>
10月16日	<p>零戦 2 機大岡山基地ニ於テ邀撃戦 敵 (F 6 F) 10 機来襲セルモ交戦セズ (F 6 F) 1 機撃墜</p>	<p>敵機動艦隊攻撃ノタメ天山 6 機 (雷) 大岡山基地発進 敵ヲ発見 攻撃 空母 1 撃破炎上 戦艦 1 撃破 全機未帰還</p>

<p>10 月 17 日</p>	<p>B-29 41機来襲零戦5機邀撃ノタメ発進 空戦ヲ実施 戦果不明 1機着陸時脚破損大破(台南)</p> <p>B-17 30機来襲零戦1機邀撃ノタメ発進 空戦ヲ実施 戦果不明</p>	<p>索敵天山 4機彗星 1機大岡山基地発進 敵艦隊ヲ発見セズ 天山 1機敵戦闘機ト交戦 1機撃墜天山 1機未帰還</p> <p>零戦(爆装) 6機同左 1機未帰還</p>
<p>10 月 18 日</p>	<p>(1) 零戦 10機上空哨戒敵ヲ見ズ(大岡山基地)</p> <p>(2) <u>B-29 30機来襲零戦 12機邀撃戦 1300大岡山発 戦果被害ナシ</u></p>	<p>索敵天山 3機彗星 2機大岡山基地発進敵ヲ見ズ</p>
<p>10 月 19 日</p>		<p>索敵天山 4機彗星 1機大岡山基地発進敵ヲ見ズ</p>
<p>10 月 20 日</p>	<p>戦闘機隊 邀撃待機</p>	<p>索敵彗星 1機大岡山基地発進敵ヲ見ズ</p>

(3) 行動図並ニ合戦図 (行動図は省略)

(イ) 10月15日 台湾沖敵機動艦隊索敵攻撃(特攻隊直掩)

経過

0729 宮古島基地上空発進 0830頃宮古島ノ210度120哩ノ洋上

ニ於テ敵戦闘機(F6F)約30機ノ邀撃ニ遭ヒ交戦 敵機ハ発艦直後ニ

テ 1 隊ハ編隊後下方ヨリ攻撃シ来タリシタメ突撃体形にアリタル戦闘機隊ハ直チニ之ニ応戦 2 小隊 1 番機ハ (F6F) 4 機と交戦 其の 2 機ヲ撃墜 3 小隊 3 番機ハ (F6F) 1 機ヲ撃墜セリ 未帰還 5 機

(ロ) 10 月 17 日 B-29 十数機来襲 邀撃戦

経過

1030 台南基地発進 1040 高雄上空着、B-29 約 45 機高度 8000 米にて爆撃セルヲ発見、高度ヲ取り之ニ反復攻撃 (特攻隊 6 機ト協同) セルモ戦果不明 (特攻機 1 機未帰還)

(ハ) 10 月 17 日 B-17 30 機来襲 邀撃戦

経過 1400 発進、1430 頃敵発見攻撃セルモ戦果不明、

(ニ) 10 月 18 日 B-29 邀撃戦 (大崗山基地)

経過 1300 大崗山基地発進、1400 着陸 B-29 約 30 機高度 8000~9000 ニテ来襲セルヲ発見 之ヲ攻撃セルモ戦果不明

3. 令達報告 不詳

4. 戦果及被害

4 空戦

日時	戦 果
15 0830	1/2D F6F 2 機撃墜
同	3/3D F6F 1 機撃墜

- “1/2D” は、2 小隊 1 番機を示す。以下同じ。(引用者注)

5 被害 (10 月 15 日)

小隊	機番号	被害状況
1	3/1D	空戦ニヨリ未帰還
2	2, 3/2D	同

3	1, 2/3D	同
2	1/2D	空戦ニヨリ被弾6発
2	4/2D	同 3発

5. 我が兵力

月 日	保存機数	作戦可能機数	記 事
10月 14日	19	19	
15日	15	14	1機整備不良
16日	15	14	1機内地ニ還ル
17日	14	13	1機脚破損大破
18日	14	15	

6. 功績

(2) 直掩隊編成表

10月14日 大分基地→沖縄基地進出

指揮官	中隊長	小隊	番機	氏 名	記 事
中川大尉	中川大尉	1	1	大尉 中川健二	発動機不調のため引き返す
			2	一飛曹 藤井四方夫	
			3	二飛曹 太田 譲	
			4	飛 長 志賀敏美	
		2	1	上飛曹 橋口嘉郎	発動機不調のため引き返す
			2	一飛曹 八木 徹	
			3	一飛曹 菅沼陽一	
			4	飛 長 石田哲也	
	石森中尉	3	1	中尉 石森 學	
			2	上飛曹 長沼 弘	
			3	二飛曹 石田正一	

中村上飛曹	4	4	飛 長 奥田義夫	
		1	飛曹長 中仮屋国盛	
		2	上飛曹 中村義信	
		3	二飛曹 坂本 清	
		4	飛 長 平野友三郎	
	5	1	少 尉 福井美夫	
		2	上飛曹 近藤武春	
		3	一飛曹 高橋軍記	
		4	飛 長 太田吉五郎	
	6	1	上飛曹 中村常石	
		2	上飛曹 後藤徳雄	
		3	上飛曹 小山一也	
		4	一飛曹 黒木 通	発動機不調のため引き返す

10月15日 邀撃戦（宮古島基地）

		1	1	飛 長 平野友三郎	消息不明
--	--	---	---	-----------	------

10月15日 台湾沖敵機動部隊索敵攻撃（特攻隊直掩）

指揮官	中隊長	小隊	番機	氏名	記 事
石森中尉	石森中尉	1	1	中 尉 石森 學	
			2	上飛曹 近藤武春	
			3	上飛曹 長倉 弘	未帰還
		2	1	上飛曹 中村義信	敵 F6F 二機撃墜
			2	一飛曹 藤井四方夫	未帰還
			3	一飛曹 菅沼陽一	未帰還
			4	二飛曹 坂本 清	
		3	1	上飛曹 後藤徳雄	未帰還

			2	一飛曹 高橋軍記	未帰還
			3	飛 長 太田吉五郎	敵 F6F 一機撃墜

10月15日 同上

		1	1	上飛曹 近藤武春	
			2	二飛曹 太田 讓	

10月16日 B-29 邀撃戦（大崗山基地）

	近藤上	1	1	上飛曹 近藤武春	
			2	二飛曹 太田 讓	敵 F6F 一機撃墜

10月17日 B-29 邀撃戦（台南基地）

石森中尉	石森中尉	1	1	中 尉 石森 學	
			2	二飛曹 中村常吉	
			3	飛 長 石田哲也	着陸時脚大破
			1	飛曹長 中仮屋國盛	
			2	上飛曹 中村義信	

10月17日 B-17 邀撃戦（大崗山基地）

		1	1	一飛曹 太田 讓	
--	--	---	---	----------	--

10月18日 (1) 上空哨戒（大崗山基地）

石森中尉	石森中尉	1	1	中 尉 石森 學	
			2	上飛曹 近藤武春	
			3	飛 長 太田吉五郎	

	2	4	飛 長 石田正一	
		1	飛曹長 中仮屋国盛	
		2	上飛曹 中村義信	
		3	二飛曹 坂本 清	
		4	飛 長 奥田義夫	
	3	1	上飛曹 中村常石	
		2	二飛曹 太田 讓	

10月18日 (2) B-29 邀撃戦

石森中尉	石森中尉	1	1	中 尉 石森 學	
			2	飛 長 石田正一	
			3	上飛曹 中村義信	
			4	飛 長 太田吉五郎	
		2	1	飛曹長 中仮屋国盛	
			2	二飛曹 坂本 清	
			3	上飛曹 近藤武春	
			4	飛 長 志賀敏美	
		3	1	上飛曹 中村常石	
			2	一飛曹 八木 徹	
			3	二飛曹 太田 讓	
			4	飛 長 石田哲也	

大本営、日本軍大勝利と発表

12日から16日に至る台湾沖航空戦で、大本営は18日午後、「空母11隻撃沈、8隻撃破、戦艦4隻を含む45隻撃沈または撃破。撃墜飛行機111機。我が方の損害、飛行機未帰還312機」と発表した。天皇も御嘉賞の勅語を出し、国民は提灯行列でアメリカ機動艦隊の全滅という大戦果を祝った。小磯国昭首相（陸軍大将）は祝勝会で「勝利は我が頭上にあり！」と絶叫した。

しかし、残敵掃討に向かった日本艦隊はアメリカ空母機動部隊がまったく無

傷であり、大戦果は誤りであることを確認した。だが、大本営日本海軍部は大戦果のウソを最後まで天皇にも日本陸軍にも国民にも訂正することはなかった。

二航艦に対して、フィリピンへの進出命令

10月17日8時 この日スルアン島の海軍見張所は、米軍が上陸した旨の緊急信を發して連絡を絶ってしまった。一方、マニラ方面は早朝から米機動部隊の激しい空襲を受けていた。敵が比島への本格的な上陸作戦を始める気配がにわかには濃厚となってきたのである。

かくて、数日來の米機動部隊との戦いで決戦航空兵力に大損耗をきたしていた連合艦隊は、態勢を立て直しを図るいとまもないうちに、いまや敵の來攻を迎えねばならないという危機に直面したのである。

連合艦隊は同日、捷一号作戦警戒を發令するとともに、二航艦（第六基地航空部隊）に対して、戦況に応じ比島に進出すべき旨を命じ、また第一遊撃部隊に対してはブルネイ（ボルネオ北西部）への進出を下令した。

敏美たちは、この先、フィリピンにおける絶望的な戦場へ向かうことになったのであった。

第8章 特攻への道

～レイテ沖海戦

- フィリピンにあった一航戦の戦力はわずか40機。新任の司令長官大西中将は、殺到する米軍に対抗するには必中必殺の特攻攻撃もやむなしと判断した。

8-1 一航艦、神風特別攻撃隊を編成

大西中将、一航艦に

米機動部隊はレイテ湾上陸に先立つ9月21日、マニラ地区およびクラーク飛行場、ニコルス飛行場を、艦上機延べ400数十機で朝の9時半から夕方の6時まで、4次にわたって空襲した。このため飛行場は掘り返された畑のようになった。

これらの空襲によって、一航艦の航空戦力は激減、9月23日現在の可動兵力は65機、これが全フィリピンを防衛する航空戦力のすべてであった。

10月17日、大西瀧治郎中将がこれまでの寺岡謹平中将に代わって、第一航空艦隊司令官として、マニラの司令部に着任した。このときの一航艦の保有機数は僅か39機を数えるのみで、陸軍第4航空軍の30機を合わせても約70機に過ぎず、哨戒、索敵さえ思うように実施できなかった。

すでに海軍航空部隊は多くのベテラン搭乗員を失い、補充されてくる搭乗員の技量も低下する一方だし、器材の補充難から航空機の生産もままならず、航空戦力はガタ落ちになっていた。

これが、米機動部隊が大挙してフィリピンに押し寄せるといふときの日本軍の反撃戦力の実態であった。

かつて大西中将は、特攻は統率の外道と自らきめつけていた。しかし、「あ号」作戦の失敗により、重大な段階に陥ったいま、この難局を打開するには、戦果の期待できる特攻も止むをえないと考えていた。そして技量未熟な搭乗員に、大した戦果もあげられず犬死させるのではなく、赫々たる戦果をあげさせたいものと身近な者に漏らしていた。

比島作戦の正面を担当する一航艦司令長官に大西中将を任命したその裏には、戦況によっては特攻の採用も止むなしと考へ、これを実行できるのは、信望のある大西中将をおいて他にないとの理由もあったようである。

体当たり攻撃の意見具申

9月30日に一航艦司令長官の内命を受けた大西長官は、フィリピンに赴任する前に、大本営海軍部の首脳、軍令部総長及川古志郎大将、次長伊藤整一中将、第一部長（作戦担当）中沢佑少将などと、今後の作戦について意見を述べた。

その席で大西中将は、次のような意見を述べた。

ご承知の通り、最近の敵空母部隊はレーダーを活用し、空中待機の戦闘機を配置し、二段構えで備えている。そしてわが攻撃機を遠距離で捕捉し、これを撃退することが非常に巧妙になってきた。そのため、敵警戒幕を突破、または回避して、攻撃目標に到達することが困難となっている。また犠牲が大きく有効な攻撃をすることができない。

これを打開するには、第一線将兵の殉国・犠牲の至誠に訴えて、体当たり攻撃を敢行するほかに良策はないと考へる。大本営としても、これについて了解していただきたい。

一同、肅然とした。やがて及川総長が口を開いた。

大西中将、あなたが述べたことはよくわかった。大本営海軍部としては、この戦局に対処するため、涙をのんで申し出を承認することとします。

戦死者に対する処遇は充分考えましょう。しかし、実行に当たっては、あくまで本人の自由意志によってください。決して命令してくださるなよ。と念をおされた。

大西中将は、

よくわかりました。事後のことはよろしく願います。

といて、この会談は終わった。

大西中将は出発に先立ち、軍令部第二課の航空作戦計画担当の源田実中佐に会って、体当たり攻撃について協議し、「まず戦闘機隊で編成すれば、他の隊もこれに続くだろう。航空隊が決行すれば、水上部隊もその気持になるだろう。海軍全部がこの意気でゆけば、陸軍も続いてくるであろう」と、その決意を述べ、攻撃隊の名称や、発表方法などについて打ち合わせをした。また、源田参謀は、零戦 150 機の準備を中将に約束した。

大西長官、比島の現有勢力 40 機に直面

大西中将は、10月11日、高雄に飛んだ。5日前に内地から361機をひきいて進出していた第二航空艦隊（司令長居福留繁中将）の福留繁長官に会うためだった。そこで、大西長官は、航空機による体当たり攻撃の決意を語ったが、福留長官は正攻法でゆくと答えて、同意しなかった。

この日、連合艦隊司令長官豊田副武大將が比島巡視（10月7日～9日）の帰途、新竹基地に居ることを知り、大西中将はただちに新竹に飛んだ。台湾は12日から14日まで、米機動部隊の攻撃をうけた。

大西中将は新竹において、米機動部隊の来襲を目の当たりに見て、このままでは搭乗員をただ犬死させるだけである。局面打開の非常的手段として、一時的に体当たり攻撃を実施する思いを強くした。

大西中将は豊田長官に対し、

戦争初期の練度の者ならよいが、いまは単独飛行がやっという搭乗員

が沢山いる。こういう者が雷撃や爆撃をやっても、ただ被害が多いだけで、とても成果は挙げられない。体当たりでゆくより方法がないと思う。しかしこれは上級者から命令でやれということはどうしても言えぬ。そういう雰囲気になって来なくては実行できない。

と、体当たり攻撃について述懐していた。胸中に悲壮な決意を秘めてきた中将は、行くさきざきで敵の空襲をうけ、気ははやりながらも、フィリピンに渡ることができなかった。

10月16日、敵空襲の合い間をぬって新竹を出発、高雄をへて17日午後4時すぎ、ダグラス輸送機でニコルス飛行場についたのだった。ただちにマニラの第一航空艦隊司令部に行き、その晩、同期の寺岡中将と実務的な引き継ぎをした。

翌18日、大西中将は配下の小田原俊彦参謀長らから現状を聴取した。沖縄と台湾沖航空戦で消耗した比島の現有航空兵力は、戦闘機30機、全機種合わせても実働約40機であることを知った。これだけの兵力で比島を防衛しなければならないのである。

18日午後5時には、捷一号作戦発動が令達された。同日、中将は26航空戦隊航空参謀吉岡忠一少佐、猪口参謀、玉井副長、戦闘305飛行隊長指宿正信大尉、戦闘311飛行隊長横山岳夫大尉を集めて打ち合わせを行なった。

大西中将はおもむろに口を切った。

皆も承知のように、第一遊撃部隊（栗田艦隊）はレイテ湾に突入して、米軍を撃滅する計画である。一航艦は栗田艦隊が無事レイテ湾に到着できるよう、敵機動部隊の活動を阻止する任務をもっている。この捷号作戦にもし失敗すれば、それこそ由々しい大事を招くことになる。一航艦としては、実働40機の兵力で、20隻あまりの敵空母を制圧することは不可能だが、少なくとも1週間ぐらい、空母の甲板を使えないようにする必要がある。

それには、零戦に 250 キロ爆弾を抱かせて、体当たりをやるほかに、確実な攻撃法はないと思うが……どんなものだろう。

と、体当たりをさせる苦悩の攻撃法を提案した。

玉井中佐は大西中将に、

私は副長ですから、山本司令の意向を聞く必要があると思います」と言う
と、すかさず中将は、「司令には話せずみで、万事、副長に一任するという
ことであった。

と言った。戦史叢書「海軍捷号作戦（1）」

中野磐雄らの甲飛 10 期に白羽の矢

10 月 19 日夜、体当たり攻撃隊の編成を一任された玉井副長は、甲飛 10 期生を集めて長官の決意を伝えた。集まってきた 10 期生たちは 33 名、その中に中野磐雄の姿もあった。中野は徳島航空隊での飛練教程をおえたあと、265 空「狼」部隊に配属され、九州笠ノ原基地で錬成教育を受けた。

昭和 19 年 1 月、部隊は基地を台湾新竹に移し、「あ号」作戦に備えての訓練に従事していた。敏美が母艦航空隊であったのに対して、彼は基地航空隊であったから、マリアナ沖海戦では、ペリリュー・ワシレ・グアムなど南太平洋の基地から転戦していた。

しかし、マリアナ沖海戦で多くの指揮官を失った 265「狼」部隊は、7 月 10 日、新編成の 201 空に吸収され、この日マバラカット基地に出撃していた。

玉井中佐が甲飛 10 期生たちを最初の特別攻撃隊に選んだのは、中佐が 263 空「豹」部隊司令のときに手塩にかけて育てた、いわゆる“子飼い”の甲飛 10 期生だったからだといわれている。

この夜集められた全員が賛成した。指揮官を海兵出身の関行男大尉とし、攻撃隊員 13 名、直掩隊員 10 名、計 23 名が発表された。「神風特別攻撃隊」の

誕生である。23名は、さらに4隊に区分された。これらの名称は有名な短歌のなかから採用された。

敷島の大和心を人問わば
朝日におう山桜花

10月20日、体当たり攻撃隊が結成されたその日の早朝、201空本部前で大西中将は、彼らに訓示した。

この体当たり攻撃隊を神風（しんぷう）特別攻撃隊と命名し、4隊をそれぞれ敷島、大和、朝日、山桜と呼ぶ。日本はまさに危機である。この危機を救うるものは、大臣でも、大将でも、軍令部総長でもない。それは、若い君たちのような純真で気力に満ちた人たちである」

話が進むにつれて、彼の声は、感情のたかまりでふるえているようであった。

みんなは、もう命を捨てた神であるから、この世の欲望はないであろう。もしあるとすれば、それは自分の体当りの戦果が知りたいといったことであろう。自分は、みんなの戦果をみとどけ、かならず上聞に達するようにするから、安心していってくれ・・・

そして最後にまた、

1億国民にかわってお願いする。しつかりたのむ。

とあって涙ぐんだ。

二航艦、特攻に同意せず

一航艦の神風特攻隊は、10月20日の編成以来、各隊はそれぞれの基地から連日出撃したが、哨戒偵察機が少なく、天候不良にも禍されて敵を発見できず、特攻機による戦果は得られなかった。

大西長官は特攻隊を編成した当初、爆装13機から成る4隊で、敵空母の甲板を撃破し、1週間くらい航空機の発進を封じこめ、栗田艦隊のレイテ突入を可

能にすれば、「捷一号作戦」の戦勝の機は開ける。したがって、特攻隊はこの4隊と予備4隊（菊水・若桜・初桜・葉桜）で終わらせるという考えでいたようだ。

しかし、連日の出撃にもかかわらず、1隻の空母すら捕捉できず、さっぱり成果のあがらないうちに24日を迎え、栗田艦隊が敵機の攻撃圏内のシブヤン海に入る予定という状態に追い込められた。

長官は、特攻隊の機数を増さなければ、目的を達せられないと考えるようになった。

一方、10月22日の夕刻、捷一号作戦の成功のカギをにぎる基地航空部隊の主力として、第二航空艦隊（略称二航艦）350機が司令長官福留繁中将とともにクラーク飛行場群に進出してきた。

明るる23日の作戦会議において、一航艦の大西長官は、到着したばかりの二航艦にたいし、特攻隊への参加を強く申し入れた。

一航艦は、昭和19年9月以来、敵の猛攻をうけほとんど潰滅状態で、空戦に堪える戦闘機約30機、その他一式陸攻、天山艦攻および彗星艦爆を合わせ50機たらずである。

この兵力でまともな戦闘をすることはできない。強いてこれをなせば、敵の大機動部隊の前に、全滅するだけである。詳細は迫って説明するが、物心両面、あらゆる角度から利害を研究した末、一航艦は涙をのんで特別攻撃を敢行することに決した。

この戦況を考えると、もはや特別攻撃において、他によい攻撃法があるとは考えられない。二航艦もこれに賛同して、共に特別攻撃をやってもらいたい。

この要望にたいし、二航艦は同意しなかった。そこで大西長官は、その夜、ふたたび兵学校同期の福留長官（海兵40期）に、

二航艦が既定方針どおり、大編隊攻撃法によって進むことには、他の異議をさしはさむ筋合ではないが、おそらくこの練度をもってしては、攻撃効果の期待はおぼつかない。

一航艦の特別攻撃は必ず戦果をあげ得ると信ずるが、いかんせん機数はなほだ少ない。そこで二航艦の戦闘機の一部をさいて加勢してもらいたい。

という趣旨を熱心に申し入れた。福留長官は、いままで訓練してきた大編隊攻撃への期待と、特別攻撃法を採用した場合に考えられる搭乗員たちの士気の動揺を案じて、これにも同意しなかった。

敷島隊の大戦果

10月25日、5人の敷島隊は午前10時10分、マバラカット基地を発進した。体当たり攻撃隊の先頭に関行男、2番機に中野磐雄、3番機谷暢夫、4番機永峯肇、5番機大黒繁男。その後上方に、西沢広義飛曹長率いる直掩隊4機がいた。

敷島隊は、午前10時40分にレイテ湾上空にあらわれた。護衛空母「サンルー」など米空母の艦上では、乗組員は、



わが栗田艦隊との悪戦苦闘を脱してホッとしていた。関大尉が、目指す目標を発見したのは、まさにこのときであった。

米艦の乗組員は、まったく油断していた。特攻機は、レーダー警戒網をさけようとして、超低空で接近した。10時50分、攻1機、高速で接近中」という警報が、空母群につたえられた。10時53分、特攻機1機が「サンルー」めがけて轟音すさまじく突進してきたが、やがて急降下につつて、飛行甲板の中央線ちかくに激突した。10時56分、下部甲板のガソリンに引火した。

その2分後に大爆発がおこり、全艦をゆりうごかした。飛行甲板は、大きくはがれて吹っとんだ。火柱が300メートルの高さにも吹きあがった。11時に



は「サンルー」は大きな火のかたまりとな
って、それから 21
分後に沈没した。

「サンルー」が燃えているあいだに、他の特攻機は、うなりをたてながら、つ
ぎつぎに目標めがけて急降下していった。1機も的をはずさなかった。

護衛空母「キッカンベイ」「カリニンベイ」、「ホワイトプレーンズ」は、時速
数百キロの空からの鋼鉄が激突したので、爆発をおこして引きさかれた。5
機が、4隻の空母に命中した。空母1隻が沈没し、3隻は大損傷をうけた。



敷島隊の成功で、いままで特攻攻撃を指導していた人びとが抱いていた一つ
の不安が解消した。それは特攻機が降下につつたとき、パイロットが衝突
寸前に本能的に目をつぶり、目標からはずれるのではないか、という不安で
あった。

その夜、東京の放送は、大本営からの臨時ニュースを発表した。

「神風特攻隊の『敷島隊』は、本日 10 時 45 五分、スルアン島の北東 55

キロの海上で、空母 4 隻をふくむ中型航空母艦を基幹とする敵艦隊の 1 群を捕捉するや、必死必中の体当たり攻撃をおこない、2 機は空母 1 隻を撃沈、1 機は他の空母を炎上撃破、1 機は巡洋艦を撃沈せり」

大本營の発表があつて 2 日後の 29 日、朝日新聞は「神鷲の忠烈 万世に燦たり」の大見出しのもと、連合艦隊司令長官が神風特別攻撃隊敷島隊員の殊勲を全軍に布告した、との記事を掲載し、同じ紙面の解説記事で「機身もろとも敵艦に爆砕する必死必中の戦法は（中略）崇高の極致に達したものである。

（中略）覚悟する日を期してひたすらその日のために訓練を励むようなことは、果たして神ならざるものなしうるところであろうか」と特攻隊を神と讃え、軍報道部と一体になって“軍神ブーム”をあおった。



8-2 母艦航空隊、特攻出撃

米軍、レイテ島に上陸開始

10 月 20 日、アメリカ軍がレイテ島東海岸のタクロバンに上陸した。もちろん、アメリカ軍が最も攻略したかったのはマニラのあるルソン島だったが、そこには、何十万という日本軍がいた。そこでわずか 1 個師団（第 16 師団、約 1 万 8000 人）しかいないレイテ島に上陸し、ここで十分に準備を整えたうえでルソン島攻略に乗りだそうとしたのである。

この朝、レイテ湾に無数の艦隊が真っ黒になって押し寄せ、タクロバンからドラッグに至る海岸線約 30 キロ、奥行き 2 キロにわたって艦砲射撃を行い、さらに、艦載機が日本軍陣地を上空から探し出しては重爆撃を加え、午前 10 時、タクロバン方面に 2 個連隊、ドラッグ方面には 3 個師団、計 8 万 4 千名という大兵力を上陸させた。日本軍地上部隊は優勢な敵上陸部隊を、前面にしてじりじり後退するしか方法がなかった。

ルソン島を決戦の場と予想していた日本軍は方針を切り替えた。米軍の上陸地点タクロバンの反対側のオルモックに、ルソン島やミンダナオ島、あるいはセブ島から部隊を輸送船でつぎつぎに送り込んだ。少し前の台湾航空戦で、日本海軍航空隊がアメリカの空母艦隊を全滅させたという「ウソの戦果」を信じ、レイテ島に上陸した米軍はその時の敗残部隊であると確信したからであった。

アメリカ上陸軍の支援部隊は第三艦隊の第 38 任務部隊、空母 17 隻、戦艦 10 隻など駆逐艦まで含めると 93 隻。支援の陸上基地空軍機は 3200 機だった。

連合艦隊の特攻戦略

航空部隊が名ばかりとなってしまった今となっては、残された作戦は、残っている戦艦や重巡洋艦で編成した艦隊（栗田艦隊と西村艦隊）を、直接アメリカ軍が上陸したレイテ湾に殴り込ませ、そこに集まっているはずのレイテ湾上陸支援艦隊を攻撃し、刺し違える作戦であった。すでに空母艦隊が名ばかりのものになってしまった今となって、連合艦隊に残された作戦はこれしかなかった。

この作戦をめぐる、プランをたてた連合艦隊の作戦主務参謀神大佐と栗田艦隊小柳参謀長は、この“殴り込み作戦”をめぐる次のようなやりとりをしている。

小柳参謀長

この計画は、敵主力の撃滅を放棄して、敵輸送船団を作戦目標としている

が、これは戦理の常道からはずれた奇道である。われわれはあくまで、敵主力の撃滅をもって第1目標となすべきものと考えているが？

神作戦参謀

敵主力の撃滅には、機動部隊の航空兵力が必要です。しかし、サイパン攻防戦で大打撃を受けた機動部隊と航空隊の再建には、少なくとも半年の日時が必要です。

いまは、その余裕がまったくありません。同時に、敵がつぎの目標としているところがフィリピンであることは明白です。そこでフィリピンの基地航空兵力と呼応して、第1遊撃部隊の全力をもって敵上陸船団を撃滅していただきたい。それがこの作戦の主眼なのです。

小柳参謀長

よろしい、敵の港湾に突入してまで輸送船団を撃滅しろというのなら、それもやりましょう。しかし、いったい連合艦隊司令部は、この突入作戦で水上部隊を潰してしまってもかまわないという決心なのですか？

神作戦参謀

フィリピンを敵にとられてしまえば、南方は遮断され、日本は干上がってしまいます。そうなっては、どんな艦隊をもっていても宝の持ち腐れです。どうあっても、フィリピンを手放すわけにはいきません。したがって、この一戦で連合艦隊をすり潰すようなことになっても、フィリピンを確保することができるのなら、あえて悔いはありません。国破れてなんの艦隊やある、殴り込みあるのみです。これが長官のご決心です。

平野二飛曹、小沢オトリ艦隊とともに大分沖を出撃

10月20日朝、連合艦隊司令部は「捷1号作戦の決戦要領」を発令した。その時点の編制および各隊の任務は次のようなものであった。

第1遊撃隊 司令長官	戦艦（武蔵、大和、長門、金剛、金剛 榛名）	北方からタクロバン方面に突入し、まず、所在海
---------------	-----------------------	------------------------

栗田健男中将	重巡（愛宕、高雄、摩耶、鳥海、妙高、羽黒、熊野、鈴谷、利根、筑摩） 軽巡（能代）4コ駆逐艦等	上兵力を撃滅、次いで敵攻略部隊を殲滅する。
第2遊撃隊 司令長官 志摩清英中将	重巡（那智、足柄） 軽巡（多摩、木曾、阿武隈） 3コ駆逐隊等	南方から栗田艦隊と同時にタクロバン方面に突入する。
機動部隊 司令長官 小沢治三郎中将	三航戦 653 空 空母（瑞鶴、瑞鳳、千歳、千代田） 四航戦 634 空 航空戦艦（伊勢、日向） 空母（隼鷹、龍鳳）	囷となって敵機動部隊を北方に牽制し、栗田艦隊のタクロバン方面突入を容易にする。

注 四航戦については飛行機および搭乗員不足のために、航空戦艦には飛行機を搭載しておらず、また、空母（隼鷹、龍鳳）は出撃しなかった。

小沢艦隊（機動部隊本隊）の役割は、アメリカの空母機動部隊を北方におびき寄せ、わざと攻撃させて時間を稼ぐことであった。その間に栗田艦隊と西村艦隊のレイテ湾殴り込みを成功せるという、いわゆる囷の役に徹することである。

10月19日一航戦は別府湾にて飛行機の收容を開始し、20日、大分沖を出撃した。小沢艦隊の総勢は、4隻の空母と2隻の戦艦と巡洋艦、駆逐艦を含め18隻の機動部隊である。收容した飛行機数は次の通りであった。

瑞鶴＝零戦28、爆装零戦16、天山14、彗星7、合計65機（正規搭載84機）。

瑞鳳＝零戦8、爆装零戦4、天山5、合計17機（正規搭載30機）。

千歳＝零戦8、爆装零戦4、天山6、合計18機（正規搭載30機）。

千代田＝零戦8、爆装零戦4、九七艦攻4、合計16機（正規搭載30機）。

計116機。

平野恵一飛曹は、瑞鳳に乗艦した。池田一飛曹も乗艦の予定だったが間に合わなかった（前述）。

平野一飛曹、ルソン島へ

24日午前11時15分、索敵機は敵の1艦隊が、ルソン島北東端エンガノ岬の沖合を北進しつつあるとの確報を伝えた。

11時45分、小沢長官は帰艦「瑞鶴」に“皇国の興廃此の一戦に在り”を意味する「Z旗一流」を掲げさせ、艦隊の針路を70度として攻撃隊の発進を開始した。攻撃隊の総兵力は、計画の76機が、発艦取り止め、または引き返した等の理由によって次の58機に減少していた。

零戦30機（瑞鳳8、千歳7、千代田5）、零戦爆装20機（瑞鶴11、瑞鳳3、千歳2、千代田4）、天山艦攻6機（瑞鶴）、彗星艦偵2機（瑞鶴）

攻撃隊は、「瑞鳳、千歳、千代田」から発進するものと、「瑞鶴」から発進のものとの2コ集団に分かれて、12時5分に空母上空を発進した。

直掩隊指揮官中川健二大尉の率いる「瑞鳳」らの隊（天山4・零戦19、爆装零戦9計32機）は、天山誘導機のを、3コ編隊の爆戦隊が高度4200メートルで進み、その上空800メートルに、爆戦隊を掩護するようにして零戦隊が編隊を組んでいた。視界は25カイリ、進撃路の行く手には1000～1500メートルの高さに雲が大空の大半を覆っていた。

1時間も進撃した13時5分、攻撃隊はF6F戦闘機約20機に遭遇した。敵は雲の手前で待ち受けていた。編隊の右側前方に占位していた直掩、制空の零戦がまず敵編隊に突入、空戦に入った。戦闘は20分間にわたり続けられ、この間、爆装の零戦も空戦を交えた。

大藤三男大尉は3機（うち1機不確実）、中川健二大尉、小平好直、横川一男飛曹長、鈴木正二上飛曹、長谷川達一飛曹は各1機計8機の撃墜を報告した

この間、爆戦隊は敵空母を求めて付近海面を捜索したが発見することができず、攻撃隊の大部分は北部ルソン島に向かった。平野一飛曹たちが母艦に戻らなかったのは、出撃命令と同時に「もし、天候等の状況によって各母艦に

帰着することが困難だと判断した場合は、ニコルスまたは他の飛行場に不時着し、以降、そこの司令官の指揮下に入って戦え」と命令されていたからだった。

機数の上でもまた練度の上でもあまりにも劣勢な艦上機を、いたずらに敵の餌食にするよりは、陸上基地に送って幾分でも働かせることが海軍全体の利益になるとの、小沢長官の判断によるものであった。

この攻撃で零戦 6、爆戦 1、天山 2 機が未帰還となり、零戦、爆戦、天山の各 1 機計 3 機が空母に帰投した。なお、空母に帰投した、たった 1 機の零戦大藤三男大尉は、ふたたび上空直衛に飛び上がり、未帰還となった。

平野一飛曹は中川隊長らとともにルソン島最北端のアパリ飛行場に着陸した。「空母零戦隊」の著者岩井勉氏（当時海軍少尉）も最後の 27 機目としてアパリに着陸した。彼は、瑞鶴から発艦したのだった。

中川隊のその後の行動について、岩井勉氏は「空母零戦隊」に次のように書いている。

このアパリ飛行場は陸軍が占領していたが、その陸軍の 1 准尉がきて、飛行場を 1 キロ離れると敵性を帯びた住民ばかりであり、ここへ飛行機が着陸したとみるや、その晩は必ず夜襲があると説明してくれた。そして、ガソリンはたくさんあるから自分たちで積んで、今日のうちにどこかほかの飛行場へ飛んでいってもらいたい、と言った。

海軍側の最先任者は、見わたしたところ中川大尉だったので、チャートを広げ、中川大尉と協議した結果、ここから約 60 哩（約 110 キロ）南の山中にツゲガラオという小さな基地があつて、海軍が占領しているらしいので、そこへ行くことに一決し、ドラム缶をゴロゴロ転がして燃料を搭載し、完了したものから 2 機、3 機と、ツゲガラオに向け出発した。

ルソン島は目の覚めるような緑一色の大陸である。上空から見ると、緑の

草原ばかりで、どこが飛行場か区別がつかない。幸い先に出発した者が着陸していたので、飛行場であることだけはわかったが、緑一色のため、飛行場の端がわからいままに着陸した。

夜に入り夕食をご馳走になった。その食事のまずさには一同が驚かされた。今までにこんなまずい食事を食べたことがない。主食は粟の団子のようなかたまりで、汁の実は木の葉である。木の葉の灰汁のために、おつゆの色が薄茶色をしているだけで、醤油の味も塩の味もない。献立はただそれだけである。見ていると、ここの基地隊員は文句一つ言わずに、黙々としてこれを食べている。私たちはこの状況を見て彼らが気の毒で、ぐっとこみ上げてくるものがあった。

平野恵は「航空弁当は旨かった。巻きずし、いなり寿司、ときには豪華なぼた餅や大福など、飛行兵には主計科員が心を込めてつくってくれた。」と回想する。

昭和 19 年 11 月 15 日作成の「653 空戦闘詳報第 1 号」（自昭和 19 年 10 月 20 日 至昭和 19 年 10 月 25 日 捷号作戦（比島沖海戦））から、10 月 24 日についての記録から抜粋する。各隊の編成表は、平野一飛曹の瑞鳳隊のみ抜粋した。

10 月 24 日 攻撃隊編成表

誘導隊	小松正文中尉以下	5 機（1 機 3 名搭乗）
特攻隊	遠藤徹夫大尉以下	28 機
直掩隊	中川健二大尉以下	32 機
内訳	瑞鶴	井上 至中尉以下 8 機
	瑞鳳	中川健二大尉以下 8 機
	千歳	大藤三男大尉以下 8 機
	千代田	田淵幸輔大尉以下 8 機

計 65 機の出撃後の行方は次のとおり。

・比島へ向かった 40 機

- ・ 上空直掩機として残った 7機
- ・ 故障により不時着水 1機（駆逐艦に救助される）
- ・ 故障により不参加 1機
- ・ 未帰還 7機
- ・ 行方不明 8機
- ・ 不明 1機

直掩隊のうち、瑞鳳隊の編成表

指揮官	小隊	機番	氏名	記事
中川健二大尉	1	1	大尉 中川健二	比島ニ向フ
		2	上飛曹 鈴木正一	同
		3	一飛曹 平野 恵	同
		4	一飛曹 森倉康太	未帰還
	2	1	飛曹長 横川一男	比島クラークニ向フ
		2	上飛曹 藤島博之	比島ニ向フ
		3	一飛曹 中矢長藏	同
		4	飛長 今村 明	

行動記録

12:05 母艦上空発進

13:05 グラマン（F6F・F5F）約20機と交戦、8機以上撃墜

16:00 アバリ飛行場着

17:00 ツゲガラヲ飛行場着

中川隊、ニコルスからバムバム基地へ

「10月25日午前10時、中川隊は、『中川大尉の指揮せる戦闘機隊は、急ぎマニラの第一ニコルスへ進出すべし、彼我ただ今決戦中』との電報を受け、可動機15機を率いて離陸した。ルソン島の中央を横断、2時間余りで、マニラ市街南方の海岸に近い第一ニコルス飛行場へ無事着陸した。

ニコルスには大勢の人間がいたが飛行機は1機もなかった。すべて特攻機として出撃したあとだった。その晩の夕食は、ツゲガラオの食事とは違って変わってのご馳走で、主食も赤飯であった。同じルソン島でもこんなに食事に差があるものかと、空いた腹に一生懸命つめこんでいるとき、横に坐っていた中川大尉が、

『この赤飯には毒があるぞ。なにかを予言しているようだ』

と言った。昼間聞いた特別攻撃隊についての言葉が思い出される」(引用前掲書)

平野一飛曹、草原に不時着

10月26日、中川隊は掩護隊としてレイテ島方面に出撃した。平野一飛曹は中川隊長の3番機として出撃したが、途中高度4000メートルを飛行中にエンジンが止まった。滑空飛行を続けながら、地図上で不時着可能な場所を探した。地上はどこを見ても緑一色の草原である。やっと、椰子林の中に飛行場の跡らしきものを見つけた。背丈よりも高い草むらで覆われている。その上を滑るように着陸した。人っ子ひとりいない。主翼に上がって辺りを見回すと1棟の建物が見えた。近づいて見ると蜘蛛の巣のはった便所だった。

獣道を歩いていると、向こうから鉄砲を担いだ男がやってくる。拳銃を構えて近づくと、向こうも近くに不時着した陸軍機の搭乗員だった。近くの町の憲兵隊に案内してくれた。憲兵隊が、不時着機のガソリンを自動車用に抜き取ってくれ、無線機や7ミリ機銃、20ミリ機銃なども譲ってくれとねだられた。20ミリ機銃だけは軍の機密に属するからと断わり、涙ながらに飛行機に火を点けて焼き払った。よく山火事にならなかったものだと平野一飛曹は、後になって思った。

憲兵隊の世話で2、3日、町のホテルに泊まった。ホテルといっても現地人用のもので間仕切りも恰好だけ、話し声も筒抜けである。物騒なので拳銃を枕元において横になった。11月3日、憲兵隊のトラックに便乗させてもらっ

てニコルス基地に入った。

この日、中川隊は敵を発見することができず、バムバム基地に向かった。ここには島づたい進出してきた 653 空の先発隊が到着しているはずだった。

ゲリラの脅威

某日、平野たち 4 機は、「ルソン島南部レガスピー飛行場に行き、修理の終わった零戦 4 機を受領してこい」と命令され、輸送機でバンバン基地を出発した。しかし、エンジン不調で、いったん、マニラのニコルス飛行場に着陸、修理の終わのを待っていたが、1 時間もしないうちに、敵グラマンが来襲、銃撃を浴びて輸送機は炎上し、レガスピーに行きは取り止めになった。

「もし、修理が終わってレガスピーに向かっていたら、待ち伏せ攻撃に遭って、射ち落とされていたら」と平野は思った。

当時、基地周辺ではゲリラが鵜の目鷹の目で日本機の離着陸を監視し、そのつど、無線で米軍に報告していた。

10 月 24 日、平野たちがアパリ飛行場を早々に追い立てられたのも、基地周辺にたむろするゲリラの目を恐れてのことだった。

マニラに帰った平野に対して、「よくもゲリラにやられなかったなあ」と隊長が喜んでくれた。

連合艦隊の最後

10 月 25 日午前 6 時 10 分、小沢長官は直衛戦闘機だけを残し、攻撃の余力の全部、すなわち戦爆機 5、攻撃機 4、爆撃機 1 を比島のツゲガラオ基地に飛ばせてしまった。

10 機は翼を上下にたたいて「さようなら」の合図も淋しく飛び去った。

果たして、8 時 15 分ごろ、120 機が 2 隊に分かれて、小沢本隊の上に殺到した。空襲は、午後 3 時まで反覆され「瑞鶴、瑞鳳」などの空母全部と、軽巡

「多摩」、駆逐艦「初月」など7隻が沈められた。

「瑞鶴」は真珠湾攻撃に参加した精鋭の航空母艦であった。瑞鶴の喪失とともに、日本機動部隊は、その歴史の幕を閉じたのであった。

栗田艦隊と西村艦隊も24、25日のシブヤン海海戦で戦艦「武蔵」沈没、スリガオ海峡海戦で戦艦「扶桑、山城」重巡「最上」ほか沈没、さらにサマール沖海戦で重巡「鳥海、筑波、鈴谷」ほか沈没して再起不能となった。航空部隊を欠き丸裸同然になった連合艦隊の末路は惨烈をきわめた。

囷となった小沢艦隊は、予定どおりハルゼー艦隊を北上させ小沢艦隊を攻撃させたから、囷の役は立派に果たしたのであったが、肝心の栗田艦隊がレイテ湾まで80キロの地点に達し、あと1時間も航行すれば戦艦大和の主砲（最大射程40キロ）がレイテ島の敵陣へ届くという地点で、栗田長官は突然、「艦隊面舵一杯北進（突入中止、反転して北へ向かうの意味）」と命令した。“謎の反転”といわれた。右は沈みゆく空母「瑞鶴」



8-3 二航艦、特攻に同意

福留長官、体当たり攻撃を決意

10月18日、「捷一号作戦」が発動され、翌19日には、台湾に展開していた二航艦にフィリピンに進出するよう発令されたが、二航艦の保有機数は395機、うち、実働機数は、その6割にも満たない235機に過ぎなかった。しかも、実働機数の大半にあたる75パーセントは戦闘機176機であったから、艦爆や艦攻にくらべて攻撃戦力は極めて低かった。

10月25日、福留長官は、ラモン湾の敵大部隊に対して190機を繰り出して攻撃したが、湾上空の厚い雲の壁に阻まれ、長官が主張する編隊集団攻撃はまたもや失敗に終わった。そして、この日、マバラカット基地から発進した第一神風特別攻撃隊敷島隊、隊長関行男大尉以下5名がレイテ湾沖で機動部隊に突入し、大きな戦果を上げた。

二航艦の大編隊による作戦が、損失が多く戦果が乏しいのに対して、一航艦の特攻隊は、行き詰まった戦局に光明を見いだした。大西長官は報告の電報を打つようにいいつけて、福留長官のいる個室に行った。

大西長官は個室の机をはさんで、特別攻撃について、つぎの意見を述べた。

「特別攻撃隊以外に攻撃法のないことは、事実によって証明された。この重大な時機に、基地航空部隊が無為に過ごすことでもあれば、全員、腹を切ってお詫びしても追いつかぬ。二航艦としても、特別攻撃隊を決意すべき時だと思う」

と翻意をうながした。福留長官の心配する士気の問題については、確信をもって保証し得ると断言した。福留長官も自分の採った戦法がもはや通用しないことを悟り、ついに体当たり攻撃の実施を決意した。

午後2時を過ぎたころ、一航艦、二航艦司令部の幕僚と、司令部付の全員が、

2階の作戦室に集合を命ぜられた。居並ぶ参謀たちの前に、福留長官と大西長官が現われた。大西長官から、

「ただいまより第一航空艦隊と第二航空艦隊は合体して、第一連合基地航空部隊を編成する。福留長官が指揮をとり、私は幕僚となる」

と説明した。このときはまだ、二航艦も特別攻撃をやるという話はなかった。

17時30分、南西方面艦隊司令長官三川軍一中将から、第一連合基地航空部隊編成に関し、つぎの電令が発せられた。

「NSB 電令作第六九六号（25日 1730）

一、在菲島第五、第六基地航空部隊全兵力（各指揮下兵力を含む）を以て第一聯合基地航空部隊（一 GFCB）を編成、同部隊指揮官を第二航空艦隊司令長官とす

二、第一聯合基地航空部隊は全力を揮って菲島東方海面残敵を撃滅すべし」
（NSB は南西方面艦隊司令部の略記号）

大西幕僚長の決意表明

大西長官は、同夜幕僚集合が終わると、クラーク地区にある 761 空の士官宿舎で猪口参謀たちと 30 分ほど打ち合わせをしたあと、一・二航艦の指揮官たちの集まっている士官室に行った。

机や椅子が片づけられていたところに、各航空隊の司令以下、飛行隊長以上の指揮官が待っていた。大西長官が部屋に入ると、薄暗い電灯の下で、立ったままの指揮官たちが、長官を中心にかこんだ。長官は厳しい顔をして話しはじめた。

「本日（10月25日）、第一航空艦隊と第二航空艦隊は合体して、第一連合基地航空部隊が編成された。長官は福留中将、自分は幕僚長として長官をたすける。作戦参謀に二航艦の柴田大佐、特攻の指導実施参謀に猪口中佐を任命する。各隊とも協力するよう。

知っているとおりに、本日、神風特別攻撃隊が体当たりを決行し、大きな戦果を挙げた。自分は、日本が勝つ道はこれ以外にないと信ずるので、今後も特別攻撃をつづける。このことに批判は許さない、終わり」

大西中将は強い力のこもった言葉で訓示した。30名から40名いた指揮官は、皆シーンとしていた。聞いている指揮官たちは、大西中将の言葉に反発している顔つきであった。

一航艦のように、前線を渡り歩いて、行くところまで行ったところで、初めて体当たりも止むを得ないという気運がわいてくるのではないか。

201空のときは、みな一様に素直に受け入れた感じであったが、二航艦の場合は、体当たりをせざるを得ないという雰囲気から少しづれがあったようだ。戦場で苦しみぬいた一航艦と、無傷の二航艦との間にあるずれを埋めるため、大西中将はあえて強い決意を示したのだらうと、同席していたある幹部は語っていた。

二航艦、第二神風特別攻撃隊を編成

第六基地航空部隊の零戦は、250キロ爆弾を搭載できるように改修されていなかった。そこで、すぐに搭載できる艦爆で体当たり攻撃をすることにして、至急、攻撃隊の編成にかかった。

艦爆の主力は北東方面艦隊 701 空所属のもので、大部分が旧式の九九艦爆であった。速さも航続距離も、見劣りのする飛行機で、新しい彗星艦爆に代替えしつつあった。最初の特攻に 701 空が選ばれたのも、九九艦爆が主力であったことが理由のひとつと思われる。

こうして編成された二航艦の体当たり攻撃隊は、第二神風特別攻撃隊（略称「第二神風特攻隊」）と命名された。第二神風特攻隊は、701 空の攻撃第 5 飛行隊長山田恭司大尉を隊長とし、忠勇・義烈・純忠・誠忠・至誠（以上 10 月 27 日編成）、神武・神兵・天兵（以上 10 月 29 日編成）計 8 隊で編成された。

各隊は体当たり攻撃 3～4 機（彗星の編成 4 機、九九艦爆の編成 3 機）、および直掩・戦果確認機 2 機で 1 組とするのを標準とした。各隊は編成当日から戦闘行動に入った。

この第二神風特別攻撃隊は彗星 8 機、九九艦爆 5 機の合計 11 機で、戦艦 1 隻中破、巡洋艦 1 隻大破、輸送船 2 隻大破の戦果をあげた。このあと、特攻隊は続々と出撃していった。いや出撃する飛行機のほとんどが特攻機であったと言っても過言ではなかった。

特攻隊員の編成と取り扱いに関する指針

10 月 27 日、第一連合基地航空部隊参謀長になった大西中将は、特攻隊の編成とその隊名のつけ方、隊員の取り扱い等に関する指針をさだめ、特攻隊員に正式に編入された者以外、みだりに体当たり攻撃を実施しないように指令した。

これらは、作戦にかかわる重要な情報であったので、「軍機」「軍極秘」「人秘」等の扱いとされていた。したがって、隊員同士をはじめ、報道班員にも伝わらなかった。

また、この公文書は、大本営海軍部、海軍省、連合艦隊、海軍航空本部等へも送付されている。このことは、神風特別攻撃は大西中将の発想ではあったが、その実施は海軍上層部も認め組織的に行なわれたことを示すものである。

第一聯合基地航空部隊機密第一号

軍極秘 人秘 昭和 19 年 10 月 27 日 第一聯合基地航空部隊参謀長
関係各航空戦隊司令官
関係各航空隊司令 殿

神風特別攻撃隊の編成ならびに同隊員の取扱に関する件、依命申進首題の件に関し、次のように定める。

- (一) 神風特別攻撃隊は爆装体当たり攻撃隊および直接掩護ならびに戦果確認に任ずる隊で構成し、1 攻撃単位の編成標準を概ね次の

通りとする。

爆装体当たり攻撃隊、爆装戦・艦爆または水爆 3 ないし 4 機。

掩護、ならびに戦果確認部隊、艦戦または艦偵 2 ないし 3 機。

(二) 神風特別攻撃隊の隊名は、その編成時期ならびに爆装の機種により、第一、第二神風特別攻撃隊と呼称し、さらに各攻撃単位に対し、特別隊名を付与する。この隊名は、第一聯合基地航空部隊指揮官が之を命名する。

(三) 神風特別攻撃隊員の取扱い

- ① 隊員の官職氏名は事前に発表することなく、任務を完遂した者のみについて、事後に発表するものとする。
- ② 一攻撃単位全機末帰還のため状況不明な場合には、敵情ならびにその隊の行動経過により、任務を完遂したと推定しうる者には、①項と同じ取扱いとする。
- ③ 直掩隊がその任務遂行中自爆したと推定しうる者には、①項と同じ取扱いとする。

(四)、(三) 項による正式発表（報告は、各司令官または司令の報告に基づき、認定の上、第一聯合基地航空部隊司令部において之を行う。

写送付先

聯合艦隊参謀長	海軍省軍務局長
南西方面艦隊参謀長	海軍省人事局長
大海参一部長	海軍航空本部長

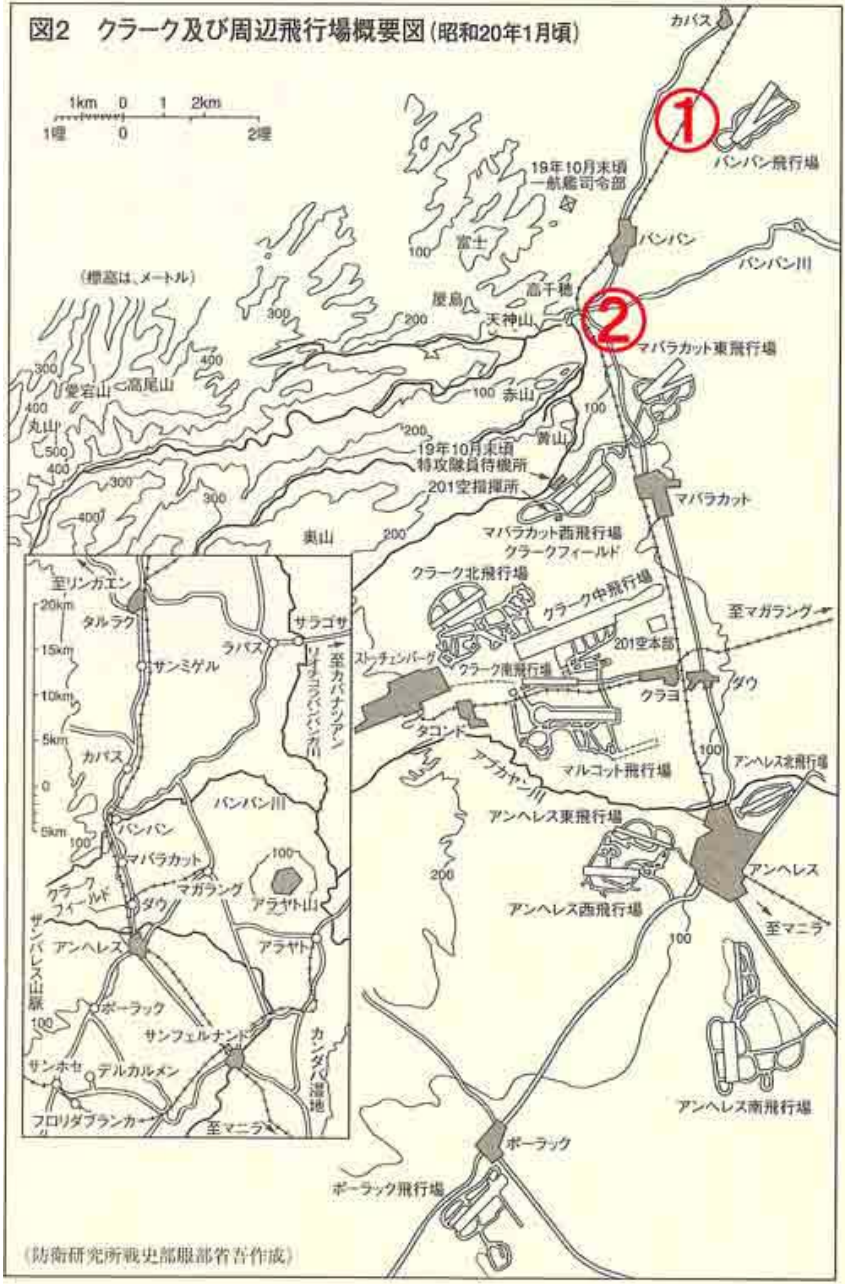
8-4 敏美、特攻への道

10月22日 敏美、フィリピンへ

10月22日夕刻、台湾にあった二航艦（第六基地航空隊指揮官）の福留司令長官は、現有機戦闘機126、攻撃機70計196のうち主力を率いてマニラに進出、残りの大半は翌23日に進出した。敏美もこの一員としてクラーク基地群のバムバム基地に着陸した。

クラーク基地はマニラ北方約110キロ、かつて米軍が建設した極東最大の空軍基地であった。しかし開戦後、リングエン湾に上陸した陸軍により接收され、海軍の手によって南北約30キロの範囲にバムバン、マバラカット東・西、マルコット東・西、アンヘレス南・北、クラーク南・北の飛行場が増設され、南方戦線に対する重要基点基地とになっていた。

サイパン陥落後は米軍の次の目標として狙われ、昭和19年7月には初空襲を受け、米軍当時からの豪華な宿舎、諸施設等は破壊され、中央飛行場格納庫裏の広大な広場は「飛行機の墓場」と化し、無数の日本機の残骸が山積みされている状況であった。（根本正良『クラーク基地と硫黄島へ旅』（太平洋戦跡慰霊総覧 1998年12月）



①は敏美が最初に降りた飛行場 ②が最後の出撃地

クラーク基地群の東には、マニラ富士と呼んでいるアラヤト山がある。平野の中にぽつんと一つある標高1500メートルくらいの山であるが、2000人くら

いのゲリラが籠もっており、日本軍の動静を逐一、米軍に報告していた。基地の航空隊は、この山に対して試射、爆撃訓練を行っていた。

10月24日 池田一飛曹ら、653空先発隊と合流

この日、母艦の出撃に間に合わず島伝いに飛んできた池田速雄一飛曹、白浜芳次郎飛曹長、志村雄作一飛曹、杉山光平一飛曹の4機がバムバム基地に着陸した。昨日台湾から移ってきたばかりの石森中尉、敏美らの先発隊と再会、お互い、「よく生きていたなあ」と、肩をたたき合い、ことばを交わし、笑顔で応えた。しかし、すでに653空の半数は未帰還となっていたのだった。

池田たち一行は、母艦が出撃した翌21日、大分基地から松山基地に立ち寄り、陸軍の高官が搭乗した一式陸攻の護衛隊として松山を一路南下、途中、沖縄小禄飛行場に着陸して燃料の補給を行い、次の中継地台湾南端の台高山基地を経由して飛来したのだった。

途中、屋久島上空で山川兵曹機がエンジンの故障で鹿屋基地へ戻るというトラブルがあったものの、一式陸攻の輸送護衛という任務は無事に終了した。

池田は、松山基地で、「出撃前に、故郷の両親に会ってこい」といわれ、松山市内までトラックで送ってもらった。池田の生家は松山市の郊外にある。突然、飛行服姿で現れた息子に両親は驚いた。父親が魚屋に走ったことから、池田の一時帰宅が田舎の町中に知れ渡った。

久しぶりに親子水入らずの一夜を過ごした翌朝、帰隊の準備をしている池田のもとに、数十人の国防婦人会の人たちが見送りに来た。松山基地の滑走路は、周囲が畑となっており境界には2本の鉄線があるだけだった。母が手の届くところまでやってきた。握りしめた手が温かく震えていた。母は手も振らず、タオルを口にくわえたままじっと息子を見送った。そのときの母の顔が、いつまでも池田の脳裏から離れなかった。

10月24日 ラモン湾東方の米機動部隊総攻撃

24日未明、米空母部隊第三群シャーマン隊（正規空母2隻、軽空母2隻基幹）が、マニラの東方250カイリに接近した。敵機動部隊の攻撃から栗田艦隊を掩護するため、二航艦の福留中将はこの敵空母部隊に対し総攻撃を命令した。

第1次攻撃集団が午前6時30分から7時にかけて、クラーク地区の各飛行場から出撃した。攻撃兵力の主力は九九艦爆36機と爆装零戦6機から成り、その制空隊として零戦54機、紫電21機を252空飛行隊長小林實少佐が、艦爆隊の援護隊として零戦51機を203空飛行隊長鴛淵孝大尉が率いていた。

艦爆隊をなかにはさんでその前後に制空隊と援護隊がいた。援護隊は指揮官機がエンジン不調で後方に遅れていた。ポリロ島の南端にさしかかった頃、艦爆隊は北東に進路を転じた。ところが、艦爆隊の後方を進撃中の援護隊は、そのまま直進し、制空隊の後方を進む恰好となった。こうして1団となって進撃するはずの第1攻撃集団は、各隊連携を欠いたまま離れ離れの位置で、F6F敵戦闘機群に襲われた。

援護隊零戦51機はマニラの75度140カイリ付近で、F6F約50機とそれぞれ空中戦に入り苦戦した。この戦闘で、制空隊は7機（うち不確実1）の撃墜を報じたが、小林少佐を含む11機が未帰還となった。援護隊は11機の撃墜を報じたが、味方機2機を失っている。

艦爆隊はF6F約100機と遭遇し、被害が続出し、攻撃を取り止めてバラバラになり基地に辿りついた。これと前後して、天山隊11機もまた、その進撃途上でF6F数十機と遭遇し、進撃を阻止されている。

その頃、主力とは別行動をとった彗星12機の隊が、敵空母を捕捉しこれに必殺の1撃を加えて空母に直撃弾1、巡洋艦1隻撃破と報じた。米側資料によれば、彗星1機の250キロ爆弾が軽空母「プリンストン」の飛行甲板中部に命中した。その彗星は撃墜されたが、爆弾は格納甲板と中甲板の間で炸裂、たちまち火災を起し、その後、味方艦の魚雷で処分された。この救援のため近

接中巻き添えを食った軽巡「バーミンガム」が、乗員 650 名が死傷し、戦列を離れている。彗星隊は 5 機未帰還となった。

前年夏に米太平洋艦隊が高速空母機動部隊を編成して以来、日本海軍航空部隊が実際に空母を沈めたのは、この「プリンストン」が初めてである。

一方、第 1 次攻撃で敵空母の捕捉に失敗した第 1 次攻撃集団主力は、午後再び出撃した。零戦 22 機（指揮官鴛淵大尉）、九九艦爆 25 機で再編成され、ラモン湾東方の敵機動部隊を目指して、クラーク各基地から発進した。

攻撃隊は基地から 80 カイリ進撃しただけで、ラモン湾上空の厚い雲の壁に阻まれ、再び攻撃を断念せざるを得なかった。かくて、福留長官が念願した編隊集団攻撃は失敗に終わり、このことが二航艦もまた特攻開始を決意させることになった。

昭和 19 年 10 月 24 日

「ラモン」湾東方海上敵機動艦隊攻撃並びに艦爆隊・雷爆隊直掩

石森中尉	1	石森中尉	1	1	中尉 石森 學	
				2	上飛曹 近藤武春	未帰還
				3	二飛曹 石田正一	同
			2	1	飛曹長 中仮屋国盛	
				2	上飛曹 中村義信	
				3	飛長 太田吉五郎	
				4	飛長 志賀敏美	

経過

0716 零戦 7 機、バムバム基地発進。

0845 敵戦闘機 F6F 約 100 機ノ邀撃ニ遭イ交戦ヲ行ウモ、艦隊ヲ攻撃セズ帰投。

戦果

戦闘 304 飛行隊（零戦 16 機）、同 634 飛行隊（零戦 28 機）ト協同ニヨリ、F6F 11 機ヲ撃墜ス。未帰還 2 機。

第一遊撃隊上空哨戒（一次）

			1	1	飛曹長 小平好直	
			1	2	上飛曹 早川 寿	不時着大破

この日、マバラカット基地から、第一神風特別攻撃隊敷島隊、隊長関行男大尉以下5名が、レイテ湾沖に向け、機動部隊に突入した。

10月26日 中川隊長、653空先発隊と合流

この日、中川隊長が10数機の戦闘機を引き連れバムバム基地に飛んできた。石森中尉以下653空の戦闘機隊員は、歓声を上げて迎えた。

中川隊長は、10月14日敏美たちを率いて沖縄に進出したあと大分基地に戻り、10月20日、ルソン島に向かう小沢機動艦隊の直掩隊長として、平野一飛曹らを率いて出撃したのだった。

24日、空母瑞鳳を発艦、アパリ経由ツゲガラオ飛行場着。25日ニコルスへ進出、そして26日、ここバムバム基地への途中で、平野一飛曹機はエンジン・トラブルを起こして、どこかの地に不時着したこと等々、これまでの戦況と、何人かの戦死者の名が告げられた。

ここに、3カ月ほど前、中川隊長を中心として編成された653空戦闘機隊20数名の顔触れが揃ったのであった。653空戦闘機隊は、大分基地出撃以来、半数が未帰還になったとはいえ、ここバムバム基地の花形となった。

10月27日 653空戦闘機隊に、特攻直掩の命令

同10月27日、中川隊長は、数少なくなった653空戦闘機隊の生存者を集めて次のように訓示した。

「本日より、わが隊に特攻機の掩護機としての要請が有り次第出撃する。1機1艦、特攻の使命は重い。その重い使命を達成するため、群がる敵機を排除し、特攻機を敵艦突入まで援護するのが、われわれの使命である。艦隊戦闘機隊の伝統と誇りを持って存分に力を発揮して、特攻機の援護に当たるのだ」

と。中川隊長の訓示は力強く悲愴感が滲み出ていた。隊員は黙ってうなずいた。

特別攻撃隊は体当たり機 3、直掩機 2 の計 5 機によって編制するのを標準とした。攻撃隊を小さくしたのは、機数が多ければ大艦隊を仕とめることはできるが、小機数のほうが、敵の防御戦闘機をまいて逃げることもでき、また雲塊や悪天候のなかでも行動が自由だからである。

直掩隊の任務は体当たり機の護衛である。必ず迎撃してくるであろう敵戦闘機群を回避しながら攻撃隊を目標地まで掩護すること、万一、攻撃されれば爆装隊の盾となり、弾は受けられるだけ受けて、その間に、いくらかでも爆装機を敵に近づけて、特攻攻撃を成功させなければならない。

万が一、直掩の 1 機が自爆すれば、次の 1 機が今自爆した僚機の位置に入って爆撃機を護らなければならなかった。そして、爆装隊の戦果をよく確認して帰還することだった。

たとえ、敵の戦闘機が背後に現れたとしても、それを攻撃するために体当たり機を裸にすることは許されなかった。かりに、攻撃したとすると、体当たり機と直掩機は瞬時に離れ離れになってしまい、元の態勢に戻ることが困難になってしまうからだ。ここに直掩戦法の難しさがあり、戦闘機搭乗員にとっては、重苦しい任務であった。

この掩護任務には、優れた操縦技量と判断を必要としたので、第 1 級のパイロットが任命され、彼らは、たとえ体当たり攻撃を志願しても決して許可されなかった。

10 月 28 日 ドラッグ飛行場攻撃

28 日、敏美の出撃の記録なし。中川隊長以下 5 機（中川隊長、小平好直飛曹長、中仮屋国盛飛曹長、中村義信兵曹、杉山光平兵曹）がレイテ湾のドラッグ飛行場銃撃に出撃した。ここは 20 日、米軍が上陸するまでは海軍の設営し

た飛行場だった。

中川隊長らの編隊は、他隊と協同で、ドラッグ飛行場に着陸した直後の F6F を 40 機以上銃撃して炎上させ、飛行場を火の海と化した。また、数機の敵機を撃墜、大戦果を挙げ意気揚々と帰還した。

昭和 19 年 10 月 28 日

ドラッグ飛行場攻撃

1	中川健二大尉	1	大尉 中川健二	P38 1機撃墜、被弾 5 発
		2	飛曹長 中仮屋国盛	F6F 1機撃墜、協同 1機撃墜
		3	飛曹長 小平好直	他隊と協同にて F6F 40機以上、四発 1機、機練数機炎上せしむ
		4	上飛曹 中村義信	他機と協同で F6F 1機撃墜
		5	一飛曹 杉山光平	被弾 2 発

経過

10 月 29 日 バムバム邀撃戦、敏美 2 機撃墜

この日、タクロバン飛行場に向かう予定だったが、3 度にわたってバムバム基地に 140 機が来襲、その都度、バンバム基地上空で邀撃戦が繰り広げられた。敏美は第 2 次邀撃隊として 12 時 50 分に発進、15 分にわたって約 70 機と空戦を展開、その間に F6F 2 機を撃墜して地上員を狂喜させた。

653 空は 6 機以上撃墜したが、宮村栄太郎飛長、諸橋大輔一飛曹、中村常石上飛曹が未帰還となった。

敏美たちがバムバム基地上空で邀撃戦を行っている一方で、石森中尉と前田上飛曹は特攻隊至誠隊の艦爆 3 機、彗星 2 機の直掩隊としてニコスフィールドを出撃、至誠隊はルソン島東方海上の敵機動部隊へ突入した。

正規空母「イントレピット」に 1 機の特攻機が命中していたことが確認されている。これは石森中尉が直掩した「忠勇隊」の彗星に登場して出撃していた野山尚一飛曹、小林裕吉一飛曹の挙げた戦果とみられている。

石森中尉は、ひきつづき、レガスピー基地から、特攻隊至誠隊の艦爆 1 機を直掩して出撃した。その間に F6F を 1 機撃墜したが、みずからも 1 発被弾した。

鈴木正一上飛曹と大田吉五郎飛長は、特攻隊至誠隊を掩護して出撃、F6F 1 機を共同で撃墜、至誠隊の九九艦爆はマニラの 80 度、20 カイリの地点で突入したが、直掩の 2 機は、池田たちが夜遅くまで南の空を見つめながら待ったが、遂に未帰還となった。

昭和 19 年 10 月 29 日の戦闘詳報

タクロバン飛行場攻撃制圧 爆撃隊直掩

バムバム基地邀撃戦〔1 次〕

1	2	1	飛曹長 横川一男	F6F 1 機撃墜 1 機不確実
		2	上飛曹 中村常吉	
		3	一飛曹 中矢長藏	
	3	1	上飛曹 白浜芳次郎	
		2	飛長 宮村栄太郎	戦死 未帰還

経過

零戦 5 機発進。F6F 30 機 FOF 約 20 機ヲ邀撃。敵ヲ 80 度方向ニ撃退ス。

戦果（協同）F6F 1 機撃墜、1 機撃墜（不確実）。

バムバム基地邀撃戦〔2 次〕

1	1	1	大尉 中川健二	F6F 1 機撃墜
		2	上飛曹 白浜芳次郎	
		3	一飛曹 中矢長藏	
	2	1	一飛曹 杉山光平	
		2	一飛曹 諸藤大輔	戦死 未帰還
		3	二飛曹 坂本 清	

	4	飛 長 志賀敏美	F6F 2機協同撃墜
--	---	----------	------------

経過

1205 空襲発令ニヨリ零戦7機発進

1400 80度方向ヨリ F6F、FBF 約 70 機来襲スル敵ヲ発見シ、直チニコレヲ邀撃、空戦 15 分間ニシテ 70 度方向ニ撃退ス。

？（飛行場銃撃並ビニ爆撃、針路ニ入ッタ敵ヲ捕捉）

戦果 1 小隊 1 番機 1 機撃墜

2 小隊 4 番機 2 機撃墜

1500 帰投、異常なし。

1. バムバム基地邀撃戦〔3次）

横川 飛曹長	1	横川 飛曹長	1	1	飛曹長 横川一男	
				2	上飛曹 中村常吉	戦死 未帰還
				3	飛曹長 中仮屋国盛	
				4	一飛曹 杉山光平	F6F 2機撃墜
			2	1	飛曹長 小平好直	
				2	二飛曹 池田速雄	F6F 2機協同撃墜

経過

零戦 7 機発進 80 度方向ヨリ来襲セル F6F 約 50 機ヲ発見、直チニコレヲ攻撃、80 度方向ニ撃退セシム。

戦果 撃墜 2 機（協同）、被弾未帰還 1 機

4. 忠勇隊直掩並びに戦果確認（体当たり機は艦爆 3 機、彗星 2 機）

			1	1	中 尉 石森 學	空母 1 隻、巡艦 1 隻炎上
				2	上飛曹 前田秀秋	艦種不詳 1 隻沈没するを確認

経過

零戦 2 機、艦爆 3 機、彗星 2 機ノ直掩デ、ニコスフィールド基地発進。

戦果 Q×1、C×1 炎上。不詳艦種 2 轟沈スルヲ確認。

5. 至誠隊直掩並びに戦果確認（体当たり機は九九艦爆 1 機）

			1	中尉 石森 學	F6F 1機撃墜。被弾1発
--	--	--	---	---------	---------------

経過

零戦1機、九九艦爆1機ノ直掩。レガスピー基地発進。

6. 至誠隊直掩並びに戦果確認 (体当たり機は九九艦爆1機)

			1	1 上飛曹 鈴木正一	2機とも未帰還、両機協同にて F6F 1機撃墜
				2 飛長 太田吉五郎	

経過

零戦2機、九九艦爆1機ノ直掩デ、ニコスフィールド基地発進。F6F 1機撃墜(協同)。

未帰還。

11月1日 セブ基地上空の制圧

セブ基地は特攻機の中継基地であったから、他の基地から特別攻撃隊が飛来する場合とか、出撃する特攻機を狙う敵機が頻繁に飛来した。これを排除するためのセブ基地上空の制圧が、この日、653 空中川大尉以下6機に与えられた任務だったが、敵機が現れないので、タクロバン飛行場の銃撃を行った。

このタクロバン飛行場銃撃で、中村義信上飛曹が未帰還となった。

この日、中矢長蔵兵曹は特攻隊至誠隊の直掩機で出撃し、特攻機九九艦爆がタクロバンの150度、50キロカイリで甲巡1隻に突入し轟沈させたのを確認して帰還した。

この日、敏美は「海軍二等飛行兵曹に任ずる」旨の辞令を受けた。これまでは「〇〇を命ずる」だったが、下士官になると「〇〇に任ずる」と辞令の文言が変わる。

タクロバン飛行場銃撃並びにセブ基地上空制圧

中川大尉	中川大尉	1	1	大尉 中川健二	F6F 1機撃墜
			2	上飛曹 白浜芳次郎	
			3	一飛曹 坪田与士雄	

		1	飛曹長 横川一男	小型3機炎上
		2	上飛曹 中村義信	未帰還
		3	一飛曹 中矢長藏	

至誠隊直掩並びに戦果確認 (体当たり機は九九艦爆1機)

			一飛曹 中矢長藏	甲巡一隻轟沈スルヲ認ム。
--	--	--	----------	--------------

11月2日 オルモック泊地上空哨戒

本日、敏美出撃の記録なし。中川隊長以下の行動は以下のとおり。

オルモック迫地では、前日に引き続き、第2次輸送部隊による日本陸軍地上兵団の揚塔作業が行われていた。クラーク基地から零戦、紫電延べ約40機が上空哨戒のため、午前と午後の2回にわたり出撃した。迫地には8時30分頃から午後にかけてP38、B24が来襲し、この間輸送船が1隻沈没した。輸送部隊は大半の揚塔に成功して19時迫地を出港、帰途に就いた。

この日、中矢長藏一飛曹がオルモック湾上空でP38と空戦、遂に未帰還となった。

池田は

『俺は最後の一機になるまで頑張るぞ。みんなの遺品は、俺が内地へ持って帰る』とがんばっていた彼は、同郷で、空母瑞鶴以来の親友であり戦友だった。次々と南冥の空を血で染めてゆく。何ともやりきれない思いだった。これが戦争と云うものか……」

と回想記に書いた。

昭和19年11月2日

オルモック迫地上空哨戒 (一次)

大川	大川	1	1	大尉 中川健二	FBF1機撃墜
----	----	---	---	---------	---------

			2	一飛曹 中矢長藏	
			3	上飛曹 白浜芳次郎	
			4	一飛曹 坪田与士雄	

オルモック迫地上空哨戒（二次）

			1	一飛曹 中矢長藏	未帰還、他隊と協同にてP38 5機撃墜（内1機不確実） B24 1機撃破
--	--	--	---	----------	--

11月3日 タクロバン攻撃 中川隊長帰還せず

正午過ぎ、6機の零戦でレイテ湾ドラッグ飛行場銃撃隊が編成された。わが653空から4機、他隊から2機、計6機で出撃することになった。黒板に氏名が大きく書かれた。2機ずつの編隊で突入する。653空は杉山光一飛曹と今村明二飛曹、池田速雄一飛曹と志賀敏美二飛曹がペアを組んだ。他隊の2名は島田兵曹と村上兵曹であった。

13時、基地指揮官の前に整列した。指揮官は、

「6機の零戦でドラッグ飛行場を銃撃せよ、攻撃後はセブ基地に帰投し、レイテ湾を反覆攻撃せよ。あとは、セブ基地指揮官の命を受けろ」

言い終わると指揮官は大きな手を差し出し、一人ひとりと訣別の握手を交わした。

「よし！ 中川隊長に続くんだ」

と、皆の心は既にレイテ湾に飛んでいた。

出発直前「志賀兵曹！ いよいよ今日が最後になるかもな！」と声をかけた。「後に付いて行きます」の元気な声に、「よし！ 行くぞ！」とサインを送った。

帽振る隊員に見送られながら6機は勢いよくバンバム基地を飛び立った。杉山機につづいて池田機、島田機、そして敏美機と続いた。しばらく飛んで、

セブ島が見えて来た。わが基地上空を味方信号のバンクを振りつつ通過、高度を上げて海上に出た。

遙か東方にレイテ島の山々が見えて来た。レイテ島西海岸に陸軍部隊が逆上陸中であった。広いレイテ湾には、今まで見たこともないような数の敵艦船群がいる。何百隻もの艦船に圧倒され度肝を抜かれた。志賀二飛曹が盛んに敵艦を指差している。「これは凄い！」と口にした。

標高 2000 メートルもあろうかと思われるマホナク山に続く山々を越えれば、レイテ湾は指呼の間、白波を蹴って走る上陸用舟艇が湾一帯に見える。陸地と艦船からいっせいに発射された高角砲弾が炸裂し、高度 2000 メートル付近は赤黒い弾幕に覆われる。

ドラック飛行場が見えた。数キロ手前では、日本陸軍部隊が苦戦中だ。上空の零戦掩護隊を見上げ、手を握りしめて見守っていることだろう。

「海軍零戦隊の腕前をよーく見てくれ！」

そう思った。杉山二飛曹の指差した合図に応え、突入を島田機へと知らせた。飛行場には大型機 3 機、小型機が数機見える。先日の銃撃で焼けた残骸が何 10 も見えた。何 10 台の車両か戦車か、他に何があるのか分からなかった。

高度 1500 メートルからいっせいに急降下で突入した。飛行場右方に杉山、今村両機、左方海岸側に池田、志賀の両機、中央に島田、村上両機、敵の曳光弾が上下に集中してきた。足が 2、3 度、がくがくと武者振りした。機銃も裂けよとばかりに撃ちまくった。

フットバーを左右に蹴りながら、全速で飛び越えた。目の前が曳光弾で真っ赤になった。心臓が止まる思いだった。列機を見るゆとりはなかった。だが、ふと気付いて振り向くと、左後方に志賀二飛曹が、身をかがめて盛んに右後方を指差している。振り向くと島田機が燃料を噴きながら飛んでいた。自爆寸前だった。すでに村上機は見えなかった。

曳光弾が後を追ってきた。全速で山間いを縫うように上昇した。飛行場には

無数の黒煙が昇っていた。タクロバン上空を目指したが、島田機と列機は視界から消えていた。4機はレイテ湾上空を旋廻中、高角砲は止むことなく、弾雲が出来ていた。

タクロバン上空で、わが零戦8機を発見、その直後、高度4000メートルくらいに敵P384機と2機を発見し、全速で零戦が追う。わが8機は2隊に別れて空戦に突入した。全機撃墜するのに10分とはかからなかった。被弾したのか零戦2機は途中でセブ基地に向かった。8機の中に、中仮屋国盛飛曹長と小平好直飛曹長がいたことを後で知った。

池田らの4機も、セブ基地に向かった。夕陽が真っ赤に空を染めていたころ、セブ基地に着陸した。機最前線とあって整備員は皆殺気立っていた。今村機の被弾が一番多かった。基地の指揮官に報告した後、仮兵舎でマズイ食事をしていると、白浜兵曹にばったり出会った。地獄に仏の思いがした。

セブ基地はレイテ島の西方約100キロにあり、味方機の夜間攻撃に対する敵の対空砲火の炸裂が、作戦室から見えるほどの近距離にあったから、レイテ方面の偵察機や攻撃機が頻繁に飛来した。また、マバラカットで編成された攻撃隊の中継地や不時着機の受け入れ地ともなっていた。

夜、「明朝6時出撃してタクロバン上空制圧に出撃」の伝達があった。わが軍の指揮下にあるとは言え、異国の地で、他部隊の名前も顔も知らない者同士と、この夜が最後となるかも知れない、なんとも言い難い寂しい夜を過ごすことになった。その夜は、何度も空襲と爆弾の響きで、まんじりともせず一夜を明かした。

早朝5時半、セブ基地を発進してタクロバン飛行場攻撃に向かった中川健二大尉と列機の坪田与志雄兵曹が、飛行場上空でF6F約40機と空戦し、遂に未帰還となった。

中川隊長は、残り少ない部下の指揮官として常に先頭に立って勇敢に戦った。連日のように出撃し邀撃戦を勇敢に戦い大活躍だった。敵機を撃墜すると、

帰投後必ず「おい！ 俺の撃墜を見たか！」と鼻息荒かった隊長も、タクロバンの地に炎となって散った。

昭和 19 年 11 月 3 日

タクロバン飛行場攻撃制圧 爆撃隊直掩

1. タクロバン飛行場攻撃

	1	大 尉 中川健二	未帰還・戦果不明
	2	一飛曹 坪田与士雄	未帰還・戦果不明

経過

0530 セブ基地発進

0640 飛行場上空に於いて空戦（F6F 約 40 機）、地上防御砲火猛烈ニシテ目的ヲ達セズ。

2. タクロバン飛行場制圧

		1	飛曹長 中仮屋国盛	P 38 1 機撃墜、他隊と協同にて P 38 4 機撃墜
--	--	---	-----------	----------------------------------

経過

0800 バムバム基地発進

1030 セブ飛行場上空着、P38 約 10 機発見、コレト交戦、1 機撃墜。セブ基地ニ帰投、目的ヲ達セズ。

3. タクロバン飛行場制圧

杉山上飛	1	杉山上飛	1	1	一飛曹 杉山光平	
				2	二飛曹 今村 明	
				3	一飛曹 池田速雄	
				4	二飛曹 志賀敏美	

経過

1230 バムバム基地 零戦 4 機発進

1415 攻撃センチモ戦果不明。異常ナシ。セブ基地帰着。

11月4日 タクロバン上空制圧

早朝、セブ基地指揮官より「タクロバン上空制圧」の命令を受け、零戦へと急いだ。整備員は徹夜で整備を完了していたが、機体には4機とも増槽タンクの代りに、60キロ爆弾を取り付けてあった。

「これは、どう言うことか？」と聞いていると、整備分隊士が走って来て、「ついでに敵地に落として来い」と言うことだった。万一、敵機に遭遇すれば、躊躇（ちゅうちょ）せず投下すればよいと思い、爆弾を抱えての出撃となった。

今日は自分が1番機である。「よーし、行くぞ！」大勢の基地員に見送られ勢いよく飛び発った。20分も飛ばればレイテ島は視界内だ。彗星艦爆隊がレイテ湾攻撃に向けて後続するはずである。眼下にはポロ島、ポンソン島の島々が静かな平和な島に見えた。

爆弾を抱えているので、敵機の奇襲を受けないよう特に見張りを厳重にして飛んだ。眼前に広がるレイテ湾は、昨日と同じく、激しい弾幕が空一面に、見る見るうちに広がった。

タクロバン飛行場は、海岸に沿って長く突出している。上空旋回中、零戦4機が接近してきた。胴体に白線1本が入っていた。友軍機だ。タクロバン上空で、この4機と左右に別れた。

その後、列機に爆弾投下の合図を送り、急降下して、いっせいに投下した。機体を引起した直後、志賀二飛曹が私の左翼にまだ爆弾が残っていると、指差し合図をしてきたので、もう一度急降下して引き起こし、重力をかけ、爆弾投下把手を力強く引いて投下した。

爆弾は地上に吸い込まれるように落下していった。高度3000メートルであった。レイテ島先端近くの小さな港附近で大爆発が起き、もうもうと黒煙が昇

っていた。あの盲爆で、燃料タンクにでも命中したのだろうか何回も焰を噴き上げていた。

ガリガラ湾方向に、先ほどの零戦の急降下しているのが見えた。その下方の雲の切れ目に、低空でB24 2機がレイテ島に向かっていた。その右上空にP38 2機が同行している。まだ、われわれには気付いてないようだ。私は右に急旋回し、P38に照準を合わせ発射しながら突入した。杉山一飛曹が手を揚げて付いて来た。

志賀二飛曹は機銃を撃ちながらP38 1機に食い付いている。レイテ湾上空まで追撃して、今村一飛曹が2機に最後の止めを刺した。右方向舵を吹き飛ばした。もう1機を私と志賀二飛曹で追尾したが、急降下され、そのスピードに付いて行けなかった。

かの4機の零戦隊、われわれがいなかったなら何機かは犠牲になったであろう。アナバダス海峡近くに来たときは敵機は見えなかった。後日、B24 3機を撃墜・撃破の戦果は、653空戦闘機の適切な応援の結果だったと、セブ基地から通報を受けた。

レイテ島の海岸を左に見ながら、レガスピーへと急いだ。基地は空からは判別がつきにくい飛行場だった。上空を旋回していると“着陸差し支えなし”の吹き流しが揚がった。椰子林の中に帯状の滑走路があった。着陸すると、整備員が駆け寄ってきて、飛行機を椰子林へ誘導し、上空から発見されないように偽装した。1日に何回も敵機が飛来すると言う。

整備点検と燃料補給をお願いし、仮指揮所へ行き戦況を報告した。指揮官は年配の中佐だった。報告後、レイテ湾の戦況、マニラ方面や内地の事情を心配そうに訊ねられた。そして「ここは陸の孤島である。時々不時着機がある程度で、いずれ玉砕だろう」と、心細そうに話していた。

基地には200名位の海軍が居て、町には陸軍が居るらしかった。久しぶりにゆっくりと食事をご馳走になった。静かな別天地の様ところが余計無気味

さを感じさせた。休憩中、伝令が走ってきた。「今、タクロバン上空に敵戦闘機 60 機が飛来、山間部の陸軍部隊に猛攻中」との電報を持ってきた。

「それ来たぞ！」と礼のことばもそこそこに、急いで離陸した。暫らく上空を旋回した後、出発前に列機と申し合わせたとおり、高度 500 メートルで編隊宙返りをしてレガスピーをあとに、一路、戦友の待つセブ基地へと急いだ。

午後、レイテ湾上空に F6F 60 機飛来に情報があり、われわれの出撃が午後だったら、この F6F の大編隊に遭遇して全滅しただろう。早朝の出撃で命拾いをした、と安堵の思いをした。しかし、われわれ 4 機は無事還ってきたが、634 空の島田兵曹と村上兵曹といっしょに帰れなかったのが残念だった。

その夜は、椰子の葉で作った仮兵舎に、竹を敷き詰めた床に、毛布を敷き、薄暗いランプの蚊張の中でぐっすり眠りについた。皆、連日の戦闘で疲れ切っていた。

昭和 19 年 11 月 4 日

タクロバン飛行場制圧 爆撃隊直掩編制

杉山上飛	1	杉山上飛	1	1	一飛曹 杉山光平	B 24 3 機協同撃墜
				2	二飛曹 今村 明	
				3	一飛曹 池田速雄	
				4	二飛曹 志賀敏美	

経過

0700 セブ基地 零戦 4 機発進

0840 上空着。3 方ヨリ進入、反復攻撃（銃爆撃）後レイテ湾敵船団攻撃。戦果、輸送船 1 隻轟沈、飛行場 4 カ所、タクロバン市街付近 1 カ所火災。帰途、マリタン飛行場上空ニ於イテ B24 数機ト遭遇、コレト交戦 3 機を撃破（634 空 3 機と協同）セリ。

被害ナシ。レガスピー基地經由セブ基地帰着。634 空ニ未帰還 1 機アリ。

11月5日 セブ基地上空で空戦

午前7時30分、敏美らは4機でセブ基地を発進した。バムバム基地に向かう途中、マニラ上空とクラーク基地上空で敵機と交戦。バムバム基地上空で着陸態勢に入ろうとしたとき、F6F 2機の攻撃を受けて激しい邀撃戦となった。今村明二飛曹が被弾して発火、炎に包まれた機体から落下傘降下、重傷を負って野戦病院に送られた。

池田一飛曹は、FBFを攻撃中で今村を助けることが出来なかった、杉山一飛曹と志賀二飛曹も空戦中のまっただ中であつた。

クラーク基地には、7時40分から15時30分にかけて7次にわたって延べ230機が来襲した。

昭和19年11月5日

邀撃戦

編制

杉山上飛	1	杉山上飛	1	1	一飛曹 杉山光平	
				2	二飛曹 今村 明	被弾火災、落下傘降下負傷
				3	一飛曹 池田速雄	F6F 1機撃墜
				4	二飛曹 志賀敏美	

経過

零戦4機セブ基地ヨリ0730発進、バムバム基地ニ向カウモ、途中マニラ上空ニテF6F6機ト交戦、コレヲ撃退。戦果不明。

クラーク上空ニテ約10機ト交戦、コレヲ撃退。戦果不明。

バムバム基地上空ニテ最終着陸機、1小隊2番機ハ、誘導コース上ニアリタル時、F6F 2機ノ攻撃ヲ受ケ、コレヲ数分間攻撃セルモ被弾火災ヲ生ジ、落下傘降下、右足ニ被弾負傷セリ。

11月5日夕刻、石森中尉が待機所に来て、「明11月6日早朝、マバラカット基地から特攻隊が出撃する。わが隊は掩護隊として出撃する」と言いながら、

搭乗員の氏名を書いた紙片“搭乗割り“を藤島上飛曹に手渡した。

そこには、石森学中尉、志賀敏美二飛曹、前田秀秋上飛曹、志村勇作上飛曹の4名の名があった。

石森中尉はわが隊では、ただ一人生き残りの士官であった。その責任感からか、もう2度も特攻隊忠勇隊・至誠隊の直掩機として出撃し、空母1隻、巡洋艦1隻の炎上、轟沈を確認して生還していた。

11月6日 敏美、特攻直掩 2機撃墜後に自爆

セブ基地の空が白んだ。いよいよ敏美に特攻直掩としての出番が来た。石森中尉と敏美ら出撃隊員4名は準備を完了して待機していた。池田一飛曹は「志賀兵曹！今日は石森中尉とペアだ。元気で帰ってこいよ！」と声をかけた。敏美は、にっこり笑って手を振り、機上の人となった。基地隊員一同、機影の消えるまで見送った。

「これが志賀兵曹と永遠の別れとなった。儂なきは人の命、征くも残るも地獄、それが戦場だった」と池田は回想した。

石森中尉以下4機は、いったんマバラカット基地へ飛び、そこに待機していた特攻隊鹿島隊の彗星3機の直掩隊として出撃した。夕刻、石森中尉が1機で戻ってきた。ランプの灯りの下で、石森中尉は、みんなに、当日の敏美の活躍について説明した。

「わたしは志賀二飛曹と、701空特別攻撃隊鹿島隊の彗星3機を掩護して、午前7時、マバラカット基地を発進した。ルソン島東方敵機動部隊を攻撃、F6Fと空中戦となり、志賀兵曹は2機を撃墜したあと、自らも被弾、彗星を抱きかかえるように上空をカバーし、彗星の突入を成功させた」と涙を浮かべながら語った。



昭和19年11月6日、第4神風特別攻撃隊の出撃壮行会で第1連合基地航空部隊指揮官福留中将の訓示を受ける同隊隊員。この日、残存艦爆隊から第4神風特別攻撃隊として鹿島隊、神崎隊（以上九九式艦爆各3機）、湊川隊、香取隊（以上彗星艦爆各3機）が編成された。

3・4番機の志村上飛曹と前田上飛曹は、特別攻撃隊香取隊の彗星3機を掩護出撃したが、エンジン故障のためマバラカットに引き返していた。両名は201空から、零戦は特攻用にと取り上げられ、そのままマバラカットに留め置かれたが、翌7日、石森中尉の内地行き便に同乗して帰国した。

●653空164・165戦闘機隊戦闘詳報

昭和19年11月6日

神風特別攻撃隊直掩並びに戦果確認編制

石森中尉	1	石森中尉	1	1	中尉 石森 學	
				2	二飛曹 志賀敏美	自爆 F6F 2機協同撃墜
				3	上飛曹 前田秀秋	引き返す
				4	上飛曹 志村雄作	引き返す

経過（一）鹿島隊（彗星3機）直掩

0700 マバラカット東基地発進。敵 Kab 発見直前 F6F（敵戦闘機）6機ニ

遭遇セルタメ彗星隊ト分離、マバラカット東基地ノ 1320 度 200 哩ノ KdB
ヲ攻撃セシモ、付近ヲ 1 小隊 1 番機（石森中尉）、単機ニテ 1 時間 KaB
ヲ捜査セルモ輸送船ラシキモノ 1 隻認メタリ。

1 小隊 2 番機（志賀敏美）ハ、残り F6F 6 機ト交戦、ソノ 2 機ヲ撃墜セ
ルモ被弾、火災ヲ生ジ自爆セリ。

1000 マバラカット東基地帰投。

※ 上記括弧内の氏名は引用者注記

経過（二）香取隊（彗星 3 機）の直掩

0700 マバラカット東基地発進。

0730 2 小隊二番機（志村雄作）、発動機不調ノタメニ引き返ス。

マバラカット東基地ノ 80 度 200 哩ノ KaB ヲ攻撃セルモ、敵戦闘機ノ
邀撃ニ遭イ戦果確認シ得ズ。マバラカット東基地帰投。

11 月 6 日現在の

保有機数 9 機（10 月 24 日現在 25 機）

作戦可能機数 8 機（同 24 機）

比島戦に参加して以来、勢力は 3 分の 1 に減少していた。

「特別攻撃隊 戦闘詳報」に記録されている「第 4 神風特別攻撃隊の経過概要
（第 701 海軍航空隊）」には、次のように記録されていた。

一、 第 4 神風特別攻撃隊ハ海軍大尉柏井宏ヲ隊長トシ香取隊、鹿島隊、
神崎隊及湊川隊（以上 11 月 6 日編制）並ニ第 2 神風特別攻撃隊ノ
中神武隊ノ 1 機ヨリナル 但シ湊川隊ハ予備トナス

二、 各隊の作戦経過

（一） 香取隊、鹿島隊及神崎隊ハ「ルソン」島洋上ノ敵 KDB 索敵攻撃
ノ命ヲ受ケ香取隊 1 番機ハ未帰還、2 番機ハ 1330 帰投、3 番機ハ
1500 「ラオアグ」ニ不時着、鹿島隊 1 番機ハ敵発見シ得ズ 1130
帰投、1430 再発進 敵空母ヲ捕捉突入セルモノノ如シ 2 番機ハ
敵ヲ見ズ 1230 帰投、3 番機ハ「マニラ」ヨリ 70 度 70 哩附近ニ
於テ「グラマン」戦闘機ト交戦自爆ス

当時の編制次ノ如シ

攻撃隊	中 尉	田邊 正	少 尉	工藤太郎
	一飛曹	山口善則	一飛曹	酒樹 正
	二飛曹	吉村 正	一飛曹	池田亘 (遺骨)
	上飛曹	蒲谷良平	飛曹長	吉田正毅
	上飛曹	小林正三	上飛曹	肝付良志
	二飛曹	下平鶴三	上飛曹	石橋 光
掩護隊	中 尉	石森 學		
	上飛曹	前田秀秋		
	<u>二飛曹</u>	<u>志賀敏美</u>		
	一飛曹	志村雄作		

- (二) 神崎隊ト帰還セル鹿島隊ノ 1 機及香取隊ノ 1 機ハ同一任務ヲ以テ
7 日 0700 発進、予定地点ヲ搜索セルモ敵ヲ発見シ得ズ、神崎隊 1
番機ハ 1430、2 番機ハ 1845、3 番機ハ 1430、4 番機ハ 1840、5
番機ハ 1430 全機帰投セリ

当日ノ編制次ノ如シ

攻撃隊	上飛曹	北村良二	大 尉	柏井 宏
	一飛曹	小嶋音吉	上飛曹	萩原茂男
	二飛曹	栗山 登	上飛曹	和久田道雄
	上飛曹	小林正三	上飛曹	肝付良志
	一飛曹	山口善則	一飛曹	酒樹 正

戦果確認機 (陸軍飛行第 38 戦隊 102 司偵)

陸軍中尉 柳川 寛
陸軍中尉 柏田 栄

653 空、解隊

11 月 7 日早朝、石森中尉は、「これからマバラカットへ飛び、航空便があり次第、前田、志村を連れて大分基地に戻り、653 空本部に戦況、経過の報告と生存隊員の救出を手配してくる」と言ってセブ基地を発った。

(石森中尉はフィリピンに戻ることなく、翌 20 年 4 月 12 日、701 空から

沖縄に出撃して戦死した。そして、志村上飛曹は、同年2月21日爆撃隊を護衛して出撃して敵戦闘機を撃墜自爆、前田上飛曹もまた5月9日に戦死した。）

残された653空の直掩隊員、池田一飛曹ほか横川飛曹長、中仮屋飛曹長、杉山一飛曹の4名は搭乗機を、「特攻機用に使いたい」からと201空副司令の玉井中佐に取り上げられてしまった。

「1カ月前の出撃時は70余機の威風堂々たる大戦闘機隊だったが、最後に残った4機も特攻機用に取り上げられては戦争にならぬ。一度、内地に戻り零戦を手に入れて出直そう」と、相談はまとまったものの、内地に帰還する方法がない。たまたま飛来する艦上攻撃機などに便乗を頼み込むしかないのであった。

白浜芳次郎上飛曹もセブ基地着陸と同時に零戦を取り上げられたが、おりから飛来した653空の艦攻にうまく話をつけ、これまた、「一足に先に帰るが、また零戦を持って進撃してくる。それまで元気でいろよ」と言い残してセブ基地を離れていった。

（白浜上飛曹は帰国後、再編601空310戦闘機隊で池田、平野らと再会、ともに終戦まで戦い抜いた。）

石森中尉に取り残された池田は、敏美の遺品の整理をしながら、次のように回想した。

「志賀二飛曹よ、恐怖も命への執着も総てを乗り越え、つい先日まで夢中で戦った仲だったのに、とうとう未帰還となってしまった。特攻機が突入するまで護り抜き、存分に戦った。

勇敢に弾雨の中を突入し、決して怯むことなく、あの果敢な闘魂は何処からの発露だったのだろうか、素晴らしい空戦感は生れつきの天性だったのか、いっしょに編隊を組んで出撃したときは実に心強かった。あの笑顔が

脳裏に焼き付いて未だに離れることはない」

11月も半ば過ぎた頃、大分基地から副司令が全滅状態になった653空の調査に飛来した。池田一飛曹、平野一飛曹たちは、かろうじて、一式陸攻に救出され鹿屋基地に帰ることができた。

11月15日、653空は”解隊”と記録された。先発隊が大分基地を出撃してわずか1カ月のことだった。